

武士生活と  
死、其信仰と  
浄土教との關  
係

武士道が殊に貴族、庶民の生活と異なる特色は、其日常に死を以て一切を處せる點にあり。平日笑つて死生の巷を出入し、氏神を信じ、家の譽を思ひ、沈勇と果斷とを好んで事に處せる彼等の宗教上の信仰は、死を懼れ、現實に執着し、名利と快樂とに没頭せし貴族及び庶民の徒と、最も基調を殊にせざるべからず。貴族及び庶民の滔々として奔りし教は即ち彌陀往生の易行門なり。之に於てか集中の説話は、武士の團體に對して、浄土念佛の宗旨が、如何に場所錯誤、Anachronismを演じたるかを證するもの歴々として指點するを得るもの甚だ多かりき。

今斯くの如き宗教界を社會的に觀察すれば、天台眞言の二教ありし裏面に、念佛往生の浄土的信仰行はれ、其前者は階級的に文化に富める上流の社會に於てし、其後者は、文化に低き中流以下に於て、其勢を逞うしたりしが、第三文化時代を経て後期に入るや、茲に社會的要素の重心は、漸く貴族を離れて、新時代のリーダーたる中流の武士團と京人ならぬ地方の豪族等に移り行けると共に、茲に現出したる新時代の國民的宗教意識は、云ふ迄もなく、已に多數の庶民階級に弘布したりし念佛往生を専らとする他力主義の浄土教に屬するものなりしなり。

當時の宗教界  
の國民的觀察

他力家に於け  
る庶民、武士  
の對照

所謂念佛思想は、絶對に平等主義なり。他力主義なり。消極主義なり。無我主義なり。只我を捨て、偉いなる彌陀の本願に縋るべしと云ふ。故に現實に恐怖し自覺に乏しく、僅に一日の苟安に満足して活き得たる庶民に對しては、無上の便法たりしに相違なし。然れども新時代の要素は獨平民のみにあらず。否平民の先頭に立ち、新時代の棟梁たりし者は、實に地方豪族及び武士團體なりしを以て、主從關係を骨子とし、死生の間、日夕出入する彼等にとりては、單なる念佛主義は決して權威ある宗教上の信條を與ふる所以にあらず。何となれば、彼等は現實に恐怖せず、又義務と名譽とを重んじて、我の力を信ずること甚だ厚かりし者なり。全く盲目的に、全く隨伴的に、又全く平等的に、全く哀願的に、彌陀の本願に縋ると云ふが如きは、少くとも思慮あり、覺醒したる武士階級の満足せざる所なりき。

故に文盲卒直なる源太夫(卷十九、第十四)は、似非法師の殊勝らしき浄土往生の説法を聽くや、端的に汝は極樂を見たりや、何ぞ現前に其功德を示さざるかと詰り問ひ、一刻の猶豫もなく其眞非を體驗せんとして山野を道ひ歩き、果は餓ゑて遂に命を捨てぬ。多田滿仲の出家譚(第十九)の如きも、一面より見れば、單に誇張したる心理を利用したる迄にして、武士の眞と

武士團の生活  
精神と浄土教



の要求とは相關せず。頼信父子の話にても、致經の話にても、何となく一種の寂びて精鍊せられたるが如き氣魄の存するものなくばならず。而してこれ純粹他力を以て、力を捨て、心を捨て、我を無きものにし、聲を揚げ、涙を垂れて佛に絶るべしと云ふ淨土教の主張を以て抱擁すべからざる所のものにして、彼等の信仰上の要求は、若し之れ有りしとせば、愚夫愚婦を隨喜せしめたる念佛宗以上、更に上品にして氣魄ある自力的の信仰にありしや明かなり。情の宗教にあらずして、意の宗教にありしなり。達磨禪若くは台禪の宗教史的事實は兎に角にも、斯る武士階級の生活と心理とに對しては、禪門の宗義の適合したりしは寔に當然にして、從來鎌倉武士が翕然として其法幢の下に走りしもの所以なきにあらざるなり。芳賀博士は曾て此問題に就いて、『禪宗が武家時代に入りて、特殊の發達を遂げ、其道德教育の中心となれるは、素より獎勵の結果に出づるも、又其教義の形質が、武士の精神に合致するものありしに因らずんばならず。平安時代の天台眞言は要するに貴族的にして、又學的なり。徒らに煩瑣にして單純ならず。之に反して禪宗は本來樹下石上主義の教にして、不言實行、無學簡素を主とする武士に適合したるなり。武士が未練執着なく、勇往して安心立命を得るは禪機の大なるものにして、解脱は武士の好める氣風たりしなり。一

氣魄と自力的  
信仰、禪宗と  
武士精神

意志の宗教と  
武士道の完成

集の説話文學  
の表現と武士  
的新時代

敬神尊王思想  
と佛教文學の  
傾向

が武家に排せられ、一が武家に採用せられたるもの偶然にあらず〔鎌倉室町時代小説  
史總論一節取意〕と評したることありき。蓋し飽迄積極的、意力的なる武士の生活より湧出したる武士道は、時代を漂蕩したる消極的、他力佛教の念佛宗に満足すべからざりしなり。されば其武士道の完成すると相伴ひて、偶、之が闕陥を満たし易き性質ある禪宗を迎へて、以てその徹底的、意力的な一面を攝取して、日常、自家信念の中樞を活潤せんとしたるは、極めて自然の要求に出でしものなりき。

集の説話に、如上の淨土教の弘布、庶民級の覺醒、武士團の興起、武士道の形成、禪宗的教義の要求等に涉れる時代の開展が最も重大に反映せられたるは、何人にとりても多大の感興を催すを疑はず。茲に來つて讀者と共に、數百年前の説話文學を通して、直接具象的に新時代の有力なる要素の勃興し來れる經路を較、明確に推知し得るは頗る快心事ならずや。

#### 第四 國民的道德

前述の社會的生活に關するもの以外、主として説話にあらはれたる國體思想、もしくは當時の國民性に原由する稍固定的なる道德生活の如何なるものなりしかを見んに、敬神、尊王の思想は、著者の佛法的立場と説話の平等的性質とよりして甚だ明確ならざれども、前にも



例示したる尾張守の五節會の話等に窺ふべし。此話は舊弊の老人の語として擧げたるものなれども、一般の殿上人にても、素より斯る思想其物に疎かりしにはあらざりしならん。其他勅命を貴び、日本國土と人民とが悉く王地、王民にあらざるなしとする信念など隨所に表はれたるを見るべし。天下の早魃に僧に勅して龍に雨を降らしめて、國土と蒼生とを救ひ給へる話(卷十三、第廿三)聖人の身ながら、七度獄に到れる盗人を、世に難有く極めたる公の御敵なりと呼びし話(卷十五、第廿五)なども、その一端を示すものなるべし。又武則が遙かに王城を拜せし様や、主上の命には何物も恐懼せざるなかりし事等這種の例話はいと多し。只著者の主義と、説話の露骨性とより、往々尊貴の秕事をも憚る所なく直寫し、皇族に對する敬語などにも、間々省略せる節あれば、この方面に於ては流石に宮廷文學、貴族文學と呼べる、平假名草紙物語の精練彫琢したるに及ばざること遠しと云はざるべからず。其中或一二の説話に於ては支那及び印度の文獻、思想に影響せられて、稍我國體思想に反するが如きものすらなきにあらず。多くは當時の權臣、法師、無賴の徒の非行を誇張して、世人を警戒する意に出でたる説話ならんも、亦以て佛典及び支那の革命思想に影響せられたる一部の徒が、我固有の國體思想及び尊王感情に、やゝ疎きが如き言説を叙述して平然たりし風ありしを示すも

平假名草紙物語との比較

非國體的思想の説話

のならずんばあらず。

次に國民生活の全般に渡りて、その道德性の保證を與へたりしは既に第一章にても論ぜし佛法的教訓なりしが、就中佛教の所謂因果應報思想は、あらゆる方面に演繹せられて、國民の道德的生活に多大の感化を與へたり。乃ちそは忠誠、信實なる信仰の利益を鼓吹したると同時に、直ちに我國民性の内容に道德的大なる陶冶を與へたるものなりき。されば將門の誅滅をげに天罰と評し合ひ(卷廿五、第一)又冥報を信じ、親の因果の子に報うと云ひ、斯して國民の間には、自ら一種の人道主義の道德的に形成せらるゝを見たりしなり。これ等の人道主義が、自然の人情と結合して、最も顯著に彼等の上に現はれたるは、家族間の道德、就中親子の感情なりしは明かなるが、今當時の國民の家族的道德の如何を觀察せんに、先づ父子に關しても積極的なる表出をなせる幾多の説話あること、既に第一章、第二節、及び第三章、第二節等に述べたるが如し。茲に尙一例を擧げんに、卷二十九、第十一に、七八歳なる阿字丸と云へる兒が、瓜一つを盗み食へるに、父は里人の在地判をとり、久離勘當をなしたり。其子後又盜をして檢非違使に捕はれたりしも、父は先に勘當したりしが爲事無くて濟みたり。然るに世人の之を評するや、極めて賢かりける人かなとて其父を讚めたりと云へり。

人道的、佛教的國民思想の形成

家族道德と父子の心理

久離勘當の話



今之を江戸時代の、近松の戯曲艶姿女舞衣に於ける半七の父半兵衛、若くは冥土の飛脚、忠兵衛の父孫右衛門が、身は縦令刑累に觸るゝとも其子を助けざるべからず、我身獨り罪を免れたりとも、世の人如何ぞ我を賢き親と云はんやとの述懐あるに比すれば、所謂人情、道德の疎密日を同うして語るべからざるものあるを見ん。更に一例を引かんに、藤原師尹の、若君の硯を破りし咎にて其子を追ひ出せし話(卷十九)にても、其親子の情、江戸時代以後の國民的道德性とは大に異なるべし。但し其子の將に病死せんとするを見て、『百千ノ金銀ノ硯トナモトモ何セン』と嘆く所は、流石に萬葉集に山上憶良が『白銀も黄金も珠も何せんに』と歌へる思想に共鳴して、恩愛の情の千古に變らぬ趣見えたり。然れども下野公助の話、頼信の話、兼忠の話等一般の上より見るも、父子の間何となくよそ／＼しく、親は子を戒め掟とするも、愛情の之に伴はぬ趣あるは否みがたかるべし。少なくとも、稍成年後の父子の關係は、其形式的の作法の嚴なりしにも係はらず、近代に比して、猶冷々たりしが如し。是等は其生活が、父子全然別居制なりし事も大なる原因なりしならん。但し子の側にありても、名物の爲には親をも救はず、知らぬ顔して過ごせし様、忠兼の瀧口所にて父の雨中をぬれ行くに傘さしかけしを、時人の讚め評せし語氣(卷十九)の裡などに表はれたり。

母子の道德、  
棄子と繼母の  
風

養子の風、兄  
弟の道德

母子の愛情は、父子のそれに比すれば、大いに濃かなりしが如きも、棄子の惡風盛んに行はれ、繼母を迎ふるものも頻りなれば、すさまじき物語も少からざりき。かの兄弟の獵師の母が、年老いて子を食はんとして山に行きしに、子の爲に片手を切られたるを、『人ノ祖ノ年痛ク老タル必ス鬼ニ成リ此ク子ヲモ食ハル爲ル也ケリ』(卷廿七)など評したる、如何に荒涼たる人生の思想ぞや。娘の家に飯を乞ひに行けるに、夫と我との食料のみなりとて與へざりし話(卷廿二)なども見ゆ。然れども、是等は餘りに怪奇、唐突なる説話にして、もとより一般の國民道德の斯る性質のものにはあらざりしならんも、親子間にさる冷味の生じ易かりし世相なりしは想像し難からず。但し之と反對に、淀河洪水話(卷十九)の法師は我一人子を見殺しにして、其老母を救ひ上げ、蓮圓は母の地獄の苦を救はんが爲に、半世を費して不輕の業を修したる話(卷廿八)なども絶無にあらず。養子の風もとりこと云ひて、今よりも多く行はれたるべし。更に兄弟の間にては、史實にも集の出でし先に藤氏の叔、姪、兄弟相食み、集の出でし後に源平二氏骨肉相賊せしが如く、寧ろ時勢の傾向にして其悖徳も深く怪むに足らざりしならん。兄弟にして、私慾の爲に相殺すものさへありき。(卷廿六) 武士團にありては、氏族の精神、家の思想を中心とするものなるが故に、その關係は比較的鞏固なりしも、貴族、



江戸時代の家  
族道徳との比  
較

夫婦の道徳

女子の貞操と  
時代思潮

殿上人の家庭

庶民の間にては、各一家を構へてより後は、名利の爲には風馬牛の如きもの多かりしなり。蓋し我族姓制度の餘勢未だ盡きずして將に破れんとする平安時代の社會組織は、其後期より勃興して家、氏の思想を中心としたる武士社會の極度の發達をなせる江戸時代の道徳に比すれば、遙かに個人本位にして、且低級なるものなりしに相違なく、人情主義の見地よりして當時の社會組織と世風とが、索漠として情味をかけるものなりしは明かなり。

次に夫婦の道徳に就いて見るに、一夫多妻の風行はれたるものながら、自ら正妻と目すべきものあり。或は門地の正しきより、或は最初の結婚たるよりして、その本の妻を厚うするは、世人の一般に是認したる所なりき。當時の女子の貞操觀念は、後代に比して著るしく微弱なるものとなりて、説話の中、極端なる事例に當りても、女子の無節操、無氣概を戒めたるもの一もなく、却つて、男子の無力の罪に歸せしもの多し。但し或る人妻の乞丐に捕はれて、辱められんとするや、幼兒を質として逃れ行き、數人の武者に救を求めしに、武者共、『子ハ悲ケレモ乞丐ニハ不近付シト思テ子ヲ棄テ逃トナシ讀メ感レシケ』と云へるは、極めて特色ある話なれども、これはた貞操觀念に出づる實際的の例話なりや否やは疑問なりとすべし。

殿上人などの家庭にありても亂雜のもの少からざりしは蔽ふに由なく、國經大納言が醉

時代の柔微な  
る國民道徳性

中、切なる時平に北の方を奪はれて、女の幸の爲るなりけりと悲歎せし話(卷廿八)や、殿上にて妻に狩衣を取りおこせしに、妻の不注意より留守に通ひ來りし法師の脱ぎ懸けし椎鈍の衣を疊みよこしたるなどの笑話(卷廿八)も見えたり。又土佐國の兄妹の漂流して孤島に上り夫婦となりし話(卷廿六)にて、何事もこれ宿世の致す所なりと評したるは、源氏物語に物の紛れ事件を觀ぜしと相近き思想なるべし。三代實錄に貞觀中、近江、伊香郡の人、石作部廣繼の女、年十五にして嫁し、卅七才に及びて夫常陸守死するや、哭して再嫁せざるを時人の稱して節婦となすと見えたるも、説話の上に心許なき當時の女流の貞操觀念を證するものあるに似たり。畢竟佛教と儒教とをもて、社會の内外より教化の盛んに行はれたる時代なりしかども、一は社會組織の性質上より、一は文化の爛熟化其物よりして、當時の國民道徳は一般に柔微にして必ずしも健固のものと言ふを得ざりき。國民的要求の一新したる武家時代に入りては、かゝる道徳上の方面にも、亦一段の生氣と革新とを喚起するの要有りしものなり。

### 第三節 文化的生活



第一 土俗と風習

説話中に現はれたる土俗的生活及び風習は、遙かに平安時代以前に渉るものあり。又佛典及び支那の文獻を通じて輸入せられたる異國的 *Exotic* の記述も少からざれば、之を以て直ちに平安時代中の一時期、例へば、第三乃至第五文化時代の民俗生活を反映したるものなりとは云ふべからざるに似たり。然れども、其大部分は猶、著者の心理を通じて、著者の周囲の生活に同化したるものなれば、之を以て凡そ平安中期の土俗と風習とを推知するの材料に供するも大過なかるべし。説話中に於ける土俗と風習とは、素より夫々特別の分科に屬して、細密なる研究にまつべきもの多けれども、茲には先づその大要につき、文獻的、土考古學的に、なるべく細目を多くして之を考察し、以て當時の生活の全般の把持に便すべし。土俗の中重要なものは、住居なるが、宮殿及び貴人の邸宅については素より、都會ならぬ地方人の陋屋、田舎の庵居等についても種々の記載を含めり。是等は勿論實用、裝飾、保護等の文化程度に於て、夫々相異なる發達を成せるものなれども、大體斯くの如き都會生活と斯くの如き地方生活とを包含せしものが、當時の文化の内容たる時代生活なりしと、通觀し得ざるにあらず。今是等の細目を、具體的に一個の生活中に形作りて記述するは、讀者に

集の説話と平安中期の土俗風習

住居と時代の生活

取りて頗る便ならんも、暫く其時を有せざるが故に、先づ主なる項目につきて之を列記する事とすべし。

住居の種々の記載

五條堀川邊の古家の様は、五間の寢殿に、組入天井、寢殿の中の橋隠の間、板敷の放出、持ち歩きたる疊、中の間、文挾、車宿、南の廂、戸ある塗籠(第廿七)とあり。塗籠の多かりし事は、前にも言へり。當時の建築は、脆弱なりし爲か風害にあへること多かりしが如く(卷十三)國史中にも其記事の極めて多きに適へり。

持佛堂も度々記さる。飛驒の白河村にも、大なる一室の寺の如きもの各家にありと聞けるが、さる制の物なりしにや、兎に角、單なる佛壇ならざりし事は明かなり。(卷十五)又五條邊の伊勢の御息所の住居は、伊衡勅使にて行ける條に、庭木立、前栽、庭苔、寢殿、南面、帽額の簾の語あり。中間の協廊にて案内を乞へるに、南面に寄居入らせ給へとて簾をあぐるに母屋の簾下りたり。朽木形の清き几帳、三間許立つ。東西三間許去りて四尺の屏風立てり。母屋の簾に添ひ、高麗端の疊を延べて、唐錦の茵をしけり。板敷鏡の如く物皆映りて屋の様古く神さびたり。香薰り、女房の袖口匂ひ、額つきなど透きて見ゆ。簾の許にて仰言宣ふに返事髭に聞ゆ。汗衫の美童銚子持ていざり出で繪扇に蓋を据えてさす。女房硯蓋に清き薄

堀川の古家と伊勢の御息所住居の細叙



様敷き、交菓子を出す。四五度飲めるに又簾より盞を出したり。次に紫の薄様に歌書き、同じ色の薄様につゝみ、女の装束を添へて押出す。赤色重唐衣、地摺の裳濃き袴也。女房いたく少將をめ、車の音前を追ふ聲聞えぬ迄見送ると叙べたり。(卷廿四、第廿一) 築垣、南北面、車借、勾欄、上下の葎、半葎、御隔子なども、屢見ゆ。讀者の胸裡には、此等の梗概に依りても、猶能く當時の住居と京紳生活の模様の鮮明に浮び來るものあらん。

庶民及び地方人の住居の制

西山の小家の細叙

庶民又は地方人の住居については、地火爐、土御門の馬出、平張、間木、竈、板敷の下、外堀式の館、陷窠、檜垣近き寢所、連子、檜皮葺、長押の枕、木柴垣、大屋形口、遣戸、出居、外居、切懸などの制語あり。壺屋は都鄙共に見ゆ。田居の小家、乞食小屋(卷廿五、第廿五)などの記事もあり。卷二十二、第七には、西山の小家の様を、檜垣、小唐門屋、板葺寢殿、東の三間許の小廊に馬を入れ、馬飼男居たり。檜網代の天井、網代屏風、高麗端疊三四帖、庇の遣戸など云へり。京都には大垣(卷廿二、第廿二)、羅城(卷十九、第廿五)ありし様、清水の舞臺の高かりし様(卷十九、第廿一)なども見ゆ。

時人の衣裝風俗

時人の風俗には女の市女笠、武張たる男の胡録負ひて馬に乗る風、さては、京の水銀商の淺黄の打衣、青黒の狩衣袴、練色の衣、厚綿三枚に菅笠をつけ、草馬に乗れる姿、又頭に物を載せて歩きし様(卷十六、第廿三) 日ノ装束、絹布、紙衣、田笠を被り蓑を腰にかけ、調布の帷の襖

調度器具

死人忌穢の習俗

きを被たる法師姿、白衣姿、下衆の水旱装束(卷廿六、第廿六) 黒き水干姿、淺黄の上下着(卷廿七、第廿五) 田舎女の白布の襖、中帶姿(卷廿六、第廿七) 貴人の狩衣、指貫姿、下男の丁子染、青鈍の狩衣、被姿、草色の布衣、直垂姿、盜賊の裾濃袴など見えたり。襖は武官の鬨腹の略制にして布狩衣なり。皮子に入れて、文綾十疋、美八丈十疋、疊綿百兩、六丈の白細布十段、紺布十段運ぶもあり。(卷廿六、第廿八) 後三年繪詞にも見ゆる綾、蘭笠も屢記されたり。調度には御厨子、碁秤、黒柿机、春日器、泥障、指入环、椀(サム)提、鏡、銀匙、折櫃、柱松、高足駄、平足駄、引入烏帽子、檜扇、寺冠、社冠、御器、大盤、紙障子、庖丁など見ゆ。武士、強盜などの打出太刀を帯べる事も此集に記されぬ。

時人の習俗には、又死人を厭ひ、穢れを忌みしこと甚だし。死屍は或は焼き、或は土葬せし様も見ゆれども、多くは道路に遺棄したるが如く、羅城門樓上、死屍堆積せる事など見えたり。史に承和九年東西の悲田に勅して、島田及び加茂河原の鬮體五千五百餘を焼かしめたりなど云へるも、座ろに想はるべし。播磨國、印南野に野宿せる男の話にては、田舎の葬式の様よく見えたり。(卷廿七、第廿六) 西の京の下毛野敦行が、隣人の死後、門の方位あしきが爲に、葬りに出づる能はざるを憐み、中垣を破りて已れが家の門より死人の車を出さしめしを、慈悲廣大と評し、天道も哀みけるにや、年九十迄も生き子孫繁昌せり(卷廿、第廿四)と云へるなど、よ



病者と老人の  
嫌棄

く當時の俗情を示すものなるべし。死人に次いで、病人もいたく厭み嫌はれしが如く、親族、主人にても病み伏したるものは之を屋外に出したること諸所に見えたり。これ春日權現験記(一九七)等の繪卷物にも、其様殊に凄慘に描かれたる所以にして、説話に見ゆる趣も當時の實情なりしかし。又老人の嫌厭せられたることは萬葉集歌の述懐の如く、姨捨山の話の行はれたる事にも見えて、斯る方面の道德は一般に頗る幼稚なりしが如し。

物忌、方違、信  
心風習

物忌の頻りに行はれし爲にや京中の空屋も甚多くして、空屋について鬼靈などの物語の附せしも従ていと多かりき。方違をして出で歩き、或は京に入るにも、忽に大津、山崎邊にて、小家に二三日日を消するもありき。打蒔米して鬼を追ふことなども見ゆ。信心風習も佛教の行はれたるに伴れて到る處に記されたるが、伊勢の老婆の毎月上旬は佛事を營み、下半は世事を力めて世渡りせし話(卷十五)に其趣殊に著はなり。老婆は日比香を買ひて寺に持行き佛前に供養し、春秋の山野に時々の花を摘み、香と共に捧げ、又米鹽菓子など貯へて諸僧に供するを例としたりと云へり。これ殆んど近世の民間に見る篤信の老人の生活と大差なかるべし。棄子の風も意外に多く、男女間の風俗の亂れたりしと生活難との爲に、中流以下には頻々として此惡風行はれたり。流産の藥なども世に行はれし様、性空話(卷十

棄子と心中

四第卅)に見ゆるが如し。後世の心中の例は見えざるも、指を切りて信誠を誓ふ話は、志賀寺縁記にも見え、又男女が戀愛の爲に心中に近き運命に突入して辭せざりし様は、六宮の姫の話(卷十九)安積沼話(卷卅)等に見つべし。但しそれも、主として運命の厭迫を甘受すると云ふに止まりたれば、死して戀愛の新境を開くと云ふが如き意味は、當時の男女の夢想せざりし所ならん。

乞食と悲田院  
三代實録の崇  
親院と延命院  
の記事

乞食者の説話も極めて多く、乞丐の小屋など云ふ語も見えたり。清水の坂本邊りには片輪者、困窮者の收容所ありて、悲田院なども建てりしが如し。(卷卅五)三代實録にも貞觀元年に、良相、藤氏の無居の者の爲に崇親院を建て、施藥院に隸屬せしめ、同じ疾患者の爲に、延命院を設けて勸學院に隸せしめしと見えしが如く、斯る社會的救濟の思想の、流石に已に幾分實現せられたるを示せり。卷二十、第四十に、義紹院の泉川原、夜立の森の邊りにて逢へる乞食の寒げなれば、衣を馬上乍らに打懸けやりしに、人に物を恵むにも無禮なりとて受けざりしなど云へる話は、何となく我國民性に解し易き心理なり。更に又餌取と云へる一種の異俗民の山中に棲めりし話集中に甚だ多し。こは鎮西の方にも、大原山の奥などにもありき。其俗牛馬猿猪の肉を屠り食ひ、皮剥など業としたり。山窩民及び穢多の當時に於け

餌取と山窩民



る記録として見るべし。

宴遊の話も屢記さる。貴人の盛なる宴會もあれば、西京なる庶人の物食ふ會もあり。筑前の守章家の館に侍共を集めて物食ひし時、尊者より順次に『下シ』と云ひて、御器のを我の器に入れて食ふ俗ありし事も見ゆ。又船岡の子の日の遊びには、後に乞食など餘り物を食ひに群り入れる様を記しぬ。食物には、平茸、舞茸、湯飯、水飯、鹽引鮭、鯛の醬、鱈の鹽辛、鯉の座敷料理、鯛の荒卷、越前、陸奥の薯蕷、干瓜、信濃の胡桃、曾丹の食ひし搔栗、果物の菓子、瓜餅、鮓鮎、燒漬、栢の汁物、酢海松、燒蛤、鮑魚、煮物、燒物及び庶民の肉食の風など様々なれども、當代の料理の方面は、他の文化の精美なる進化の割合に、幼稚なるものなりしが如し。菓子、餅など入る、物を餌袋と云へり。上戸の話も少からず。酒の好み用ひられし様は今も異ならず。餅酒など、もあるは濁酒の類なるべし。露汁に味煎と云へるもあり。薯蕷粥、食ひに利仁の老五位を京より越前迄具し行けるも、食物に關する一笑話なり。

次に著るしき風習は、狩獵の廣く盛に行はれたる事なり。所謂狗山、鷹狩、待山など、その主なるものにして、筑紫より陸奥に涉りて、諸所の説話に多き事先にも言へり。今日尾張を始め諸所に、此地名を存するも、恐らくは當時の土俗の固着したるものならん。狗山とは

狗を連れて山に入り、鹿、兔、猪等を狩り出し、弓を以て射取ることにて、肥後守源章家が飽田と云ふ所にて、三千の人を發し大小石を取り去らしめ、山にある鹿共悉く狩り殺したれば、飽田の石拾とていみじき罪に云はれしなど有名なる話譚すらありき。當時の犬に、耳垂狗の類ありし事多くの説話に見えたるも注意すべきことなり。つぎに鷹狩の風俗も大に發達して、京師の公卿、公達を初め、中央、地方の武士及び庶民も屢行へり。小鷹狩なる行事の名も見ゆ。滿仲の如きは、鷹四十五を夏飼させて、殺生に日を暮したりと云へり(卷十九、第四)。ことに西京鷹師の男の話(同、第八)にては、夜は鷹を手に据ゑ、晝は雉を狩り、家には鷹を七八羽木に居ゑ、狗廿許も飼ひ、殊に夏飼の程は多くの生類を殺すこと數知れず。春は鳴鳥を合すとして、曉に野に出で、之を捕ふと云へり。是等の條に見ゆる鷹飼、犬飼は甚しく大仕掛に武者事立てるものにして、大狗鈴に附け鳴らし、勢子は杖にて追ひつゝ、狩り立つる様物凄き許りなり。又待と云へるは、高木の脰に横木を結びて上り、下に鹿通るを待ちて射るなり(卷廿七、廿八)。又燈しと云へることも獵の一法なりしにや、この時は騎馬にて弓を携へ、焰串に火をかけて射るなり(卷廿七、廿八)。こは拾遺集に照射ともしの歌出でしものなり。其他或は築にて、或は釣して、或は網にて、魚を漁りし様も諸所に見えたり。肉食の盛なりしも宜なりと謂ふべし。



又農耕の具には馬齒、辛鋤、鎌、鍬、斧、鐮など記されぬ。

第二 交通と文化

交通には馬と船と其尤も著るしきものなり。馬は當時の國民生活に甚だ親しかりしものにして、武士は勿論、京人、僧俗、女子と雖も出行又は旅行には、必ずこれに騎りしが如し。一般に東國の馬の名聲世に高く、逸物馬に對して、草刈馬など云ふ名稱も見えたり。又旅馬には、旅籠馬、皮籠馬の名も見ゆ。但し車は牛車を主とし、祭の車立のこと、唐車など云ふも見ゆ。従つて牛飼の話に富めるも、馬車(卷十五、第四十五)の記事は集中甚だ稀なり。

船は淀川、瀬戸内海の通路を第一とし、山崎、河尻、武庫、魚住津、波方津、文字關など有名なる津港の話多し。是等の津港に關しては、かの延喜の三善清行の封事(本朝文粹卷二、二二〇頁)に、魚住津(魚住津は播磨菟原郡數邑の稱なり)を改修せんことを乞へる中に、糧生泊、一日程韓泊、一日程魚住泊、一日程大輪田泊、一日程河尻と見えたり。こは貞觀の頃の様なり。又行基が行程を計りて津港を築くとも云へり。魚住津に關しては、史にも天平九年創設、承知二年清原夏野の修工、貞觀三年東大寺賢如の修工など見えて、前期に重大なる港津たりしこと明かなり。但し右の航路系統が、平安後期即ち集の頃迄繼續せしや否やは明かならず。近江湖もこの系統の終

點たりしが、未だ琵琶湖の名無かりしが如く、其主なる鯉と大海の鰐と戰へる話にもこの名見えず。其他、北海、南海等の漁獵の話多き事、説話の地方的分布にも知られたれば、我通舟航海の業は意外に普通に發達したるべし。萬葉時代遣唐使交通の外海航路も、唐、宋、渤海の商船猶來往したれば、筑紫の島々の舟航もいと頻繁げに説話の上に表はれたり。京畿の近海河川等の舟路は主に引船なりしが如く、綱手の事、到る所に見ゆ。當時の日記、和歌に此様の記されしもげにと想はるべし。

商業貿易の事も亦種々の方面に渡れり。錢貨については、國史に顯宗帝の銀錢の記事を始め、天武帝の銅錢を通用せしめ給ひし事、持統帝の鑄錢司を置かれし事等、奈良時代以前より見ゆる所なるが、實際に於ては平安時代の當時にありても、實物交換、Barterの風尙未だ盛に行はれしこと、説話の面に現はなり。美絹三疋直米三十石に交換(卷十七、第十七)せしは、後堀河帝の寛喜二年、米價一石、錢一貫文と云ふに考へて、三疋の絹三十貫文なりしにや。斗升法はかの後三條天皇の延久の沽價に由れるものなるべし。大藏太夫、紀助延は、米を人に貸して利をとり四萬石に増せり(卷廿八、第廿三)と云ひ、卷十六、第二十八の男が交易を以て、遂に九條の田居一町を得たる話など、當時の經濟的生活を伺ふに、いと興味ある物語なり。陸奥に



奥州の金賣機  
織渡世と鏡賣

行きて砂金を得たる話もあり。銀塊を碎きて物を買へる事も見えたれば、金賣など云ふ商賣も有りしならん。但しこの語は見えず。

機織渡世の女ありし様は、卷十七、第二十六にも見ゆ。即ち近江の伊賀郡の女、布一反を以て、津に魚を交換しに行く話あり。伊勢國に帛、絲、綿、米など百餘駄を積み行きて、水銀と交換して利を得し男もあり。其他瓜を荷車につみて、京に賣る男鏡を賣る女、又京の飯婦(めさ)と云ふもありき。人買の俗はた行はれぬ

群盜と道路の  
妨害

既に幾度か述べしが如く當時諸道に群盜の出沒したる様は頗る甚しくして、鈴鹿、大江山、奈良坂など、大なる騎馬團體にて白晝公然と行人、商客を脅したる話、二三に止まらず。或は質を取り、或は財貨を奪ひ、或は命を害へり。延慶元年、七月二十六日、鈴鹿、大江山、惡賊討伐につきて、六波羅の泰時、時房より申達狀來りし趣、新編追加(日本古代法典本五七八頁)に見えたるが、さる頃の様は、早く平安時代の中頃より打續きしものと見えたり。觀硯聖人が曾て助けし盜人の後年關山にて聖人を迎へ取りて、山寨に伴ひ、湯に浴せ馳走したる上、文綾など贈り届けしと云へる話にても、如何に彼等が大規模の生活を送れるかを見るに足らん。山賊と共に、海賊の、所在の水路に多くして、貿易、交通を脅したることも甚しかりき。そは已に

當時生業者の  
危険と艱苦

史譚の部に述べたれば茲には略すべし。

醫術と山寺の  
湯治

斯の如く當時の生業者は、外には風雨、自然の迫害を被りつゝ、内には山賊、海賊などの掠奪を被り乍ら、何等安全なる防備を有せずして、僅かに船と馬背とによりて、其貿易を營みしものなれば、其危険にして艱苦なりしこと、到底今日もて想像するに餘りあるべし。生業には醫術の事も多く見えたるが、孰れも漢方的の手法なり。酸き酒の濁りたるに、牽牛子を濃く摺入れて、空腹に吞めば下痢すと云ひ(卷廿八、第五)、三條朝成が身の太るを瘦せんにはと問へるに、夏は水漬、冬は湯漬を食ふべしと云ひ(卷廿八、第二)、般若寺の覺縁、病にかゝり、始は風など云ひて、湯治せし話(卷十九、第三)等为例なり。當時入浴の風習は、寺院よりして一般に擴められたるもの、如く女子の山寺に湯治に行く話など屢、出でたり。されば醫師、陰陽師、巫女なども所在に多く在りて繁昌し、又生業としては、樵の話もありて、木伐道など設けられたる山の事も見ゆ。柚なども當時、山中に多く住めりし部族なるべし。斯る庶民生活は、開化的の人文の標準よりすれば、素より決して高き程度のものにはあらざれども、一般國民の文化的、生活が、漸く在來の因襲を離れて、社會の表面に注意せらるゝに至り、遂に中央、京師に産出せる説話文學の主なる要素として、京人の興味をも引くに至りしは、時代の文化の形質、

國民的文化生  
活の新開展



一度茲に雜糅して、更に新たなる進展の途に上るを卜するに足るものあるなり。

## 第七章 今昔物語集の價值

(綜合的内容)

### 第一節 集の表現せし史的時代

以上の叙述にて讀者は、一涉り種々の方面より研究の對象とせし今昔物語集を觀察し得たるべし。吾等は今や卷を掩うて、默思一番、徐ろに斯る作物に描かれたる時代の史的意義を尋ねて趣味深き幻影の國に逍遙すると共に、更に或は集、其時代の背景と交渉したる點に於て、或は集が特に獨自に有する價值を綜較して思念し翫味せざるべからず。これ文學研究に於ける最も主要の意義、Significanceにして、又其滋味を追憶 an after-taste する所以なればなり。

平安時代の後期は、實に特色ある中世近世、二大時期の過渡的準備時代にして、我が第五文化時代は、既にその新時代の曙光、社會の各方面に涉りて閃々たる烽火を點するの時なり。政治、法制に於て、風俗、行事に於て、社會組織に於て、道德に於て、趣味に於て、宗教に於て、言語、文章に於て、國民的心理に於て、此等二時期の萬象は、實に偉大なる新奇の對照を我

史的意義の二方面

平安後期と新時代の曙光



集文學と國民  
文化革新のシ  
ムホニー

宗教、音樂、文  
學の國民的新  
運動

武士道と國民  
的精神

時代的表現の  
意義と眞淵說

文明史上に劃出するものなりき。而して斯る新時代の新要素は、此の作の出づる當時に於ては、刻々世人の耳目を刺戟したりしものなるべく、従つて當代の、前を承けて、將に新たに後に發せんとする世相は、實に驚嘆すべき國民文化革新の潮音となりて、集文學の全幅に一大シンホニーを奏でつゝあるなり。乃ち宗教上には、貴族的なる天台、眞言の教義は、既に偶像的階級の偶像的宗教となり果て、之に代りて興れる新宗教の潛勢力は、その固有の生面を、提げて直ちに平等なる民人の生活に接觸しつゝ、漸く擡頭せんとす。之と共に所謂念佛往生、教風の弘布は、音樂界に一大刺戟を伸べ來りて、國民的音樂時代を形成し、音樂は更に文學と結合して、其聲調韻律に新生面を與へて、文學、音樂時代をも現出せんとす。斯の如くにして藝術と宗教とは或は合し或は離れて、各新しき進路を開拓し、その結果は、武士團の指導の下に、平民的國民的精神の覺醒となり、一切を擧げて新たなる轉回の機頭に向はしめんとす。院政時代の進歩的思想の使命は實に這の點に存するものと云ふべく、其時代思潮の鬱勃たる勢力は、集の、説話に歴然具象せられ、一個舊時代の新時代に移動せんとする文化の轉回的姿勢となりて、上述の各方面に於て尤も清新活潑に感觸せられたり。眞淵が『今昔は時代の様を見るにいと用あるものなり』と云ひ、能書事蹟にも、『今昔物語は時代の言葉、風

俗器物等を考へて據とするには便あり』と云へる、蓋し斯く解し來つて、益、その妥當なるを覺ゆるならん。

今這の集の文學の展開したる全體の史的表現を冥想したりとせば、之を何とか形容せん。そは讀者に依りて種々の觀方あらんも、吾等は先づ其處に何とも云ひ知れず、動ける平安時代ありとすべし。動ける新日本の社會ありと認むべし。一千三十餘の説話の章段の多かりしが如く、説話に盛られたる時代の相も極めて多般なれども、そは皆靜止したるものに非ずして、悉く時代の波に従つて動搖し蠢きつゝ、合奏し、色獨樂を廻せるを見るなり。新時代の歴史的色彩は、其文學自身の歴史的色彩と共に、此點に最も鮮明なる特色を發揮して集の説話に表現せられたるなり。

其交雜したる動相を、文學の内的性質の特殊性と普遍性とに於て見んか、(一)特殊性にありては、集の文學は必ずしも人間の情感を新たにするものに非ず、又奔放なる空想を翻し、若くは新奇なる性格を展示するものに非ず。主として普通の人間生活、社會生活に於ける人生智を語談し、怡樂し、奇翫せんとする所に其特別の藝術境地を求めんとするものなり。是れ説話文學たる集にありて、寧ろ當然の傾向と謂ふべきが、著者が努めて語り傳へを喜び、

集の史的表現  
動ける平安時  
代、動ける新  
日本社會

文學動相の内  
的性質

(一) 特殊性

人生智と信仰  
的色彩



集の表現したる俗世界の消息

傳聞を興じて、社會萬般の世態を網羅したるは、其人生智の上に、特に時代の趣味を感じたるに因るとせざるべからず。次には全説話の上に耀奕したる信仰的色彩にあり。或は信を説き教を諭し佛を尊び經を讚じて、常に人間生活と宗教歸信とを離るべからざる連鎖を以て結合せんとす。其結果は廣き人生智と、誠實なる信仰と混合したる、極めて親むべき放膽なる一個の俗世界、俗世間が集の表現したる人生として、讀者の眼前に描出せらるゝを見るならん。是れ集にのみ特有にして、他の文學乃至時代に決して見る能はざる現實味を具ふる所以なり。

(二) 普遍性

複雑性、社會的階級性、進歩的改變性

更に、(二) 普遍性に於て讀者の認むる所は何ぞ。一は交雜したる文學中の複雑性なり。例へば社會の生活に於ても都會あり、地方あり。趣味に於ても美あり、醜あり。詩語に於ても雅語あり、俗語あるが如く、集なる交響樂の要素は頗る雜重なるまゝに、其各が皆永遠普遍なる歴史的過程の一斷片たるを示せり。二には社會的階級性の多般なる現實相にあり。新時代の機運は、既に舊社會の一角を變形せしめんとしたれども、集文學の全般の世界は、猶種々の階級の保存せられつゝ、互に調和的關係に於て一聯の時代的過渡を示しつゝあるなり。(三)には、其進歩的改變性に於て之を見るべし。交響樂の凡べての要素が、時代の特殊相を示

全説話世界の躍動

しつゝ、而かも一面には永き時代の史的過程に向つて、進出し變改せんとするを語るものにあらざるはなし。集中付喪神譚にて古き器物に物精憑きて踊る事を語りたれども、此意味に於ては、實に全説話の描寫が時代の進化に迫られて踊り動けるを見るなり。要するに、今昔物語集の文學的表現は、獨自にも、史的にも、當時の他の文學と趣を異にする迄に、頗る注意すべき多方面の意義を含めるものなりと謂ふべし。

### 第二節 結論

尨然たる今昔物語集の文學が、其形體組織に於て、所謂新社會の時代思潮と二重に密接の關係を有する事は、其價值の廣く且つ深きを想はしむべし。集の文學は素より説話の作物にして、純然たる脚色に成れる創作に非ず。故に美文學たる興味の稍乏しとせんも、文學の意義の甚だしく狹義に解せられざる以上、這種の作品の價值は、決して從來信ぜられたるが如き零細粗笨のものには非ず。人或は今昔物語の有する價值は、歴史的にして文學的に非ずと謂はんも、文學的にも幾多の興趣と價值とを含めること、先に想到したるが如し。今試みに、之を總括的に述べんに、



(一) 歴史的表現の意義

マ氏の生命の水

(二) 豊富なる内容

(三) 文學形體の多面性

(一) は云ふ迄もなく歴史的に特別なる表現の意味、所謂二重の時代的意義を有して、文學上に多大の内容と趣致とを加ふる點にあり。説話の中には外國譚あり、古代の傳説ありて、必ずしも著者の見聞想像に出でたるもの、みに非ざれども、之を全説話の上より見れば、悉く著者の心理と、時代の背景とに活ける交渉を有するもの、み。一も無意味の羅列、無機論的の堆積に非ず。片々たる話譚に、皆國民的説話たるの特色の十分に存するを認むべし。此意味に於て、集の多數の説話は、著者と時代との直接の産物にして、マツカロツク氏の所謂『生命の水』Water of lifeの潤澤に流れたるを認めざるべからず。生命の水の説話の中に豊かなるは、即ち時代と國民的生活とが、力強く表現せられたる所以にして、集の史的意味が文學として價值ある道理なり。

(二) は集の文學が、其成立の要素に於て、驚くべき豊富なる内容を含める事にして、既に叙説したれば説明の要なかるべし。

(三) は之に因りて其文學形體の極めて多面的性質を有せる點にあり。文學形體の多面的なるは、發達したる文學に於て、必ずしも其價值ある特長とすべからざれども、文學の史的なる性質よりして、多方面の文學形式を有するは、亦一種の價值なるべし。集の文學形體とし

傳説文學  
佛教文學

通俗文學

歴史物語

大人文學

(四) 心理的  
量發動

ては、言ふ迄もなく、(イ)傳説文學たるべし。(ロ)宗教文學殊に佛教文學たるべし。此二者に於て我邦文學中屈指の物たるは勿論、殆んど其種世界文學中の白眉たるものならん。次に(ハ)教訓文學、殊に教訓説教の間に、平淡、快活なる叙事文を交へたる一種の教化文學たるべし。更に尤も注意すべきは、斯の如き諸性質を含める集の説話の主なる文學的通性としては、其人生を廣義に教化せんとする(ニ)通俗文學たる點にありとすべし。殊に前述の史的意味に於て、歴史物語としての通俗文學たる生面を最も主要とすべし。通俗文學は或種の美文の如く、其趣味優雅精妙ならずと雖も、新たに社會の階級を撤し、國民的の趣味を盛り、新語彙、新形體を以て、一般庶民の文學を創始したる所に、甚大の光輝と價值とを賦與せらるべし。當時の文學所謂歌物語、繪物語等の平假名草紙と、大鏡、今昔等の歴史物語との差別點の一は、前者の婦女童幼を主なる讀者の對象とせしに反して、後者の一般の大人を讀者として、其理解と批判とを要求したる點にあり。此點に於て、通俗文學たる今昔物語集は、亦第五文化時代に創始せられたる大人の新文學たりしものなり。

(四) は集の文學的内容を心理的に觀察するに、右の如き文學の性質上、著者自身の思想と文學中の性格的思想とは、多くは相近きものなれども、併し兎に角、集の全説話を一貫して描



寫せられたる心理は、或は宗教的に、或は道德的に、或は情操的に、或は社會的に、量的に大なる發動をなせしと共に、其間に種々の注意すべき意義を示したるもの少からず。比較的技巧に乏しき通俗文學又は教訓小説なりとて、強ちに文學上の心理活動をも空零視すべからず。只説話文學の常性として、作中主人公の性格的思想の一貫したる活動、波瀾の如きは望むべからざれども、之に對しては、民衆多數の心理生活と、又集中無數の小品的描寫中に種々の性格、心理あるを翫味するを得ん。

(五) 其表現法と形式

(五) 更に文學の表現法と、其形式とに於ても、美文學に比して一概に貧弱枯淡なりと謂ふべからず。其中には、却りて特色ある描寫と文藻と語彙とを含めること、先に詳述したる所にて明かならん。殊に力強き鮮明なる表現を有する文學としては、平安時代の物語を通じて寧ろ出色の筆致とすべきもの乏しからず。其文體は佛教文學に出でし後の國文の一大模範たりしと共に、文學史上頗る注意を惹くに足れり。

(六) 後世文學上の影響

(六) 是の如き文學上の諸特長は、單に集以前の歴史的關係に於て見るのみならず、集の大作品たる勢力の後世文學に及せる影響より見るも亦決して少しとせず。是亦集の價值の一とすべきなり。見よ、近世期に入りて發生したる凡百の文學現象は、其十中の八九は皆集の含

軍記物語

雜纂文學

傳説文學

謡曲、怪譚、笑話

小説、讀本

隨筆文學

和漢混淆文

結語と譬喩

める文學的傾向に因由せざるはなきに非ずや。(イ)集の戰爭譚、武人譚の記載は後の軍記物語に入り、(ロ)集の説話雜談は後の宇治拾遺、古今著聞集等の雜纂文學となり、(ハ)集の傳説卷談は後の傳説文學を呼起し、(ニ)集の幽怪奇譚は後の謡曲、怪談、笑話中に攝取され、(ホ)集の小品的脚色は後の小説、讀本の典據となり、(ヘ)集の隨想、批評の筆致は後の徒然草等の隨筆文學に入り、之に加ふるに、(ト)其文體形式は當時の平假名文と相並んで、後の和漢混淆文の一大淵源となれるなど、其主なるものなり。一の文學作品にして斯の如き多方面の影響を寄與したるものは、文學史上にも其類ひ稀なるべし。これ又集の價值の重要な一點にして、即ち次篇の系統的研究所を要する所以なり。之を要するに今昔物語集の價值は、文學的にも、歴史的にも相應に著るしきものにして、我が文學史上、意義多く興趣深き作品の一なりと謂ふに憚らざるなり。源氏物語の光彩陸離たるを黄金の裝飾に比すれば、我が今昔物語集の文學は、それ、鋼鐵の如く重く且つ白く輝けるものと言ふべきか。



### 第三編 系統批評

#### 第一章 國文學中の四大系統

##### 第一節 系統批評の意義

系統批評の意義

系統批評 Die genealogische Kritik は内部批評、外部批評が單に文學作品其物の本質と成立とを究めたるに反して、其文學上の系譜的關係を研究するものにして、外部批評と稍共通の點無きに非れども、之を取扱ふ意味と態度とは全然別箇のものとして峻別せらるべし。外部批評より發し、内部批評に入りて精査せられたる特殊の文學は、系統批評に於て、其國文學中に於ける相關的系線的位置を與へられ、茲に初めて、そが上に施さるべき全般の研究を完成するを得べし。

系統批評の方法

抑も文學上の作品に對する系統研究の意義は、一個の思想、一個の勢力、一個の主義、もしくは一個の技術、即ち或は一個特殊の内容に、或は一個特殊の形式に、或は一個特殊の兩者



の關係に、或は一個特殊の兩者の表出法に關して、該作品の關係的位置と價值とを認識し、併せて其等の思想、勢力、主義、技術等が該作品に即して、如何に變遷し發達したるかを歴史的に考察し、以て其脈絡的發達が他の全般の文學に對して如何なる交互作用をなしたるかを諒知せんするにあり。素より文學は具體的想像を主とする純粹產物にして、常に人生に密着したる眞實性を要すれども、所謂狹義の主張(利害目的)にはあらず。換言すれば、創造の心理を貴ぶこと最も大にして、單なる模倣にあらず。又主義思想の直接の表現を、其主なる内容とするものにも非ず。故に文學の作品の研究は、一見單一なる夫自身、美學的研究を以て満足すべきが如く、ヒルンの説にも『一切の藝術は自完的なり、其自身に於て自己の目的と歸着點とを有す』(Hirn: The origin of Art. 1900)と謂ひたれども、系統研究の立脚地は自ら別に在るあり。假に文學作品の描出上には、直接作者の意識的に、或る思想、勢力、主義、技術等の影響を表現すべからずとするも、文學作品が必然的に、常に、時代思潮、勢力ある文化、宗教、風習等の廣義の影響を反映すべきものなる以上は、任意の文學を、その有り得べき見地より、一個の發達の系統中に觀察するは、全文學の研究上、必要にして又毫も不合理ならざる方法なるべし。況んや文學者に團體あり、主義、傾向の黨派あること、古今東西其事

系統批評の立脚地とヒルンの所説

ペリツシエーの藝術分派の説と系統批評の任務

例に乏しからざるに於てをや。ジョージ・ペリツシエーは、『近代文學運動』(一九〇一年)に藝術分派の理を述べて曰く『一派は常に組織的なり。そは藝術の領域を制限するより成立つべし。然らば一派が其製作を成し終れる時は、又次の一新派が舊式に反對して、新たに必然に置換へられ、或はそれを等閑に附せし部分とせし時なり』と言へり。斯の如き文學藝術の進程中に於て、其一派、一主義、一群を系統的に研究せんとするは、正當なる見方ならん。されば茲に所謂系統研究とは、單に狹義の出典もしくは影響に就いて云ふにあらず、深く其の文學の性質を考へ、詳かに個々作品の出現を探りて、除るに其の發展の經路を尋ね、以て國文學の本質と其史的真相を究めんとする意に外ならず。澎湃たる時代の潮と文學界の大勢とは絶えず特殊の作品に影響するに對して、作品の偉大なる刺戟力も亦ある形體と色彩とを以て、常に時代と文學を支配し陶化するものなるは、何人も否み能はざる事實ならん。

今讀者一度び如上の立場に於て、我日本文學の領域を、縦斷的に觀察し來らば、恐らくは上古より江戸時代に至る國文學中には、凡そ四流の根本的なる系統 Pedigree ありて、各特色ある固定的要素を以て一貫し且發達したりしを見るならん。四流の系統とは何ぞや、所謂固有文學系統、神道文學系統、漢文學系統、佛教文學系統、即ち是なり。若し此等の名目の

國文學中の四系統



近世文學の主流

煩瑣にして適切ならざるを憂へば、或は前二者を總括して固有思想、主想の文學となし後二者を集合して外來文化、攝取の文學と爲すも可なり。實際我邦近世の文學にては、廣義の人生即社會、生活及び戀愛、生活を主題としたるもの、最も重要な系統をなし、其要素は國民の心理及び生活の複雑となれるに伴ひて、極めて錯雜し來れり。乃ち一部分は歌物語、繪物語に出で、又説話系、佛敎文學系等にも相涉りて、廣き分野を劃したるが故に、之を第五系統、第六系統として立し得べきも、そは近世の國民的生活中に發達したるものなれば、茲には暫く固有文學、佛敎文學等の系統中に包轄せしめ置かん。乃ち左に今少しく上述の四流について説明を加へん。

### 第二節 固有思想を主としたる國文學

#### 第一 固有文學系統

固有文學系統の性質

固有文學系統とは、比較的我國民に固有したりと見ゆる思想、性情、趣味を中心として、或は特殊の文學的形式を成し、或は特殊の文學的胚種を含みて成れるものにして、例せば記紀の含有したる文學的傾向の如きものは是なり。故にこの系統に屬するものには、大體に於て

その二小系、歌及び歌物語系と説話文學系

其作品と近世期の分化

神道文學系統の性質

歌謠的のもの、説話的のものとあり。前者は我民族に固有して親炙したる、五七調を基礎としたる和歌を中心とし、後者は、庶民の相集りて、快活に談話し傳聞するを好む性情に基ける口碑傳説を骨子としたるものなり。即ち所謂歌及び歌物語系と説話文學系とは、固有文學系統の二分派にして、奈良、平安時代に入りては、記紀の文學より分流したるもの、前者は萬葉集、伊勢物語、古今集、土佐日記、源氏物語、狹衣物語、大和物語等を産み、後者は竹取物語、宇津穗物語、落窪物語、住吉物語、濱松中納言物語、宇治大納言物語等を數ふるに至れり。此系統中よりは近世に至りて、漸次社會生活の文學系統(第五系統)及び戀愛生活の文學系統(第六系統)を派生せしめ、室町時代殊に江戸時代に入りては、幾多の方向に發達するを見たり。

#### 第二 神道文學系統

茲に所謂神道系統の文學とは、固有の思想中、特に國體思想及び敬神に伴ふ信仰、風俗、形式を中心として發達したるものにして、記紀の一部分、祝詞、宣命、古語拾遺等の中に存する文學的傾向に由來し、殊に奈良、平安時代の交に入りては、佛敎と交渉して、所謂兩部神道、山王一實神道等の隆昌を見れば、這種の文學的色調は著しく其内容を豊富にしたり。近世に入りても、神道五部書を始め、北畠親房、吉田兼俱等の神道、垂加流、新神道などを中



其系統と他系文學との關係

神道文學の三小系

軸としたる一種の文學及び文學的運動の一貫するを得べし。故にこの系統の文學に於ては、一面、固有文學系統との交渉甚だ密接したると共に、一面、下に掲ぐる梵漢二文學の系統とも接觸出入して、或は歌物語に、或は歴史文學に、或は民間文學に、幾多の作品と勢力とを示すを見るに至れり。それを大別すれば固有神道系、兩部神道系、及び一般神道物系の三系となすを得べし。

### 第三節 外來思想を攝取したる國文學

#### 第三 漢文學系統

漢文學系統の性質

漢文學系統は、詳かには漢字及び漢文學に影響せられたる國文學の系統にして、其由來は極めて古く且深し。先づ國字の發達が、漢字に負ふことの大なりしより始めて、一面儒教及び道教として倫理、哲學上の思想を通じて我民性と文學とに大なる影響を與へ、一面制度文物に於て奈良時代以降我上下の社會に廣き勢力を及ぼし、殊に其唐宋文學は、直接我文學界を刺戟したること淺少にあらざりき。宋以後に於ても、元と云ひ、明と云ひ、清と云ひ、其時々の文學が我國文學の形質と文學界一般とに、間接直接の交渉を有せし事は叙説する迄も

直接影響の作品と間接の影響

漢文學系統の三小系

佛教文學系統との關係

なし。されば直接漢、唐、宋等の作家の手になれる外國文獻は素より、我國人の手になれるものにも、古くは日本書紀、懷風藻、經國集、菅家文草、本朝文粹等、近世に入りては、明月記、東鑑、往來文學、五山詩文集、江戸時代の大日本史、日本外史、諸家の詩文集等の如き、直接漢詩文の書、もしくは詩文學に關係せる作品を外にするも、漢字及び漢文學が國語と國文學上に寄與したる影響は甚多く、殆んど根本的なる各種の作用を生起したれば、この系統上に於て觀察すべき國文學上の現象は、最も廣汎なりと云ふべし。されば極めて大體上にも散文系、詩賦系、及び一般化系など、其程度と種類とに數多の小系あるを知るべし。是等の文學が、其性質に於て、著しく佛教文學系統に接着したるもの、多かりしは、既に漢唐文學以來の傾向にして、我平安時代に入りては、その風一層甚だしかりき。かの和漢朗詠集、新撰朗詠集の如きは此系統の文學にして、第一系統なる和歌の趣味を混じたるものなれども、之と共に佛教文學の聲調亦著るしきが如きは即ちその一例ならん。

#### 第四 佛教文學系統

佛教文學系統は、佛教傳來以來佛教の信仰及び布教に伴ひ、多くは經文文學の典故に則りて、國文學と結合したる一團の文學的勢力にして、其程度は漢文學系統に於けると同じく、

佛教文學系統の性質と其の發達



佛教的要素と  
佛教的文學と  
の區別  
直接佛典的作  
品と間接影響  
の作品

佛教文學系統  
の第一系

同上第二系

極めて遞次的に數個の分系を有し、最後に瀾然として國文學の全野に弘散したるものなり。此最後の状態に在りては、佛教の信仰が殆んど國民的なりしに伴れて極めて、密着したる程度に於て普遍的に國文學中に熔融したれば、殆んど其系統を劃すべからざるが如き觀あり。故に佛教文學系は之を國文學上に於ける佛教的要素と佛教的文學と云ふ意に區別して解するを至當とすべし。所謂佛教的文學系統の研究に於ては、直接漢譯佛典若しくは我國人の手になれる純粹の佛典的著述の除外せらるゝは、恰も漢文學系統の國文學研究に當り、直接漢文的の作品を除外したると同じきは論なけれども、此等の佛典に次いで、直ちに之と密着し、多くは國文もて著せる宗教的文學の一流あるを認むべし。この種の物は、其目的は全く教義を説き、實用を主としたるものにして、未だ文學の領域に進入せざるものなれども、其宗派の特質に依りて、國文學上注意すべき要素を含めること多きと、其文藻の見るべきもの多き點とよりして、所謂佛教文學系統中の第一系と認むべし。弘法の三教指歸(漢文)遍性發揮性靈集(漢文)源信の往生要集(漢文)親鸞の教行信證、正信偈、歎異鈔、日蓮の立正安國論、開目抄、向阿の假名三部抄、蓮如の御文章の如きものは是なり。第二系は、佛教的意義稀薄となり、或は傳記、説話として、或は縁起、物語として、多少一般の興味を目的としたるものなり。即ち前

同上第三系

同上第四系  
近世文學に於  
ける影響

國民文學の複  
雜なる要素と  
系統

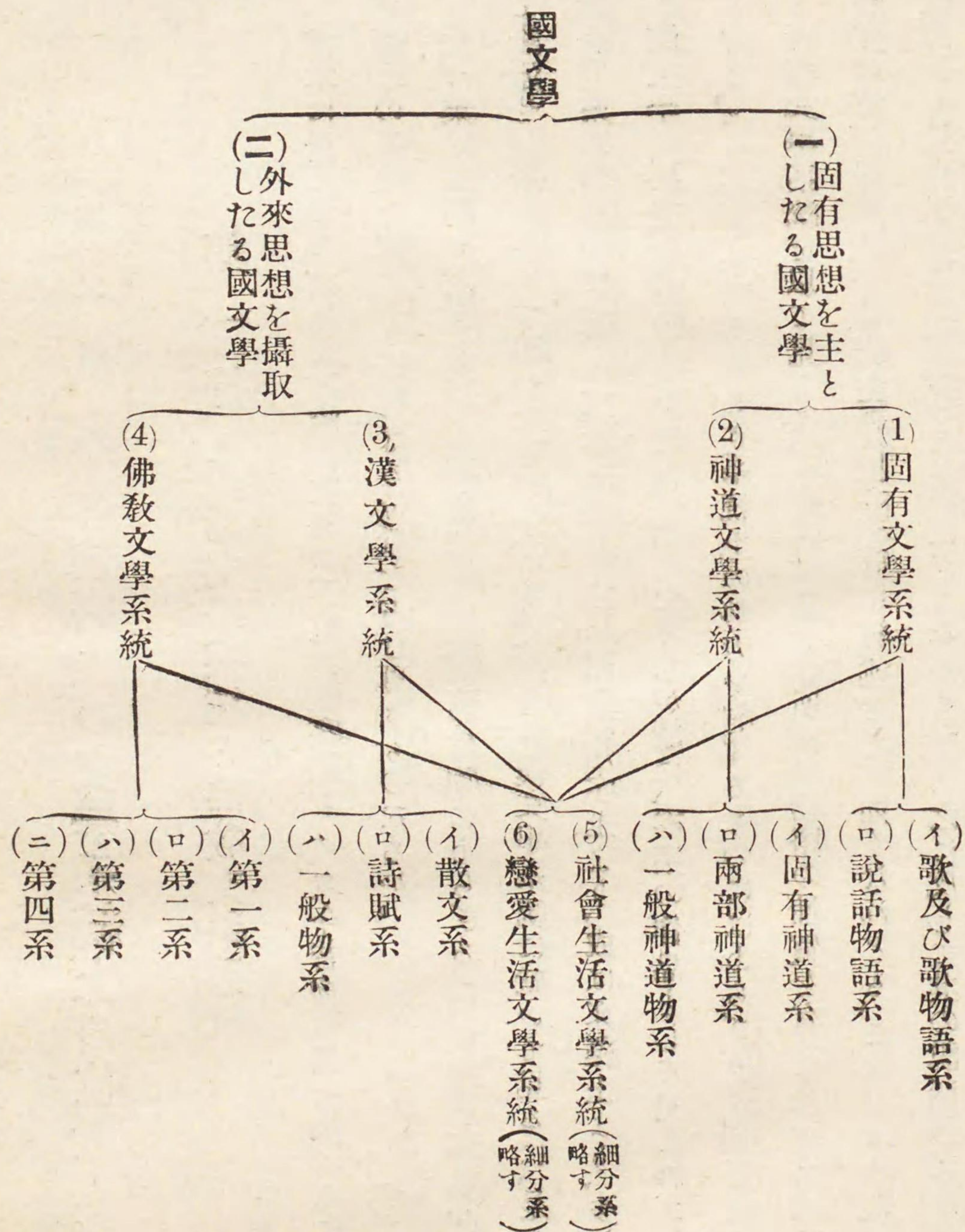
述第一系文學が、漸次一般の國民文學に接近し來れるを意味するものなり。例へば三寶繪詞、私聚百因緣集、三國傳記、拾遺古德傳の如きものを以て、此程度に於ける佛教文學系の作品なりと云ふべき。源信の往生要集の如きは、其文學史上に於ける實際の影響より見て、又この系に入るゝも可なるべし。(次章二、三、四節參照)然るに佛教的文學系統の第三系に至りては、既に發達したる文學上の技巧を有し、その教説や、修辭や、素より佛教趣味になれるも、第二系の如く露骨にあらず、且多くは一種の音樂的要素と結合したるものなり。平家物語、謠曲、今様の如き即ち是なり。更に第四系としては、先にも述べしが如く一種の佛教的要素として、普ねく文學上の廣き領域に瀾漫したるものを擧げざるべからず。殊に近世期の後半に至るや、這種の佛教文學系より更に分化して、社會生活文學系統、若しくは戀愛生活の文學系統を發達せしめたること少なからざれば、所謂佛教的要素は、近代の人生と密接したる文學中に於て、極めて深刻微妙なる融合を示すに至れり。

以上の四系統は、一個全體なる國民文學と稱すべきものゝ中に於て、或は系線的に或は色彩的に極めて複雑錯綜して發達したるものなれば、其分割は必ずしも明瞭なるに非ず。就中佛教文學系統に屬する第二、第三系等は、漢文學系及び説話文學系と錯交する場合甚だ多



く、或は又歌物語系と交渉したるものも少なからず。故に是等の四系統の混和状態を、一時  
 期に就いて精密なる横断面的圖式を以て示すことは作物を以てする外頗る困難な  
 れども、國文學の歴史的發展を、系統的に觀察するに當りて、如上の四系統を歸納し且演繹  
 せんとする試みは、其基礎的文化の素因の孰れも強大なりしに應じて、最も自然にして且便  
 宜なる方法なりと云はざるべからず。勿論文學研究上に於ては或る特種の目的よりして更  
 に、一層細密に、一層文學的なる標準を立て、その系統關係を考察すること、往々必要なれど  
 も、一般に江戸時代迄の文學を、系統的に考ふるに當りては、先は大體上述の四系統、若くは  
 六系統によりて觀察するを最も可とすべし。されば今は暫く國文學中に於ける四大系統の  
 概念の下に集に關する所要の問題を考察せん。乃ち上代より江戸時代に至る上記の諸系統  
 を表示すれば左の如くなるべし。

上代より江戸  
 時代に至る國  
 文學の系統表





## 第二章 今昔物語集の文學系統上の位置

## 第一節 説話文學系統と佛教文學系統

今昔物語集の  
文學系統の探  
究

前章に於て導き來れる四流の文學の系統的觀察點より、我今昔物語集を味はんに、果して何れの系統に屬して、如何なる位置を占む可きものなるか。

先づ集の文學が、第二系なる神道文學系統上の作物にあらざるは、前編内部批評の各章にて論述せし所によりて明かなり。次に第三系なる漢文學系統に就いて見るに、是も前編一般研究第二章に於て、或は文章上より、或は語彙、用字上より、或は文藻上より、少なからざる漢文學の要素を含めることを論證したりしが故に、本系の作品として見られざるにあらねども、そは尙ほ未だ著るしき系統上の勢力を有するものにはあらざりき。更に第一系なる固有文學系統を以て見るに、或程度に於て、所謂歌物語の性質を有することは、前編各部研究の第一章及び一般研究の第三章等に縷述せしが如くなれども、これはた全般の文學的傾向より見れば、甚だ微弱なりと謂はざるべからず。之に反して其の説話系文學の性質に

説話文學系と  
しての今昔物  
語集

佛教文學系統  
としての今昔  
物語集

説話的佛教文  
學の作品

至りては、先に第一編第二章及び第二編一般研究第三章にて述べたるが如く、非帝に重大なる要素を成すものにして、そは集の文學の形體上より見るも何人も首肯する所ならん。故に今昔物語集の文學上に於ける系統的位置は、素より固有文學の系統内に限られたるものにはあらざれども、之を廣義の説話文學系に屬するものなりと斷言するも、毫も誣言にあらざるべし。更に第四系なる佛教文學系統の概念を以て見るに、同じく第一編第二章及び第二編一般研究第一章、第四章等の研究によりて、集の文學の系統的性質は、甚だしく第四系なる第二小系作品中に屬すべきものなること明かなれば、今昔物語集の文學は、又佛教文學系統中の産出なりと斷定するを得可し。是に依りて見れば、集の文學系統上の屬性は、二個の著しき傾向を併有したるものにして、其一面は説話文學として、他の一面は佛教文學として認むべき十分の資質を有するものと云ふべきなり。

この二系統の性質は、其孰れが主なる文學の本相なりやと云ふに、先に著作の動機(第一編、第三章参照)に論じたる主意によりて、後者即ち佛教文學系統の要素を中心のものとして認めざるを得ず。乃ち今昔物語集は一個の説話的佛教文學の作品なりと謂ふべき物なり。斯の如き二面の文學的性質が一の作品中に俱存する様は、宛も我が古事記が、説話文學要素と、歌及



文學の系譜關  
系と出典關係  
との別

び歌物語文學要素とを俱有せる狀に似たるものにして、文學史上上代の二系の文學を承け、後代の二系の文學を發きたる一、大貯水池の如き作用を營める點も二者、亦酷だしく相似たるなり。之を以て集中に含まれたる二系統の要素は、其由來と其傳統とに於て共に重大なる系譜關係を有するものにして、この二要素に就きて夫々その系譜上の關係を明かにするは、即ち集の文學系統上の位置を闡明にする所以に外ならざるなり。但し系統批評に於ける系譜關係とは一作品中に於ける出典の問題とは自ら別箇なり。出典の關係は意識的にして多くは部分的なれども、文學上の所謂系統關係に至りては、意識的なこともあれば無意識的なこともあり。只その文學上の形質に至つては必ず或程度迄、全體として近接したる要素を通有するを其特徴とするものなるべし。

## 第二節 その上來系統

### 第一 説話文學系統

前にも云へるが如く、説話文學の胚種は國民の話譚を好愛して、口々傳誦したりし風習の中に醸育せられたるものなれば、斯くの如き話譚の總轄的に、また組織的に記載せられし和

古事記と風土  
記

銅五年(七三)の古事記は、其最も有力なる淵源たらざるを得ず。古事記の記法に先づ出自、名目、年時を掲げ、『於是』『故』など記して事を述べたる所、一種の説話文學の形式あるを見ん。其翌年、諸國父老の口碑を録して上らしめし風土記中にも、亦かゝる文學的系統の大なる先蹤あるを認む。此時の事續紀に、『五月甲子畿内七道諸國郡郷名著三好字(中)具録三及土地沃埴由川原野名號所』由、又古老相傳舊聞異事載三千史籍三言上』とあり。所謂名號所由と云ひ、舊聞異事と云へるは、即ち傳説説話に屬するもの多きなり。されば常陸風土記なる、國司の解に、申三古老相傳舊聞事、問三國郡舊事、古老答曰、風俗諺曰、俗歌曰、など列記し、天平五年(九三)の出雲風土記には、稍報告的記述めけども、俗人曰、と云ひて、郷郡寺社の緣起譚の原形、民間語原説等を載せたるを見るべく、殊に播磨風土記に至りては、其説話的要素更に大に加はれり。風土記は尙天平の頃にも後年なる醍醐帝の延長三年(八五)にも上らしめしと云へれば、山水風土に關し、諸國俗間の話譚を輯集する風は頗る由る所あるなり。集の採録も此意味に於ては延長の風土記に繼いで、平安京の後期に編まれたる一種の風土記なりと云ふも不可なかるべし。

風土記として  
の集  
日本紀の形式

次いで和銅七年より元正帝の養老三年(八〇)に涉りて成れる勅撰の日本紀も、續日本紀に



比すれば叙事體と説話味と未だ全く分離せず。殊に一書曰には諸家の傳説と民間語原説とを載せて、出自、系統を冒頭にしたるなど、大に説話文學たる要素を含めり。奈良時代に入りては平假名片假名の發達未だしきを以て、多くは漢文にて記され、説話味は佛教味と相混和して、一種の傳記、縁起譚をなせるもの多かりしが、其種のもの、世に行はれたる様は、想見し難きにあらず。藤原仲麻呂の大職冠傳(〇頃)伊豫部馬養の浦島子傳(一四一)の如きものは是れなり。萬葉集は素より奈良時代に至る歌謠の集なれども、其卷十六なる有由縁歌及び諸歌の序詞、後詞中には、當時の説話の輯録せられたるもの少なからず。是等は其形の漢文ながら後の所謂歌物語の原型なるに近きものなれども、説話の記録を説話として見れば、一個説話文學系の産物として認められざるにあらず。

平安時代に入りては前期の中頃に平假名の竹取物語出で、所謂物語の祖と呼ばれたるは、説話文學の完成を示すものなれども、完成のこの程度に到らざる同系の作品亦少なからず。先づ延暦弘仁の交に出でたる日本靈異記は、佛教文學系統に屬せしむるとするも、嵯峨帝の親撰になれる田村麻呂傳記(一四八)、空海作と稱する玉造小町壯衰記あり。壯衰記の空海作に非るは、時代の小町以前なるにて明かなれども、其文飾の紀長谷雄作なる貧女吟と酷

浦島子傳、萬葉集中の傳説

竹取物語

平安初期の諸作

平假名物語の系統

唐物語と昔物語

似したるを見れば、少くとも延喜頃には早く行はれたるべし。(東鑑に文治の頃、小野小町一期)大同三年(六八)には忌部廣成の古語拾遺に古史譚を記し、更に都良香の富士山記(一五三)、記長谷雄の白箸翁傳記、大江匡房の狐媚記、熱田神宮に成りし縁起(一五)、坂上家高明の續浦島子傳(承平二、一五九二)等ありて、後期に出でたる大江匡房の遊女記、傀儡記等に連れり。別に平假名説話文學系統としては、先の竹取物語に次げる宇津穗、住吉、落窪、濱松及び大和物語の下卷等あり。又世俗譚の趣味なる一面より見れば枕草紙すら稍この系統に入る、を得べし。唐物語は大和物語に對して命名せられたるものなるべく、素より歌物語系及び漢文學系統の作品なれども、一方に於て又説話文學系統の作たる事も明かなり。毎説話の冒頭に、必ず昔何々と云へる所などは伊勢物語に似て正に昔物語とも呼ばるべきが如し。此作の出でたるは、何年にありしか、今明ならず。濱松に引ける唐國物語とは自ら別なるべし。もし漢故事和歌集の序列果して新古の順に由りしものとするれば、永久百首歌に先立てりと云ふを以て、正に今昔物語集の前頃(一七六)のものにして、物語の話性も大治の頃の無名抄と一致したる點あり。けりの用法多きも今昔と似たり。然れども、一般に語法的の誤多く、侍り、すだくの誤用も、見え、時法の不整も著るし、その歌も三句切のもの及び對句的の文飾のもの多



宇治大納言物語と歴史物語  
漢文片假名交  
物語としての  
集

日記、記録、辭  
書の流行と説  
話文學

きなどより見れば或は更に百餘年を下りて鎌倉時代の承元の頃(七八六)蒙求和歌などに先  
ちて出でしにや。建久の和歌色葉集、文永の風葉集孰れも此名を載せず。これ等の平假名  
説話系文學は、先に第一編のテキスト研究に於て推想せしが如くんば、隆國の宇治大納言物  
語(一七三)に至りて、又稍古朴に還り、次で出でたる榮華物語(一七五)大鏡(一七五)等の歴史物語  
に其述作上の動機を刺激せられ、平假名より宣命に類する漢字交りの片假名文に移りて、遂  
に所謂語尾雙記體なる今昔物語集(一七七)は出でたるなり。集の説話文學としての創作が、  
出典論に云へるが如き支那印度の説話文學に直接のを採れるは云ふ迄もなきことなれど  
も、以上の如き國文學中に於ける一脈の系統的發達の、該作品の需要と出現とに、直接間接  
の素地を成せるは何人も疑ふ能はざる所なるべし。尙右の文學的系統の一側面に於て、之  
と相竝んで類聚國史、和名類聚鈔、西宮記、北山鈔、左經記、中右記、大禪記、臺記、愚昧記、伊  
呂波字類鈔、江次第、達幸故實鈔など、當時續々、日記、記録、辭書類の編輯の行はれし事も、  
説話系統文學の發展に與りて力ありしものならん。

第二 佛教文學系統

奈良時代の縁  
起傳記文學

觀音緣記、白  
山緣記、過去  
現在因果經繪  
卷等

翻りて今昔物語集の、代表的文學要素たる佛教文學系統の由來は如何にと云ふに、この系  
統は其發達の狀一層明確に追跡せらるゝを覺ゆるなり。先づ奈良時代に行はれたる多數の  
縁起傳記文學は其の濫觴と認むべきものにして、出典論に列記したるが如き、漢譯佛典又  
は漢土の佛教文學が、外部的に我佛教系文學の、直接の鼓吹者たりしが如く、是等の縁記、傳  
記類は、内にありて、我國民文學中に於ける佛教文學的性質の發展に、大なる影響を與へた  
るものなりき。天平五年(九三)の徳道、道明等が觀音緣記並に雜記(三寶繪詞)及び天平十年  
(九八)の行基の隆池寺緣記を始めとして泰澄の加賀國白山緣記、孝謙帝の東大寺願文、神護  
景雲三年(二四)修榮の波羅門僧正碑文、寶龜十年(三九)淡海三船の鑑真東征傳、大安寺碑文  
及び天平の作と云はるゝ過去、現在、因果、經繪卷、寶龜二年の書と呼ぶるゝ、四天王寺太子傳  
(?)の如きは、集の著者の直接を目撃したる事實の有無に關せず、我が佛教系統文學の歴史  
的發達に於て其の第一乃至第二小系の作品たるや明かなり。此間、相慶の傳へたる上宮聖徳  
法王帝説は藤原京の初頃(一三五)に成り、又天平十二年には智光曼陀羅(佚)、天平寶字七年に  
は當麻曼陀羅、寶龜中には清海の曼陀羅等作られたれば、佛説佛土に關する傳説も盛に行は  
れたるべく、其頃の石上宅嗣の圖書館なる芸亭(阿闍寺)には尙今日傳はらざる多數の著作を藏



靈異記の文學  
と今昔物語集

せしならん。

平安時代に入りては、劈頭延曆弘仁の交(一四七)藥師寺僧景戒の日本國現報善惡靈異記(漢文)あり。上中下三卷、合縁百十二條の説話を收めたり。主として奈良時代に行はれたる民間説話を例證として、以て佛法現報の恐るべきを知らしめんとしたるものなり。されば佛教文學として、民間信仰の説話に材をとりたること、今昔物語集に最も近きものにして、疑もなく第二小系の作物なりとす。集の説話の奈良時代の話譚が多くは直接この書によれるも故なきにあらず。元興寺の護命(一四九)の法苑記(二)法苑林章記(三)は、大乘法苑義林章に出でたるものなりや、はた法苑珠林などに似よりたるものなりや、詳ならざれども、最澄の願文、四弘誓、藥師講式、六天講式、淨土記、空海の三教指歸(三)遍照發揮性靈集(十)多數の表白願文、灌頂文、慈覺大師圓仁(一五〇)の談義集(三)の如きは、大方第一小系中の文學としても認め得べし。日本大藏經に收めたる最澄の三寶住持集(三卷)と圓仁の三寶輔行記は事書體の傳記の様第二系中のものなれども其作に疑ありて孰れも採り難し。後者には新古今に入れ

る實定卿の那古の海の歌など引けり。又元興寺智光の安養賦(一)聖護の日本靈感錄(二)小野仲廣の日本國名僧傳(三寶繪詞)道賢の冥途記(扶桑略記)慈惠大師良源の藥師講式、諷誦文、金剛界念

藥師講式、三  
教指揮、性靈  
集等

日本靈感錄、  
觀音讚等

長谷寺縁起、  
圓融院受戒記  
等

源信の往生要  
集

誦賦、九品往生義(一六四)、園城寺の千觀の十二縁私記(一)良源の觀音讚等も、此の間に發達したる第一第二小系の佛教的文學なり。又縁記の類には、寛平二年(一五〇)の長谷寺縁起(漢文)、寛和二年(一六六)の大上法皇受戒記(片假名小書體)、治安二年(八二)の法成寺金堂供養記(漢文)、大江匡房の石清水不斷念佛縁記(一七三)、大江佐國の加茂社櫻會縁記(一七四)、鳥羽覺猷の勝光明院願文(一七九)等あり。嘉保中(一七五)の觀世音寺資財帳と保延(一八〇)に敦光の著はせる中禪寺私記、二荒三月會縁起等とは、正に集の出でたる前後のものなり。作者不詳の文珠靈驗集、高野山心覺(一八四)の地藏(一)等も見えたり。圓融院御受戒記の如きは就中尤も佛教的諧調に富みし特色あり。供養記には藤原廣業作の表白願文を見るべし。殊に永觀二年(一四六)には、惠心僧都源信の往生要集(漢文)、源爲憲の三寶繪詞(片假名交三卷)年を同うして出づるあり。佛教文學系統(二)の色彩、漸く鮮明となり來りぬ。往生要集は、平安時代に於ける佛教文學を集めて大成したるが如きものにして、その記述と聲調とは、直後に出でたる源氏物語以下の諸作に深大の影響を及ぼし、文學社會と繪畫界との佛教的智識を涵養したりしこと幾何と云ふを知らず。源信の直談鈔によれば先師良源の觀音讚(一六三)保胤の日本極樂往生記、十六相讚(一六四)爲憲の法華經之賦(一六四)等に則り、又唐の迦才の淨土論、道綽の安樂集に因りて著はした



るものにして、所謂厭離穢土門以下十門に分ち説き、其中或は地獄の諸相を詳述し、或は釋迦佛の三十二相八十種好、阿彌陀佛の四十二相の形容を密叙し、或は有生有滅、有樂有苦、盛者必衰、會者定離、身風前燈などの事理を説き更に廬山の白蓮花より淨土教の發達したる事を叙したる後に迦才のあげたる往生要經、十二經、七論に代ふるに、顯密諸教中専ら極樂を勸むるもの十餘種を擧げ示し、或は大論の組織により十地十念十信等を叙して法華と淨土往生との調和を説明し、結局九品九生の往生を勸説したるなど難教の門を破して、易信の門を立するに教訓念勸至らざる所なし。天台の教風深く染りて淨土念佛の大思潮に衝動せられたる當時の人々の間に喧傳せられしもの故なきにあらず。

三寶繪に到りては大鏡にも記されて、爲憲が尊子内親王に上らんが爲めに、自ら佛法因縁の事實を記し、別に畫工をして繪圖を添へしめしもの、叡岳要記(卷上)にも四菩薩像につきて、源爲憲三寶繪草案中在之など、見えたり。扶桑略記にも爲憲記として屢引用せられぬ。其本文は、上卷佛寶編は佛の行事譚にして未だ集の如く分章明かならず、繪圖の詞書の發達したる體のものなり。昔何々と云へるもあり。中卷は主として靈異記などに採り先づ其事趣を記して次に十八人の事蹟を注したり。靈異記に出でしもの十一條餘あり。但し建保の靈

爲憲の三寶繪  
詞

道長の法華經  
五卷繪卷

異記寫本に三寶繪下帖に在りと云へるは別本なるにや。下卷は所謂僧寶十二月の行事を録し諸齋會の由來式事を説く事極めて詳なり。此書扶桑略記の引用及び中川氏の學燈に掲げし京都護國寺藏本にては漢文なれども、東寺本及び史料編纂本にては、集に酷似したる片假名小書本なり。本漢文なりしもの傳寫の間に片假名交りに訛せしと覺し。榮華物語(本のく)に據れば此頃(一六六)道長の法華經五卷の繪卷と云へるあり。其装ひ紺青地に金泥もて記し綾紋の下繪あり、經文の上下に其意を畫き誦出、提婆、壽量の三品、七寶の美をつくしたれば『經とは見え給はず、さるべきもの、集など書きたらん様に見えて、好ましうめでたうしたり』と讚歎したり。これ又三寶繪の類にして、當時上流の間に流行したる經文文學の繪卷物の趣味と合體したる趣を見るべし。源信には往生要集の外、花鳥集、新修往生傳(卷一)あり。爲憲には詩文のものながら新撰本朝詞の作あり。藤原宗友の本朝新修往生傳(卷一)興福寺聖海の往生集(卷一)等孰れも佛教的傳記文學の作品なり。又惠心が顔真卿の畫讚に因りて作りしと云へる天台大師和讚を始め、來迎和讚、二十五菩薩和讚、山王和讚、通憲の智證大師和讚、恐らく平安の末頃の空也和讚、千觀の阿彌陀和讚、空也作と云へる西院河原地藏和讚など、其傳は詳かならねども此頃の佛教文學中には和讚の發達も著しかりなり。是等は

天台和讚等の  
勅興と佛教的  
和歌今様との  
關係



梵漢讚歎文學の感化に出でたりとするも、我が奈良時代より連続したる佛足石歌、日吉七社祭禮山王船謠、七猿和歌、極樂願往生歌の如き佛教的和歌及び今様と交互的影響を有すること亦頗る大なりき。

次で寛和二年(一六六)には保胤の日本往生極樂記(卷一)出でしが、之亦迦才の浄土論及び瑞應傳に倣ひて、専ら念佛往生の傳話を録し、菩薩、比丘、比丘尼、以下四十五人の記事を載せたり。中に就いて聖德太子、行基、無空の話などは、集の説話に採録せられたるものなり。往生要集の記載に依れば既に圓融帝の天元中にこの著の大體は成りしものなりと言へり。永觀の前後數年間の著と覺し。又和歌系統に屬するものながら、選子内親王、寛弘九年(七二六)の發心和歌集は十大願によりて十方浄土に往生せん的心を五十五首の和歌によりて、法華經以下九經の偈句を誦出し、天台護國院の寂然の法文百首も止觀、法華、大論、涅槃等の願文偈句を採りて、或は其意を歌ひ或は其意を説けり。著者が當時の歌物語文學に精通せし様と、天台の一念三千觀を力説したる點とは最も注意すべし。

續いて長久二年(一〇七)には首楞嚴院の沙門鎮源に大日本法華驗記(漢文二卷)の作あり。靈異記を祖述して都べて百二十九人の傳記を載せたり。其の説話の集に影響したるもの少からざり

慶滋の日本往生極樂記

發心和歌集と法文百首

鎮源の法華驗記

續本朝往生傳、極樂古調紀、安養集、拾遺往生傳、後拾遺往生傳等

しは、既に前編に述べたるが如く、只集に比して空想的の荒誕味少なく、記述の體も奈良佛教を宗派的に排列したるなど實用の趣一層多きを認むべし。此種の文學には尙引續きて平基親の往生要集勘文、善導書讚(卷一)、三井寺慶運の念佛三昧記(卷一)、空然の十六相觀詩、大江佐國の惠心僧都傳、心懷の安養鈔(卷三)、白河院の旨により良慶の撰せし安養鈔(卷六)、大江匡房の續本朝往生傳(七卷八頃)、孝範の惠心僧都銘(卷一)、藤原通憲の病中作と云へる極樂古調紀、三百韻、源隆國の安養集(三五)、三善爲康の拾遺往生傳(七五九)、後拾遺往生傳(卷三)など續出したる。四天王寺行慶の和漢往生傳及び尊知の同繪卷と云へるも此頃行はれしものならん。三部經繪と云へるもありき。匡房の往生傳は慶氏の極樂記に繼ぎ、所謂菟菟を詢ひ、朝野を訪ねて編めるものにして、上は國王大臣より下は僧侶婦女に至る迄、都廬四十二人の傳話を收め、別に雲客、管絃、文士、和歌、畫工、婦人、異寵、近衛、陰陽、有驗僧、能說師、高德、醫方、明經、武士等に就いて天下の一物者數十名を録したり。縁記、傳記、教説、詠歎の文學既に斯くも盛んに次を追ひて出現したれば、天永の頃ほひに到りて是等を打つて一丸としたるが如き今昔物語集が、佛教文學の第二小系中に、炬然として出現したるも決して偶然にあらざるなり。



## 第三節 その下降系統

## 第一 説話文學系統

下降系統とは云ふ迄もなく集以後に於ける、前記の二系統の文學の發達したる狀況を意味するものにして、是にも形質上の系統即ち理論上同一系統の文學と認むべきものと、直接の系統的關係を有するものとあり。近世期の文學に入りては、其範圍より云ふも、其質量より云ふも、著るしく廣さと深さとを加へ來れるを以て、以上の二系統にも、痛く錯雜を生じ來りて截然之を區別し難きものと共に、前章に述べし社會生活の文學系統(第五系統)及び戀愛生活の文學系統(第六系統)が一般文學界の主流たるに至りて、此傾向と關聯したるもの少からざるを見たり。然れども今昔物語集の主なる内容を代表したる上記の二系統の文學は、其自身としても、又集に對する直接の系譜關係に於ても、近世期に入りて依然として一種の系統的發達を遂げたるを以て、此場合には尙上來系統に於けると同様に於て、其下降系統を追跡する事を得るなり。勿論近世の廣汎複雜なる文學に對する系統觀察てふ意味は、其觀察が主として、上述の二點より出でたるものなれば、必ずしも該作品、本來の全性質に應ずる

下降系統文學の二類

近世期文學に於ける系統的觀察の注意

ものゝみにはあらず。其場合には説話文學系統、若くは佛教文學系統の派生、發達として觀察せば、然か觀察し得と云ふ意味に外ならず。敢へて一切の國文學中の作品を、説話及び佛教の二要素に歸して、漫然文學上の系統論を適用せんとするものにはあらざるなり。

扶桑略記と今鏡

先づ説話文學系統について見るに、集の後第六文化時代に入りて、史書に皇圓の扶桑略記(一八三)編まれ、歴史物語に源道親著と云へる今鏡(一八三)の出でたるは、時代の趣味の此方面に盛なりしを示せるものなり。殊に今鏡の著者が空穂、隠れ、簑等の作り物語を著はせし事を以て、罪深き業と考へ、源氏に就いても六十帖などまで作り給へる文も、結局罪障の因をなすものなりと云へるは注意すべき思想なるべし。そは寶物集の源氏物語供養(四卷)、安居院聖覺の源氏供養誦文等に現はれし假托小説を作るを以て、罪障と觀する思想の權輿として認むべしと云ふに止まらず、斯かる時代の心理に因りて、一度び源氏物語の如き黃金作を出すに至りし美文學界の情勢の俄然として衰微し來りて、事實的回顧的なる歴史物語又は説話文學の一時に流行するに至りし心理的理由の一半をも看取するを得なければなり。第四文化時代より以降、平安時代の後半期に入りて、文學界の作風に著るしき變化を見るに到りしは、實に這般の宗教的信念に歸因する思想の流行が其直接の根柢たりし物なり。

後半期の作風と文學罪障の宗教的思想



平家時代には右の外、俊頼の無名抄(平假字交一七九〇頃)に著るしく、今昔物語集の説話味が流入したると、匡房の話談に依りしと云ふ江談抄(一八〇〇頃漢文六卷)に公事、佛神、雜、詩、長句の五類につきて事書にて注したると九條伊通の大槐秘抄に、武士の物語など見えたる外には徴すべきものなし。盛んなりし淨海の一門も、新らしき世の流れを想ひ誤りし果ては、無殘や西海の煙波に、一門の悲劇を留めたるのみ。近世期の幕、突如として引かるれば、世は、疾や鎌倉時代に入りぬ。

茲に出でたる宇治拾遺物語(四五)は既に詳述したるが如く、今昔物語集の直系の作品にして、單純なる説話味文學としては寧ろ集よりも一層其性質を加へ來れり。今日のテキストには多少の疑あらんも西行の著と云へる撰集抄(九卷、平假名交、一八四三—一八五七頃)長明の四季物語(平假名交一八六七頃)等も見ゆ。前者は歌物語趣味に佛教味を加へ、九品の淨土、八十種好に擬しなどして、四十餘年の霜を戴き壽永二年正月、讃州善通寺の方丈に記すと云へども尙後の物なるべく、後者は年中行事、神、儒、佛の要素を混すること多けれども孰れも一種の説話系文學とすべし。但し風葉和歌集に引かれし四季物語は純粹の物語小説にて之と別作なり。光行の蒙求和歌は漢文學系統と歌物語系統との相合したる作品乍ら、又漢土の故事和譚を好める時尚に應じ

たるものなり。著聞集に唐繪倭繪もて和漢抄の畫かれしと云ふにも其趣を想べく、本朝書籍目録に茂範の唐鏡(十卷)と云へるも此頃のもの見えたり。こは唐物語など、似て鏡物の文藻を採れるものなるべし。承久より貞應の頃(二八八頃)にかけて成りしと見ゆる愚管抄(片假名交七卷)は、慈鎮の作なりや否やは尙決し難きも、時代と著者の内徴上の出身とは之に叶へり。蓋し源平二家争亂の批評に始めて、實朝死後、政權の依然として東遷せるを慨し、殊に義時の專權を見て、憤餘一個の大史論を草したるものに似たり。其の古を語り、今を語る著者の思想は、必ずしも佛法に即したるに非ずして、屢、儒教を交へ、殊に我尊王、敬神の固有思想の色彩著るしきを見るべし。彼の史觀と批評とに、徹頭徹尾一貫して現はれたる所謂『道理』なるものは、かゝる諸要素の凝固し、練結したる結果生ぜし大人生觀、大信念に外ならず。此點に於て、愚管抄の説話は、集のそれに比すれば、著るしく著者の統一的思想に依りて、取捨せられたるものにして、そは即ち説話文學が歴史物語の要素を、最も多く混和したる一例なりと云ふを得べし。同じ頃の古事談(六卷、漢文、一八八五頃)は、王道、臣節等の數項につきて、主に平安後期の説話を集めたるものなるが、前にも云へるが如く、新院の記事なども見ゆれば、後堀河帝頃の物なるべし。續古事談(片假名交名交)も亦、王道以下六項に分け輯めたるものなれども、



記録史譚の書  
繪巻草紙の系  
統と吉備眞備  
入唐繪巻  
和歌批評の系  
統と歌仙落書

終りに建保七年卯月二十三日記などあるは疑ふべし。建保は七年にて改元せられたると記事の點とよりして、尙數年後の物なるべし。曾我物語、義經記など云へるものも、今日のテキストは兎に角、其原形は比較的早く現はれたりと覺ゆ。敵打物語が、既に古く、時人の好んで傳誦したる所となりしのみならず、後に佛教文學系統に述ぶるが如く、地藏靈驗記(鎌倉代時)には、早くも既に發達したる曾我兄弟の物語見え、又守覺法親王の左記の冒頭、源平争亂の史論など記せし文治元年頃の記事にも『爰聊依<sub>レ</sub>有所思、密招<sub>二</sub>義經、記<sub>三</sub>合戰軍旨、彼源廷尉、匪直之勇士也、張良三略、陳平六奇、携<sub>二</sub>其藝、得<sub>二</sub>其道、者歟、』などありて、何となく義經記、戰記物語等の出所を暗示する節あると共に、斯る物語の古く此頃より行はれたるを想はしむるなり。上來系統にも述べたるが如く、一般に玉葉、明月記、吾妻鏡、百鍊鈔、類聚鈔(仲實)等、此期に續出したる記録史譚の書、及び室町時代に涉りて出でし幾多の往來文學が、説話文學の發達と、相關して種々の交渉を有したるべきは明かなり。繪巻類にも例の伴大納言繪詞等に次ぎて、江談抄に出でしと覺しき吉備眞備入唐繪巻など行はれたり。鎌倉時代に小説説話を採りて繪巻とするの風盛なりしは、明月記、吾妻鏡、著聞集の記事を見るも明かなり。是亦説話文學の主要なる一傳流なるべし。又久我通光の歌仙落書、後歌仙落書

十訓抄と教訓  
味

古今著聞集と  
神道主義

等(一九〇)の和歌批評書の中にも流入したりと見えて、今は昔などの語句多し。

建長四年の頃(一九一)著はせしと云ふ十訓抄(三卷、平假名交)は、名の如く佛教的道德説法の項目十條につき、幾多の例話をあげたるものなれども、其教訓味は集の方遙かに濃厚にして、此は寧ろ平淡なる説話に富めり。然れども宇治拾遺に比すれば流石に教訓味多し。漢文學、佛教、歌物語等の要素もや、交れり。序文として傳ふるもの、著るしく古今集の序に擬したる、狂言綺語の戲、却りて讚佛來の縁なりなど云へるは、其一例なり。空物語を以て、來世の佛罰を受くるとなせる一方に、斯る思想の行はれたりしも一奇なり。越えて數年、橘成季の建長六年作(一九二)作と云へる古今著聞集(廿卷、平假名交)あり。こは序文にも宇縣亞相巧語之遺類と見えて、宇治大納言物語、又は宇治拾遺物語及び江談抄などの餘波の作なり。著者は琵琶詠誦の事に通じ、圖畫、丹青の道を好める者、先づ音樂、繪畫の二道を主として之に古今の庶事、街談、巷説三十餘篇を加へて序で輯め、編述上の主義は集の佛教主義なりしに反して、これは全く敬神、固有の思想を以て主としたれば、神道系統の作中にも屬せしむるを得べし。技藝譚が神道と結合したるは、同時代に教訓抄などの如く、佛法と結合したるものありしに對して重要な差別點を示せり。文永の頃(一九三)には、本朝書籍目錄に信實



今物語、今昔物語繪卷、加陽其藤物語繪

の著と云へる今物語、十訓抄其他に見ゆる歌話逸事譚を記して成り、惟久の宇治拾遺物語を描きし今昔物語繪卷、後三年繪詞及び撰集抄に出でし硯破草紙繪なども現はれたり。今物語は本二十七卷なりしと云ふも今一卷のみ。今昔に出でし賀陽良藤物語繪卷も元享頃の物ならん。宇治拾遺物語の序文のかゝれたるもこの頃の事なり。又直接この系統の作と云ふにはあらざれども、源氏物語の大意を五十巻につきて詩賦に詠じ、雲隱は名のみ存せしめたる賦源氏物語詩も、正應三年(五〇)の作なりと云へり。永仁の交には、天狗草紙出で、其繪卷には五卷の物、一卷の物などありき。早太郎傳説は正和三年の事實なりと傳ふ。斯て建武、興國の頃(二〇〇)には、吉田兼好の徒然草出で、佛教、神道、趣味、人道等の種々の見地より、批評を敍べ故事を記したる一種の説話文學として世に行はれたり。其文學上の性質は遠く枕草紙を祖とし、今昔物語集を二祖とし、方丈記の佛教的要素と、四季物語の神儒教及び年中行事要素を父母として生れたるが如きものなり。太平記の成りしも文中の頃なるべし。正平の終頃成れる吉野拾遺(二卷、二)にも其名の宇治拾遺に出でしとの傳へあり。(空阿、水語傳)如槐子の可笑記にも雑々拾遺と共に之を引けり。應永七年(二〇〇)には、信濃の大塔合戦を、諏訪の社僧堯深の記したる大塔物語あり。往來物に似たる文氣なり。土佐行廣(永和)又

徒然草の説話文學と太平記、吉野拾遺

鏡破物語、漢故事和歌集、東齋隨筆

は光廣作(應永)と云へる奈與竹物語繪卷の盛りに行はれしも當時の事なり。奈與竹物語は著聞集(卷八)に、後嵯峨帝の頃、三條白河少將を鳴門少將と世に呼べるは、鳴門の若女としてよき女の上る所と云へる、その女房との物語を記したるに由れるなり。一に鳴門中將物語とも云へり。考古書譜に隆能筆爲家詞書のものありと記せるは信じ難きも、建長帝の白峯社に寄進したるもありと云ひ、今も金刀比羅社藏の繪卷ありと云へば、鎌倉の頃より既に行はれたりしと見ゆ。此作風葉集に鳴門中納言物語とあり、乳母草紙にも見えて、類聚名物考(卷五、七)には鳴門の少將物語、一名奈與竹と記したり。奈與竹と云ふは歌に由れるなり。後花園帝の永享七年(二〇)には、貞成親王、前年、明德記、堺記、椿葉記を上りたるに加へて古今著聞集を上ると見え、文安の終頃(二一〇)には光信の鏡破物語繪卷行はれ、蒙求和歌に倣へる漢故事和歌集なども出でたり。一條兼良の東齋隨筆(平假名交)も應仁の亂前後(二一七)のものにして、音楽、草木、鳥獸、人事、詩歌、禮節、好色、遊興など、何くれとなき故事を集めたるも、この系統中の作品なるべし。

殊に鎌倉の時よりこの方、室町時代にかけては、文學の主流たる美文學的作品にても、一面には著るしく佛教的の趣味を加へたと共に、一面には又説話中心の文學となりはて、



近世期の小説  
説話類と繪卷  
の傳説味

物語は孰れも一個の脚色ある筋組を主としたるものとなれり。こは文學の美的批評より見て決して高きものにあらざれども、兎に角かゝる文學が時代に優勢なりしは、即ち説話の趣味の、時人に喜ばれしを證するものなり。例へば昔の衣、小落窪、鉢かつぎ姫、岩清水、秋月、岩屋、伏屋、宇治大納言<sup>(三)</sup>等の諸物語を見よ、皆傳説的或は世話的説話を以て其文學の中心とせざるはなかるべし。鎌倉期より引續ける繪卷の類にも、此系統のもの少からず。看聞御記の伴大納言物語、彦火々出見尊物語、言繼卿記の狐化繪等これなり。之と共に又當時に出でたる各種の語り物には後に記すが如く、佛教文學系統の交渉最も大なれども、新古の説話が、其内容、題材となりし事は争ひ難し。宴曲の伊勢物語、源氏物語、靈鼠譽、管絃曲、長恨歌の如き、謠曲の田村、八島、信田、船辨慶、雨月、簾、大江山等の修羅物、熊野、梅若、蘆刈、浦島、松山鏡の如き鬻物<sup>(雨月の記述は、後の雨月物) 蟬丸、安宅、望月、櫻川、隈田川、曾我諸作の如き</sup>現在物、紅葉狩、羅生門、富士山の如き五番物など又舞の詞の満仲、信田、大職冠、入鹿、百合若大臣、硫黄ヶ島、夜討曾我以下の源平物、お伽草紙の十二段草紙、酒顛童子、富士人穴草紙、浦島太郎、一寸法師、福富草紙、横笛草紙、附喪神、化物草紙、田村草紙、さては、古淨瑠璃の諸作にも其趣味は盛んに流れ入りぬ。今昔、宇治拾遺等の傳説が謠曲に入れる事については、

語り物系文學  
と傳説味

江戸時代文學  
の説話的要素

先年久米氏も『能樂』にて今昔系統の物語流行が平家節の發生を促し、やがて謠曲にも入れるなりと論ぜしことありき。但し狂言記の文學には朝比奈、那須の與一、生捕鈴木、二千石、こんくわい、七騎落等數番を見るの外、その趣味主として現實的なる社會生活の方面に注がれたるを以て説話味に至りては、察る甚だ稀薄なりき。

斯くの如くに時と共に發達し來れる説話文學の系統は、室町時代より江戸時代に入るに當つては、佛教系統文學と相結んで、他の諸系統の文學よりも、一層優越なる勢力を以て進入するを見たり。而して江戸時代の文學の主流は所謂第五、第六系統のものにして、之を從來の文學に比すれば、一層國民的となり、社會の各階級に擴布して、著るしく多方面への發達を遂げれば、如上の説話的要素も亦隨つて幾多の方向に分派し浸潤するを見たり。

是等の文學上の經路と性質とを、細密に敘述するは素より一朝一夕の能くする所にあらず。且つ今は、我文學に於ける説話文學の大體の系統的發達を敘述するを目的とするが故に、單にその大略を述べ置くに止めざるべからず。

安土、桃山時代より江戸時代の初頭にかけては、文祿二年の伊曾保物語 (Esopono Favalas) の羅馬字口譯あり。Esopon 物語中、七十話を抄譯したるもの、この後慶長、元和、寛永、萬治

伊曾保物語、  
尤の草子、御  
伽婢子等



等の諸版ありて之に次げり。こは南蠻人の交通、耶蘇教の傳播と共に、我國に新たに入り來れる説話文學上の一系統なるが、當時に於ける文學上、道話上の影響は、差したるものなかりしが如し。當時西國の傳道教會にては、我平家物語なども採録して出版したりき。又之と共に枕草紙に眞似し尤の草紙(二卷、寛永前)、棠陰比事を翻譯したる棠陰比事物語(五卷、慶安四)、剪燈新話を翻案せしと云へる淺井了意の御伽婢子(十三卷、寛文六)、某氏の釋迦八相物語(十卷、寛文六)の如く、支那の怪譚、巷談、笑話の文學が、我説話界に流入したるもの少からざりき。古く萬葉集に多大の影響を與へたりし遊仙窟を初め、淮南子、拾異記、述異記、冥報録、言鯖、應階録、雜纂、幽怪録、會眞記、列仙傳、諸噓録、調謔篇等此期に翻案せられたるもの恐らくは數百部に上るべし。是等は伊曾保物語の影響と同じく、直ちに我説話文學の内容に同化して長く傳承せらるゝに至りしものは甚だ稀なりしも、我國民の裡に説話文學の趣味を刺激し、其形式、思想に間接の影響を與へたりし事は、蓋し決して少からざりしなり。且江戸時代の初期は、一時の啓蒙時代に當れるものなれば、此期の假名草紙、浮世草紙の一半は、其點に於ても啓蒙的なる説話趣味を以て形成せられたるなり。従つて説話の社會生活上の教訓に應用せられたるが如きもの亦與らざるを得ず。淺井了意の本朝女鑑、孝行物語、堪忍記の如きもの、又

外國傳説文學  
の影響  
可笑記等の教  
誨

繪畫上の傳説  
繪卷

軍談、諸國譚、  
笑話類

如傀子の可笑記(五卷、寛永十三)に今は昔の物語、昔さる人の云へるは、昔ある人の云へるはなど記し出して、初に教訓の意を述べしが如き是なり。後の心學の道話の類も、説話文學としては亦この系統に屬するものならん。但山岡元隣の他が、身の上などはその説話味甚だ乏し。當時又土佐、住吉家等には傳説物語を粉本とせし繪卷少からず。前にも挙げし如慶の宇治拾遺物語繪、具慶の門部府生繪卷等云ふ類是なり。

儲前期につける説話文學としては、軍談、讀本の類に、信長記、太閤記、三浦淨心の慶長見聞集(十卷)などあり。笑話、滑稽の話譚を集めたるものに、醒睡笑(元和九)、咄物語、私可多話、蜀山人の醒睡笑系の落咄本と手記せるきのふはけふの物語(二卷)、又竹齋物語(二卷)、當世尤の草紙(五卷)、仁勢物語(二卷)、犬つれ(二卷)等あり。御伽婢子に出たる怪談、奇聞の作には、お伽物語(五卷、萬治元)、百物語(二卷、同)、北條團水の怪談諸國物語(五卷、享保十一)、百鬼徒然袋(三冊、天明四)、百鬼夜行(三冊、安永六)、同拾遺(安永)、古今百物語、大和怪異記、今様二十四孝、拾遺お伽婢子、丈阿の紅皿缺皿往古噺(安永)、堀田麥水の三州奇談(九卷、加能越)などを數ふべし。釋了意の浮世物語(五卷、寛文初)なども、今は昔にて始め、心の儘ならぬ浮世こそ一寸先は闇なりと云ひ、浮世坊の生涯を述ぶるに、稍心理的に入れる筆つきなり。或人はこを伊曾保物語又は徒然草に倣へる作なりと云へり。



諸國譚としては、了意、西鶴、其磧等の諸作に系統を引ける種彦の邯鄲、諸國物語に到りて、小説的の說話味大いに加はるを見る。

以上の系統は、孰れも國民生活上に、斷絶すべからざる古き趣味性を根柢とするものなるが故に、元祿以後文學上の創作性顯著となれる間にありても、浮世草紙にては一代男等の好色物、永代藏等の町人物にすらその分派を認むべく、又讀本にては、其趣味一層累積的にして、近路行者の古今奇談英草紙(五卷)、上田秋成の今古怪談雨月物語(安永三)、建部綾足の本朝水滸傳(安永二)等を始め、京傳、馬琴等の作にも、一二の說話のその脚色中に要素たること殆んど常套の手段なりき。又古物語の文體を以て草したるものには、前記の雨月物語、綾足の西山物語(三卷)、石川雅望の飛驒匠物語(近江縣物語、しみのすみ、物語後出)、芝浦物語、村田春海の竺志船物語などあり。所謂和漢混、淆文の一體をなせる新井白石の藩翰譜なども、其下段書せる注釋文は、説話中心の趣味と眞率、粗朴なる筆致とに於て、一種の説話文學と見るを得べし。折焚く柴の記は大鏡などの歴史物語に出でし點に於て又同じ趣味を含むべく、室鳩巢の駿臺雜話、松平樂翁の花月草紙などにも亦同じ文學上の性質稍備はれるを見る。

語り物、金平  
淨瑠璃の說話

又語り物にても、古淨瑠璃の一派なる金平淨瑠璃は、其題材多くは舞の本に出でしと云は

る、丈け、頼光蜘蛛切、金平誕生記を初め、全く説話中心の文學にして、従つて是より出でたる近松以下の淨瑠璃、及び歌ひ物と合體したる歌舞伎芝居の脚本中にも、説話的要素の流入したるもの甚だ多し。そは單に時代物の上に於てのみならず、世話物中にも、又景事、振事の曲中にも、其例乏しからず。かくの如く今昔物語集に集注したる説話文學の傾向の、或は全體的に或は要素的に江戸時代の文學の諸方面に、分化し影響したるは甚だ多きものに於て、其各説話について、夫々特殊なる發達上の觀察を試みるは、一個の趣味ある研究部門なるべし。今は其餘裕なければ、以下只今昔物語集及び宇治拾遺物語、古今著聞集等に直接關係ある文學の如何に夥しく著述せられたるかを記述して、この項を終るべし。

先づ宇治大納言物語は、天明六年洛の滄浪居主人序に、貞享四年初めて世に弘められたれども、後埋もれて辛うじて尋ね出せる由見えたり。こは先に言へる如く隆國の物語に擬せしもの、此名もて再び世に行はれたるにて、内容上よりは宇治拾遺系のものなり。又正木干幹の宇治拾遺物語標註(十卷)、北慎言の同抄(三卷)、小島之茂の同私註(三卷)等も出でたり。其他此系統の作には群書備考に寛永二十年板本と見ゆるいつを昔あり。不破拾遺(三卷)と云ふも江戸初期のものにして、室町時代の土俗傳説を列記したり。江戸の中期より下半期に入りては

集に直接關係  
ある江戸時代  
の文學作品



宇治大納言物語、宇治拾遺煎茶友、狂歌今昔物語

文學の各方面に現はれて山東京傳の今昔八丈揃(六冊、文化八、九、お駒、丈八物語を脚色す)、關亭傳笑の今昔猿人眞似(二卷、文化十二、堺、衣裳東茂他打話)、竹塚東子の今昔とのゐ物語(五卷、文化九、十一、佐々木浪人、幸雷左衛門一家の騷動合卷)、櫻川慈悲成の今昔虛實録(六冊、文政十四、陶木家の騷動話)、式亭三馬の日暮林清、驪燒等太異魔昔阿露雜談(一名地藏和讃の初まり、三冊、文化十一)、藤原道信の今昔寫實袋(五冊、寫、明)あり。墨川亭雪麿の宇治拾遺煎茶友(六冊、天保五)、は宇治拾遺の序文に依りしものにして、集の血の卒塔婆話の條に取りて『今は昔』にて書き出したれど、實はお駒才三話を記せるものなり。かく當時此序の話より、茶話の意に聯想せられ、一面には又落語の方面にも應用せられたり。全亭正直の狂歌今昔物語(二卷、文化十)は、石川雅望の序に今昔物語非隆國説を記し、東夷庵の序文に『今昔物語は猶宇治の茶話なるに對し、それを狂歌、狂文に點心して云々全亭ぬしの鼻少し隆國卿の様に思はるゝは、茶臼の挽木、ひく方よりみねばなるべし』など云へり。之と同じ類には明治に入りても秋迺舍望城の今昔狂歌叢話(一卷、明)、ありて今は昔など記し始めたり。又新著聞集(十八卷、寛延二、平假名文、忠、孝奇怪等十八篇の話を記す)、犬著聞集、雪磨の合卷、犬著聞傾城鑑(六卷、文政十)、八島定岡の猿著聞集(五卷、文政十一、古今著聞集)、松風庵寒流の老媪茶話(寛保)、三好想山の著聞奇集(五十卷、嘉永二、奇譚雜談など、櫻川慈悲成の今昔縁起の白綾、二冊、寛政八、羽衣漢文の後、四部に分ち記す、教訓的なり)、櫻川慈悲成の今昔縁起(二冊、寛政八、羽衣漢文の後、四部に分ち記す、教訓的なり)、可笑の今昔曾我の面顔(一冊、安永八)、鶴屋南北の昔同今物語(六冊、文政十)も名高し。此中近江縣物語は今昔物語集の滑稽味と其世界とを受けたること最も多く、今は昔にて記し始め、頼光四天王話、滿仲話、坂上梅丸話等の中に、盜賊譚、合戰譚、戀愛譚、利牛譚等を記し、結局勸善懲惡の教を寓したり。『梅丸任所近江にて人々に語りけるを其儘にかきつければなるべし』など記したるも、集の傳聞の體に倣ひたるなり。十返舎一九の膝栗毛は了意の東海道名所記を粉本とすと云ふも、一部の挿話の全く集に出でたる近江縣物語に採りしもの少からざるが如し。又しみのすみか物語は宇治拾遺の話譚と文體とに擬せしものなり。手柄岡持の後は昔物語(一卷、享和三)、八文字屋自笑の今昔九重櫻(五卷、寶曆十、いまはむかしと訓み、桓武帝の頃の、往昔喻善惡身持扇、和十五)、今昔出世扇(其讀と合作物、五卷、延享二)も見ゆ。葛飾隱士馬文耕の愚痴拾遺物語(寶曆)は宇治拾遺物語に擬したる名にして序に著者新橋邊に住み、信樂なる茶店にその愚痴話を聞く體にて議論、語釋など志す。隆國茶話の傳説に依りしもの、淡洲樓焉馬の開卷百笑(一卷、文化)は一名無事志有意と云ひて今は昔などにて始めたるもあり。山徳、萬羅、晋家魯石等當時の作家の手になれる落語集なり。醒睡笑などに出でたりと云ふも、隆國の茶話より宇治拾遺物語、今昔物語が聯想せられたる

近江縣物語、今昔出世扇、愚痴拾遺物語

開卷百笑、貧著物語、古今拾遺著聞集



によるものなる事明かなり。そは今日も落語家の間に祖述する所なり。醉雅子の著聞雑々集(五卷、寶曆二、稍小説的に世話譚を記す。平假名交、事書體なり)、鬼卵の今昔庚申譚(卷五)、寧儉堂主人の照代著聞集(四卷、天明七)、今昔諸國話(五卷、明和元)、今昔浦島咄(三卷、明和四、青本の中にて二女戀の話より敵打に至る口語體)、等も此種のものにして、與東雲齋の今昔萬才の島臺(卷三)、一九の今昔狐夜咄(卷三)、等は黄表紙物なり。三條茂佐磨の貧著物語(五卷、文化にて始め、中古の今昔物語に擬す)、重扇助の今昔相宿噺(上下、石井常右衛門、高尾大夫の脚本なり)、濱松氏助の今昔二枚繪(文化二、孝義)、近松の心中二枚繪草紙(寶永三、氏助の讀本、の名の出づる所)、双木千竹の昔唄今物語(天明)、作者未詳の今昔妹背の腹帯(寶曆十三)、藤原川定の古今拾遺著聞集(六卷、安永二、今昔物語、古今著聞の二集に、より、永録、天正の頃の物語に及びしもの)、近世拾遺物語(七卷、平假名交り事書、百六條を記す。風土地、古事談、江談抄、犬著聞、十右衛門の事蹟なり)、玉池谷翁の俳諧著聞集(四卷、文政八)、手拙の俳句集、今日の昔(元祿十二)、今昔續百鬼(安永八)、今昔百鬼拾遺(安永十、付喪神繪卷等に出、繪物語に類せるもの)、高井蘭山の今昔見聞草紙(二卷、天保十)、黒澤翁滿の藐姑射祕言(二、今昔に出でしもの)、浪速樹下翁の今昔道の栞(三卷、嘉永二、今は昔物語の序あり)、朝寢坊夢羅久、林屋正藏の今昔物語(浮世床)、など甚だ多し。

バラード女史の宇治拾遺評

Miss S. Ballard の『宇治拾遺物語について』には小論を添へて終に卷七、五色の鹿話を譯出したり。「その序論に曰く『或るものは上品、或るものは悲惨、或るものは猥雑、或るものは事實、或るものは虚構など様々の物語を含めり。中には印度

支那の物語も見えたり云々。……我等は八百年前の日本國民性を見得る點に興味を有す。殊に Arabian nights, Grimm's fairy tales, 等の外國説話との連鎖及び戀愛要素 Motive of love. がこれらの説話中に入らざる點は甚だ興味あり。歐洲人にとりては、二百の戀愛脚色なき短話集の出現するが如き事は想像しがたき所なり。日本人の心理には戀愛はある錯雜せる感情として以外、特別に入々の興味を引かざるものと見ゆ。又文中には Hish legend. と全く同一の話 (Tr. Vol. III p. 62) あり。』(Asiatic Society; Transactions Vol. XX. VIII.) 戀愛の要素を、説話文學に中心的ならざるは、女史の云へるが如くなれども、之を以て我國民性となすは、戀愛物語の高潮に達せし平安時代の文學評としては當らざる事言ふ迄もなし。又 I. Noenimi Ima wamukashimonogatari (1878.) に將門話を伊譯したる事あり。

此他にも尙目撃せざるも多かるべし。是等は孰れも今昔系統の作品にして、或は説話文學として或は説話要素として、當時の假名草紙、浮世草紙は素より、讀本、滑稽本、人情本、草雙紙、青本、黄表紙、合卷等のあらゆる小説を初め、淨瑠璃、歌謡の語り物、謠ひ物及び脚本等凡ての文學部面に涉りて、廣大なる分布と系統とを有せしものなり。假令そが各文學の本質上に於ける作用が、敢て悉く中心的影響を及ぼせし物に非ずとするも、集の説話文學としての一面が、如何に近世の國民文學に大なる波動を與へたりしかは一目の下に瞭然たるべし。今江戸期に於ける右の諸作の影響を見るに、其關係は凡て八種類に分化したり。即ち(一)

近世通俗文學に及せる廣汎の影響

影響關係の八種類



文學の系統的、通性の等しきもの、例、近世拾遺物語、近江縣物語等、(二)、直接、説話の採られしもの、例、近江縣物語、宇治拾遺煎茶の友等、(三)、文學の形式上に似たるもの、例、貪著物語、古今拾遺著聞集等、(四)、名稱を採りたるもの、例、狂歌今昔物語、貪著物語等、(五)、宇治拾遺及び茶話落語系のもの、例、不破拾遺、愚痴拾遺物語、宇治拾遺煎茶の友、開卷百笑等、(六)、古今著聞集系のもの、例、江都著聞集、犬著聞集等、(七)、狂歌系のもの、例、狂歌今昔物語、後は昔物語等はなり。文學系統上に於ては、(一)、(二)を主要とすれども、前記の作品中にては、(三)、(四)に属するもの最多かるべし。(六)の類の痛く行はれたりしは其名の冠し易かりしに因るならん。

又この時代に於て、寺島良安の和漢三才圖繪を初め、京傳の近世奇跡考の如き、文人作家の間に和漢洋の故實を探り、傳寄雜纂を究むる風の盛なりしは、一面に於て明清以來の考證學、我國學の如き科學的研究法の發達に基くものなれども、一面に於ては、説話文學の弘布と相關したる時代の趣味、之が陪因たりし事も否む可らず。斯くの如くに觀來れば、我近古近世の文學界に、脈々として盡きざる一連の説話文學系統の貫流するものありしは、何人も諒得ある所ならん。其發現の狀たるや、或は合し或は分れ、或は顯はれ、或は幽かに、或は時代を變じ、或は事件を換へ、或は材料を新たにし、或は場所を異にしたるも、畢竟、次々の時

和漢三才圖繪  
と近世奇跡考

代と國民生活とに、最も適合したる意匠の下に、種々の説話要素の文學中に入り來れると共に、時人も亦喜んで其話譚としての點に興味を感じて愛讀したりしは明かなり。されば近世通俗文學の發達史上に於ける今昔物語集の説話文學としての系統が、如何に重要な位置を占むるかは殆んど人の意表に出づるものありと謂ふべし。

## 第二 佛教文學系統

前節にては、集の説話的要素の文學史上に於ける系統的發展を概觀したりしが、素と集の文學上の形質は、先に論究したるが如く、主として佛教文學たる點にあるなり。若し人あり、集の代表的文學系統は孰れに屬するかと問はば、之を約して、國學中の第四系統、即ち佛教文學系統に屬するものなりと答ふるも不可なからん。されば、集の佛教文學要素の下降系統に於ける追跡は、其説話文學系統のそれに比して一層重大の意義を有す。何となれば、近世期中、少くとも鎌倉、室町時代の文學界に於ては、佛教要素は實に其重力的中心を占めたるものなるのみならず、文學者は多くは僧侶たりし事實あり。且江戸時代に入りても、佛教は飽迄、民間生活に融和して一般の弘通を見たりし結果、其文學の歸着點は常に佛教的、信念、若くは佛教的、人生觀に外ならざりしを以てなり。故に集の文學は單にその形質として

今昔物語集と  
佛教文學系統

近世文學に於  
ける佛教要素  
と集の文學



も後代の文學に一種の系統を有する事實あるのみならず、斯かる系統中の佛教文學が常に他の系統と相交渉し、若くは新たなるものを派生せしめたる點に於ても、亦幾多の緊要なる問題を含めるや明かなり。

偕今昔物語集に次いで現はれたる佛教文學系統の作品には、前編にも擧げたる永觀(九七)の往生十因(卷一)、往生講式あり。共に念佛往生の文學にして、著るしく音學的の要素を含み來れり。長秋記に保延元年(九五)早く三部經繪の圖せられし事を傳へしも亦當時の淨土思想の流行を示すものなり。講式文學即ち諷誦文學は、古く奈良時代及び平安前期より行はれしこと既に述べたる所なるが、其類は願文、表白文學と共に佛教文學中の一分派をなすべきものにして、四座講式を始め、或は諸佛に或は諸寺に關して、近世に到る迄盛に行はるゝを見たり。其文詞は、和漢混淆文、對句駢儷文及び今様其他の韻文の發達に深き關係を有するのみならず、其聲律音樂は近世期の諸文學と歌謠との發達に除くべからざる交渉を示したり。殊に和讚と今様とが主として後世の謠ひ物に影響を及ぼせるに對して、講式の聲律の主として語り物の方面に著しき感化を及せし事を注意せざるべからず。例へば平曲と講式との關係の如し。(兼當文學士、日本の音樂等)覺饒(一八〇)の歡喜天、菩提心等の講式、葬儀諷誦文、心覺

講式文學と表白文學、保延の三部經繪

講式音樂と平曲

本朝續文粹の佛教文學味

宗友の本朝新修往生傳、珍海の日本三寶感通集

梁塵秘抄の佛教的詠歌

(一八四)の讚集(卷一)表白集(卷一)雜要文集(卷三)要文集(卷一)など孰れもこの系統に於て第一小系の佛教文學に屬するものと目すべし。かの、藤原季綱の本朝續文粹(十四卷、一)の如きも此點より見來れば、殆んど純然たる一個の諷誦願文文學たるものにして、是に三分の文選文學の影響を加味したるを見るのみ。所謂佐國、明衡、敦光、敦基等當代の文人詞客はかゝる佛教文學に於ける作者の優なる者なりき。近衛天皇の仁平元年に藤原宗友の編める本朝新修往生傳同じ頃珍海の撰みし日本三寶感通集(一八〇)は、之に反して集に次げる縁起傳記の作物にして、第二系の文學に入るべし。此期の末葉(一八四)に當りて、後白河法皇の親撰に係はる梁塵秘抄(卷一)出でたるが、こは神樂、催馬樂、風俗、今様、法文歌(林)等、當時の歌謠を輯めたるものにして、現存せる卷一(版本に依る)に見るも、法文歌二百十九首、三百二十五首中、二百八十餘首は、佛教的詠歌にして、和讚より今様歌の發達すべき經路に生れたる當時の長歌、古柳等の諸體は遺憾なく傳へられたり。かく當時の歌謠界の一半が全く這種の宗教歌をもて代表せられたること、古今東西の文學界に於て頗る異數とすべきものならん。蓋し第五文化時代の終なる鳥羽崇徳兩帝の頃は、現存神樂、催馬樂譜の略、成立せる時代に當りたるのみならず、上記の講式、表白文學の盛行せし様と云ひ、第六文化時代に入りて梁塵秘抄等の著作の



平安末期の文學歌謡と佛教

梁塵秘抄口傳集の音樂歌謡と佛教

成りし事と云ひ、其他今様、白拍子の流行せし事や、二期を通じて淨土、念佛宗の興起せし狀など綜觀すれば、所謂院政時代と平家時代とは、實に我文學界、歌謡界の最も佛教と融和的發達の頂點に達したる時期にして、新時代の文學界の大勢は此間の傾向中に既に十分豫測すべかりしなり。其趣は妙音院師長説ある嘉應元年(二八)の梁塵秘抄口傳集などに歴々として指すべく、佛教と音樂歌謡とは奇しき許り合體して發達したりき。(此書も廿卷中今在る卷十のみ。されば法皇の梁塵秘抄前) (は群書類從に入れるものによ。名目など稍訝し) されば講式文學の隆んなりし當時の時代を觀察して『平安中期以後より講式の信仰と風俗とは大に行はれ、従つて一種の特色ある文章と節調との發達を見るに至れり。源平盛衰記(卷卅)にも金仙寺の觀音講に、義經辨慶等が闖入する事など見えたれば、當時既に所在にこの風行はれたるものと見ゆ。而して現存神樂、催馬樂の作曲せられたるは天治、大治の交に當りたれば、講式の俗の盛んなりし事も、此音樂的時代の傾向に乗じ、僧侶が文學上の技術を以て、その信仰を民間に弘布せしめんと試みし一種の布教運動とも云ふべきものならん。我第十一世期より第十二世紀にかけては、新宗教精神の發動に伴ひて、僧侶が從來の山門退嬰の風を脱し、音樂、文章、儀式等も力めて其形式を通俗化し、茲に平民と僧侶との接觸協同を現出し、因つて以て益、新時代の機運を促進せしめたる

寶物集と其説話

泰覺の法鏡

なり』(上田博士、言語と歌謡講義の説。)との評あるは、前述の佛教文學界の消息と時代の傾勢とを明瞭に指摘したるものなり。次いで治承三年(三九)平判官康賴が赦免の砌の著と云へる寶物集(七卷、片假名文)は、今昔に繼げる第三小系の文學にして、序文に嗟嗚の清涼寺釋迦詣に談義をきく體に記して、大鏡の脚色を用ひ、三寶を聽き得て六道を問ふ事に始まり、道心を起し、罪業を滅し、善知識を得て、正念往生するに至る心得と例話とを注し、源信の往生要集、永觀の往生講私記などを擧げ、聖德太子以下往生人三十六人の事を記したるが、多くは今昔の説話に出でたる人々なり。爲憲の三寶繪に倣へるものならん。又『我等ハ何シニ生レケン』などの今様も見えたり。但し後に近代作者として男女七十五人を記したるは續本朝往生傳に似たれども、その沙彌十五人中、『性照康賴入道』とあるは如何にや。自署にはあるまじう覺えたり。後人の假托ならぬ迄も、この書の現在テキストは尙信すべからざるに似たり。泰覺の法鏡(八卷)と云へるも此頃の作なるべし。

鎌倉時代に入りては、前期の終に成れる法然の淨土宗、建仁寺を創めし榮西の禪宗相並んで興りぬ。解脱上人貞慶(建久七、一八五六歿)明惠上人高辨(建保四、一八七六歿)等の講式は、前期の講式流行に引續きて行はれたり。解脱上人の愚昧發心集(卷一)は、和臭ある駢儷體の漢文にて、人生の無常



愚昧發心集爲  
盛發心集、一  
言芳談、肝心  
集等

を説き、煩惱の苦を脱して往生の信を得べきを勧めたるものなるが、敬白十方法界、一切三寶、日本國中、大小神祇等と云へるが如く少からず、兩部神道の思想を混じたり。爲盛發心集(漢文)、一言芳談(卷一)、肝心集(卷一)なども多くは法然の歿頃(建曆二、一八七二)に出でたるべし。爲盛發心集は角戸三郎爲盛發心之顛末を記せるものにして、關東弓取の強者熊谷、平山、角戸、甘糟四人と云ひ、一谷、西城戸口合戦に敦盛討取より無常を觀じて法然の弟子となると云ふなど、普通に熊谷の事蹟と云はるゝものに當れり。その終に天竺の五天往生記(天親菩薩作、羅什譯)、唐朝の寶珠往生傳、新修往生傳等を初め我朝の六家十一卷傳をあげ、善知識、出家、往生の例を示したり。五天往生記は、淨土眞宗教典志に天親菩薩作説を僞妄としたり。天竺往生驗記(卷一)と同じものなるべく、こは傳教の將來せし所なり。一言芳談は、問答體に記したるものにして、解脱上人の語なども引きたり。黒谷、法然上人の

西へ行く筋一つだに違はずば骨と皮とに身はならばなれ。

月詣和歌集と  
佛門の歌集類

の詠にも見え、其他明遍、聖光、心戒、然阿などの教旨を記しぬ。肝心集は建久元年寶地房の表白文など當時の多くの諷誦文を輯めしものなり。今様、和讃、朗詠等と寺院の梵漢諷誦との聲樂上の交渉は、これらの書中にも窺ふを得べし。壽永元年(一八、四五)、加茂重保の月詣和歌集

には緇徒六七十人の作者を出せり。又平安末期より此頃にかけて出でし佛門の歌集にして名のみ傳はれるものには尙、賢辰の三井集、覺審の春花集、靜縁の閑林集、證心の大原集、宗圓の明月集、慶辨の狂言集、宗延の山科集、顯昭の桑門集、多々法眼源賢の樹下集(卷九)、某の山伏集、蓮露集等甚だ多かりき。

地獄草紙と信  
貴山縁起

地獄草紙は信貴山縁起等と共に、この期の劈頭文治頃(一八五)に、春日光長の手に成れりと云へども所傳確かならず。されども地獄繪は此後長く畫界の一流を成して江戸時代の初に及べり。

長明の方丈記  
と發心集

日野の外山の麓に世を捨て、心一つの安きを計りし鴨長明の方丈記(平假名交)は建曆二年(七二)の作にして、佛教文學系統の第三小系に入るべきものならん。承元二年方丈の庵を構へてより四年の間、明け暮にあはたしき世の遷り變りを觀じ、人と世と自然とを見過ぐして、寂びたる法の祈願に、一身の安住を求めたりし著者の消極的、人生觀を窺ふに足るべし。其對句に富める句法と經偈的句調とは、哀愁枯淡の情趣を盛りて巧みに調和したる聲調を成せり。蓋し壽永、文治の急激悲慘なる時代の轉變は、前期の文明を夢みたる京畿の人心にも新時代の主人公たる武士、下民にも共に甚深の感動を與へたりければ、そこに湧出したる宗



教的人生觀は、現世的快樂主義なりし平安時人のそれと、其色調、漸く著るしく異なるを見ぬ。前代に漠然として一二の人の上に現れたる厭世の情調は初めて寂びしき悲哀の想念となりて人々の胸壁を、大海の波の如くに揺りたるべし。長明發心集(片假名交八卷)は恐らくは長明以後、何人かの作なるべけれども、私聚百因緣集に、長明記處如別條云々とあるは、恐くは發心集の事なるべし。其文藻は、稍自在なる筆致の事書體にして、集に比すれば、遙かに長句法の文章を含めるものなり。殊に寶月上人の語の條に、毎日曉には、明けぬなりの歌(後拾遺、圓松法師歌)日中には今日もまたの歌(千載、赤染衛門歌)晩には山里の歌(拾遺、讚入不知歌)を誦し念すべしと云ひ、惠心も初めは、和歌綺語などを往生の障として斥けしが、一日曉天に湖上を見渡すや、忽ち『世の中を何にたとへん朝ぼらけ』(萬葉、拾遺、滿警歌)の詠を想ひて、聖教と和歌二道一體の理を悟りたりと云ひて(六卷)、佛法僧侶と和歌との關係を示し、下山僧の事の條に『君ノ御爲ニハ高キ大神ハ現ハレ民ノ爲ニハ卑キ道祖神トナリ智慧ノ前ニハ本地ヲ現ハシ邪見ノ家ニハ佛法ヲ戒メ給フ云々、神ノ信仰盛ナレ佛法佛寺ハ衰フ衆生ハ神ニ依リテ漸ク結縁ス』(二八頁)とて、愚昧發心集よりも一層明かに神佛混淆の思想を説きたるは注意すべき事にて、近世期に入りて益々、佛教信仰が神道思想と混和したりし趣を見るなり。

神道佛教和歌の混淆

平家物語と源平盛衰記

説話文學系統に述べたる愚管抄(一八八〇六八三)は、又少くとも第三小系の程度の佛教文學としても認るを得べく、保元物語、平治物語及び延慶本、一方本等の發達は尙後年の事とするも、兎に角平家物語、源平盛衰記等の原形は、早くもこの頃迄に成れるならん。平家時代なる通憲入道の藏書目錄にも平家家記と言へるもの少からず有りし様なり。八雲御抄(一八八〇)にも平語抄(卷一、學書)とあるは、若し平家物語の平語なるにや疑はけしれども、弘安以前に一部を成せし吾妻鏡にも、平語、盛衰記の引用せられたるに加へて、佛教文學の所謂第三小系の物語が相應に發達し得べき情勢は、前述の諸作を出したる時代に於て之を認むるに難からざるべし。承久二年(八〇八)には、蓮禪の三外往生傳、傳記文學に現はれ、翌年に安居院聖覺の唯信鈔、後世物語、大原談義なども、一種の佛教文學系統に屬するものにして九年後なる寛喜二年に親鸞之を書寫せりと傳へたり。建久七年(一八五六)藤原定房の注せる多武峰略記には増賀等の傳話多く、北野縁起(卷三)も此系の作にして、殊に下卷には託宣往生の譚など十條を記したり。千種有房の野守鏡(上、下)は發心集系の者として永仁三年(一一五五)に出でたり。著者は禪宗の信者なりしが當時の信仰界の禪念兩宗並馳の様なるを述べ、又天照大神を以て大日の化現なりとする本地垂迹の説を説き、更に佛法と歌道との關係を叙べ、佛教的なる和

北野縁起と野守鏡の思想



教訓抄と續教訓抄

東關紀行、南海流浪記、海道記

地藏菩薩靈驗記と實叡

歌の聲律論、聲明、九條錫杖法等の利益など述べたり。かく當時は詠歌の方面のみならず、音樂聲律の技術の上にも著るしく佛教と接近したりし結果、天福元年狛宿彌近真撰の教訓抄(十卷、片假名交一八九三)の如き、一種の雜傳書を出したり。教訓抄は歌舞口傳五卷と俗樂口傳五卷とよりなり、神佛混淆の節も見ゆれども、大體に於て和歌藝術上に著しく佛教的説明を加へたるものなり。其後元享頃(一九八)に狛宿彌朝高撰の續教訓抄(片假名交十一冊)之に續けり。古事談、著聞集等に見ゆる説話を交へ、書體は今昔に近きものなり。遙かに後の豊原統秋(二一八)の體源鈔(片假名交、廿卷)、安倍季尙(五〇)の樂家錄(漢文、五十卷)なども、古譚を引用し佛説に附會したる點は其趣味相同じ。治安三年(〇二)親行の東關紀行、道範の南海流浪記(漢文)稍後れて光行の海道記等にも佛教趣味と故事とは全卷の基調を成せり。

又鎌倉時代の前期頃には、かの今昔物語集の地藏譚の系統を集成し、心覺の地藏に序いで地藏菩薩靈驗記(上下二卷、下卷佚)出でぬ。地藏信仰は平安時代に於ても甚だ盛んなりしを見たりしが、鎌倉時代以後に入りては、殊に此佛の現世の利驗を尊信する風盛となりたれば、平安時代に於ける觀音、地藏の順位は、此期に入りては少くとも對當の地位に進むを見たりき。著者三井寺上座實叡については、諸書多く記す所なし。只永田調兵衛の廣益書籍目録(元錄、五)

卷一眞言宗の目中に『地藏靈驗記、十三卷、三井實叡、元興良辨』(六四)と見え、増益書籍目録(德)卷二、佛書の目中にも地藏靈驗記十三卷とあるのみ。十三卷の靈驗記は、現本とことなるにや。尤も今昔、卷十七治安頃の話の次なる第十二の地藏譚に、正法寺の地藏昔は三井寺の塔の中にありて實叡供奉の修補せしものなりとあり、三井寺の前の上座云々ともあれば著者を云へるにや。續詞花集にも同人の詠一首ありと云へり。然らば靈驗記の時代は上りて平安末に入るべきにぞあらん。孰れにするも集よりは後の物なり。そはとまれ此靈驗記の文章は、片假名交文にて、彼人を『彼ノ仁』など云ひ、ヒをイにフをユに誤用したれども、今昔の如き奇字の使用は見えず。中比、鎮西の語、給への敬語用法も多し。大體に漢文脈味は乏しけれども、今昔に比すれば一層文語的なり。幾多の地藏驗話を記したるが、中につき、文學史上、最も注意すべき記事あり。そは三河大濱法師の傳の如く、往々他の説話に比して、數倍の長編に渉るもの、見ゆる事なり。其修辭も脚色も思想も、著るしく文學的性質を加へたり。大濱の法師(眞如)は、格別の智徳もなく、只地藏を信じて日を暮しむるが、一日窓前に眠れる夢中の告に、信施の積るを恐れて巡錫せよと勸むる者あり。之に於て罪障を滅せんが爲に、先づ信濃國善光寺へと旅立ちぬ。かくて途中富士の裾野に宿りしに、身は

大濱法師曾我兄弟の亡靈を弔ふ話



忽ち見知らぬ一堂に辿り着くよと覺えて、人に問へば、甲州一條、高砂河原の地藏堂なりと云へり。其夜風雨激しかりしに、忽ち血刀を提げて二人の男入來り、いざ戦はんとて出で行きぬ。堂にゐたる一人の女に宿を問ふに、我等は曾我兄弟の靈鬼なるが、父の仇討に罪を造りしが爲に修羅道に陥り、互に殺すこと日夜十二度宛なり。今は追善の功德により六度に滅じたり。我は十郎愛念の絆に引かれて此堂に入りしが、追福の功德により戦を免れたり。此堂は兄弟、父孝養の忠あるにより地藏の與へ給ひしものなりと。此時目を開けば、雲霧晴れて日は尙未の頃なり。身は草野の中の小高き古塚の上、一村薄の下に伏しゐたりけり。法師は驚き立ちて、夢に見たる甲州一條の高砂河原を尋ね行くに、牛追ふ牧童ありて其地の由來を語りて掻き消す如くに失せぬ。此地は蒲無の大河、東西に流れ、中に流れ堂と呼ぶ古堂ありて、本尊は六尺三寸の地藏菩薩の木像にて座はせり。夢中の啓示もあれば莊の檀那を訪れ、幻化の事を告げて其修善を勧めなす。かくて善光寺に詣でたる歸途再び流れ堂に立寄りて法華經を誦すれば、先の童子復現はれたり。是に御堂の由來を問ふに云々と告げて再び消失せぬ。之に於て懇ろに幻化の人々の成佛を祈りて歸來せりと云ふ話なり。

此脚色上の全體の結構を一考せば、何人も餘りに謠曲文學に近似したるに一驚せざるを

伏木曾我との  
類似、七五調  
の道行文

得ざるべし。曾我兄弟亡魂の修羅示現の物語、地藏童子の、一條河原、高砂河の流れ御堂等の故事來歴を夢告して消失すること、如來參詣の旅の次第、如來、地藏の利驗により、成佛冥福を祈ることなど、殆んど一個の修羅物謠曲を見る想あらん。就中、元清作と云へる伏木曾我に虎御前が十郎の墓に詣で、亡靈より戦の模様を聞く仕組とは最も酷似したるべし。其文辭より見るも眞如房が、如來と地藏との功德を述ぶる條など、戦記文の嚴めしき筆致に髣髴たり。殊に三河を立ちて富士裾野に到る間は、七五調の道行文を以て、最も華麗なる美文を聯ねたるなど、かゝる佛教文學系統の作品が、如何に戦記文學及び謠曲文學の形式構造の發達に、密接の關係あるかを示して餘あるものなり。實にこの種のものが疑もなく、鎌倉前半期の作物なりしとせば、謠曲文學の興起は既に當時に於て、門墻一步の地に到りたるものにして、曾我兄弟復讎譚が、如何に早くより時代の佛教趣味に由りて文學的脚色を施されしを窺ふ好資料ならん。この眞如房の話に次ぎては、末代上人が、伊豆箱根二所權現を草起し、承和二年に、伊豆温泉湧起したれば、之を走湯權現と云ひ、熱海の焦熱地獄を鎮め、遂に日金峰上に一丈の地藏となりし話も、長篇にして、現末の二世に交通し好んで縁起、由來を説けるなど、亦幾分謠曲的の性質を帯びしものなり。此後地藏菩薩に關したる文學には、文



明頃(二一三)日嚴院實昭の諸地藏文學を抄出したる地藏抄(卷一)あり。攝受、折伏二門の靈驗を説き、山伏の行體を説明し、神佛混淆的本迹論を以て結びたり。其國文脈に同化したる漢語、漢文の形式及び訓法は、一種の特色を有するを見る。地藏感應傳(卷二)地藏祕記(卷一)なども之に續きで出でぬ。繪卷にも此間に慶恩、光嚴帝などの地藏緣起繪卷など次々に頻りに出でたり。此風江戸時代に入りても、貞享四年(四三)に淨慧の地藏菩薩利生記(卷六)元祿四年に地藏利益集(卷五)あり。利益集には流暢なる國文を以て、壬生等の地藏話九條を擧げ、其他各地の靈驗譚いと多し。其他延命地藏和談鈔、十王讚嘆抄、地藏和讃註など續々現はれたり。

實治二年(一九)より正嘉二年(二八)に至る間は、親鸞の三帖和讃の成りし時期と云はる、頃にして、淨土往生文類聚鈔(建長七、一九一五)等も出でぬ。彼の悲觀述懷和讃卅三首の成れるは、正嘉二年九月廿四日の事にして親鸞正に八十六歳なりき。正嘉二年は實に後深草帝の御宇、關白兼平、將軍宗尊親王、執權連署長時、政村の時にして、日蓮の新宗を呼號してより五年後、普寧の來朝の二年前、彼の入寂の四年前の事なり。其前年には上宮太子御記も成れり。三寶繪との關係大なり。(西本願寺藏本、橋川氏の研究あり)日蓮作のには、立正安國論(文應元、一九二〇)開目鈔(上下、文永元、一九三三)撰時鈔(上下、建治元、一九三五)報恩鈔(上下、建治三、一九三七)兄弟鈔(文永十二、一九三五)及び多數の消息文など、佛教文學系統のならん。

の第一小系中にありて有數のものなり。開目鈔、報恩鈔などは、安國論の漢文直譯的なるを脱して、或は口語を交へ、或は候體を用ひて、自在に活機を捕へ、以て前代の平假名文と異なる一種の精彩ある平假名交文をなせり。殊に新池御書に至りては理氣切烈、一種の舒情と調節とに富める好個の佛教文學なり。蓋し近世和漢混淆文の發達史上、一大勢力を及せしものならん。

偕三帖和讃の成りし正嘉元年には、愚勸住信の私聚百因緣集(片假名、交、九卷)出で、寶物集以後に今昔直系の佛教文學系統を形ちつくれり。序文によるに、住信には先に經論の衆文を聚めたる百法要文の著あり、後更に梵、漢、和の往生因緣の事傳を輯めて、以て愚夫愚婦歸信の要を示さんとて此書を著はせるものなり。然れども住信の傳諸書何等の記載なし。跋文によれば、四十八歳にして彌陀本願の教によりしと云ひ、常陸に於て集記すと見えたり。今親鸞の廿四輩の隨一なる性信(文治三、建治元)の常陸の鹿島に生れ、下總報恩寺に住したる事あれば、或は住信は性信の誤傳ならざるかと覺ゆ。殊に親鸞の愚禿の名に對して愚勸と云へるなどもその疑を強からしむ。暫く記して學者の是訂を俟つ。其組織は今昔物語の三國分説の體に同じく、先づ卷一より卷四迄は天竺篇にして、或は釋迦成道の話、竹取物語に酷似した







『遠近』『蝸蚊籠』學文シタリ『蠶』『山伏』『友』(妻に)『鞆居タリ』(丹の)『ナンド』『和尚』『故』『渴』  
併『金丸』『竭焉』『半物』『女子』『義士』『僞語』『日出』等の如し。

又今昔物語集卷十二なる増賀傳に出でし『美豆波左須』の歌を『三輪指』と記し、同卷十四なる『神奈比寺』を『神奈井寺』と記したるなど、既に發音、訓法、假名遣に相違と誤謬と發はれしものいと多し。其文飾上に於ける一種の漢文脈は、吾妻鏡の記體に酷似したり。加之、駢對華麗なる句調と、哀誦詠歎に充ちし筆致とは、寶物集又は平家物語の文章に最も近く、平語、盛衰記の文學が桑門の裡に薰醸せられて、佛教文學より派生し來れる真相を、極めて鮮明に反映したり。中村富平の辨疑書目には、續百因緣集(冊十)の名を擧げられたれば、尙後人の稿を次げるも有りしと見ゆ。

當時東方に日蓮の崛起するありて、特色多き一流の文學を揮ひたりしが、濟門の無住法師一圓は、尾勢の間にありて沙石集(假名交)雜談集(五卷、片假名交)、妻鏡(一卷、平假名交)、聖財集(三)念佛諸經要集(卷)等の著を成しぬ。沙石集は自ら求金集沙採、甌玉拾石瑩の意に因みて名けしと云ひ、其序は漢文的なれども、本文は和文脈を主とせり。事書體にして『是ヲ思フニ』として評語を添へたること、今昔物語集に同じきもあり。辨疑書目には新沙石

無住の沙石集  
と雜談集等

集(一名三國發)の名を傳へたり。雜談集も事書の下に、彙類的に和漢の事例をあげ、前後に批評など加へたる所、一層說教の目的に近ける作なり。妻鏡は、比較的、彼の初期の作にして、初の程は平假名交の長き詩賦的對句脈を以て行りたれども、終りは漢臭なき流暢の文藻を示したり。釋迦如來、聖德太子の傳を初め、因果の理を説きて、後鳥羽院隱岐行幸の事など評したり。『是即ち愚なる心の一筋を先として、玉も藻屑も分つ方を知らず、後人の嘲を顧みず、浮べるに従つて何となき水莖のすさみ、定めなき浮草の言の葉を書集めて甲斐なかるべし。』とはけれども是を身に從へて心有し人、道心者に見すべければ、名を妻鏡と云ふなるべし。』とは著者の述懐を示したる筆致の一例なり。同じ頃小川僧正、承證の三國名匠略傳(平假名交、一三四)は天竺五人、震旦十七人、日本三十六人の傳歴を、年次に依りて叙べしものにして、日本部は傳教、弘法より始め、次に諸藝、醫藥の事など記したり。都率僧都の『鳥の音も死ぬる時には悲しとや』の詠以下數行は片假名交り文なるが、書寫の誤の混じたるものなるべし。又弘安の頃(四〇)には如信の編めりと云ふ歎異鈔親鸞の聖教の義を祖述したり。平假名交り條書にして、中に候體の柔和なる文脈もあれども、大體に於て議論文の新文體を成せるものなり。雜談集の出でしより四年前なる正安三年(六一)には覺如(宗昭)の拾遺古德傳(片假名交、九卷)有

如信の歎異鈔  
覺如の拾遺古  
德傳



法然勅修御傳  
と向阿の三部  
假名鈔

春日權現驗記  
と詞林言葉集  
平家延慶本

師練の元享釋  
書と今昔との  
關係

名なり。黒谷源空上人の繪詞にして、平家時代より鎌倉時代初頭にかけて、その時俗見るが如し。前編にも述べしが如く、遊君の今様、念佛の風など尤も著しく、駢儷的の對句と濃かなる和讚的の諧調とに充ちたり。彼は又親鸞の繪傳をも著はしたり。法然傳にて名高きは徳治の初(一九六)より舜昌の法然上人行狀畫圖出でたり。後伏見上皇の勅旨に出でたれば一に勅修御傳と言ふ。四十八卷にして漢文に和文脈を交へし平假名文なり。此繪卷の類も次々に多く出でぬ。當時鎮西派の向阿(證賢)が綴れる本願鈔(三卷、建武四、一九九七)、父子相迎(二卷、曆應三、二〇〇〇)、西要鈔(二卷、康永二、二〇〇三)は所謂三部假名抄の目ある眞宗の法要にして、兼て一種の流麗なる佛敎文學的作品なり。

延慶(一九七)の交基忠父子の作と云へる春日權現驗記(廿)には、狛行光地獄見物の狀など甚詳かに描かれたり。長隆筆と言へる釋敎歌仙一名詞林言葉集(卷一)は其前に出でたるべし。平語の延慶本も此時に出でたり。元享二年(一九八)は師練が有名なる元享釋書を上りたる年なり。此書は推古朝以來七百年間に涉り、僧家傳記の金聲玉振とも云ふべきものにして、内容上法華驗記、日本往生極樂記等に出でしもの甚多けれども、其組織と筆致とは全く唐宋の高僧傳に擬して、純然たる漢文を以て記したる所、専ら歴史考證を主としたれば第一系に屬

經旨和歌と梅  
松論の序

最須敬重繪詞  
と慕歸繪詞、  
保曆問記

せしむべし。凝然の八宗綱要三國佛法傳通緣起(應長元、一九七)など、同じく、國文學の方面よりは多く注意すべきものを有せず。然れども此書今昔物語集の説話殊に傳記を採れること最も多し。其點に於て集の系統たる第二小系の作品に近し。其記載も集のもの多し一致したれども、時に卷十三、第三十六話の源兼澄を藤原とせしが如き相違も見えたり。秋田の人灑祖寛生の釋書蒙求(三卷、延寶元、二二三三)はこの書を鈔出して蒙求的に對句の取題を工夫したるものなり。又徒然草の筆者吉田兼好(二〇一)に往生傳(卷一)の著ありし事、蓮門類聚經籍録に見えたり。最須敬重繪詞(卷十一)は乗專が文和元年(二〇〇)に往生要集など見て描けるもの、慈俊の記と云へる慕歸繪詞(卷十)も、應安元年(二〇八)存覺の奥書ありて漢文對句的の筆致は、軍記物語の文脈と甚だ相似たり。保元より曆應に至る史實を詳記せる保曆問記(三卷、片假名交)も此頃徒然草と前後して出でたるものにして、其中には平家物語に似たる佛敎的史觀流れたり。次で出でたる叡岳要記(二卷、漢文、二〇二〇頃)は主として叡山の供養の歴史を記したるものにして最近尊氏の名なども見えたり。當時の寺院の供養、音樂、諷誦、講式の様など見るには、甚だ宜しきものなれども、直接文學系統の産物としては値少なし。この頃出でし經旨和歌は文和四年(二一〇)の作にして、一に夢中和歌と名け、南禪寺の永禪の序あり、將軍尊氏、夢窓等の法華



經及び金剛經の意趣を詠ぜしものなり。又史書の梅松論(三卷、片假名交)は、序文の中に、大鏡の脚色を踏襲したること寶物集に似たり。先づ二月廿五日、北野の神宮寺毘沙門堂の參籠に、人々老法師より元弘亂を始めとして建武の爭亂を聞ける趣向なるが、卷末には、夢窓國師の談義を引きて尊氏兄弟を讚め、その天龍寺造營の功德を聖德太子の四十九寺、聖武帝の東大寺建立になぞらへたるなど、足利院近の僧徒の筆巧なるべし。筆致は平淡流暢ながら佛教文學の第三小系の作などに入るべきにや。反之同じ觀應の頃、釋宗久の筆になれる都のつゝなどは前期の海道記等に倣へるものなり。かくて一代の文教は、五山緇徒の手中に委せられたれば、所謂五山文學の名に於て、夥しき詩文學、抄物、禪門法語など、茲にてのみは盛んに出でぬ。

五山文學の詩文、法語、抄物

支陳の三國傳記と其説話

兩朝合一の翌々年、應永の初(二〇、五四)には、沙彌支陳の三國傳記(十三卷、片假名交)成りぬ。著者については、諸書支棟とあれども、何等見る所なし。當時支陳なる僧あれば、恐らくは是れならん。十卷のもあれども、國書解題に素十二卷の物なりしと云へるは眞なるべし。但缺卷は四、五にあらずして卷十一などならん。倭版書籍考(元祿一五)卷四に「三國傳記、十二、應永中、義滿ノ時、沙門支陳、倭字ニテ書ク」(二二、枚)とあり。序文は又大鏡などの工夫に倣ひて天竺、震旦、本朝

の三國圓通士、清水寺に通夜して物語らんと、先づ一番の天竺の話より、始むる趣向なり。乃ち卷一は釋迦如來、八相成道の話なるが、中に和歌を入れ、又狂歌、落首など頻りにあしらへり。菟玖波集出で、より、卅餘年當時如何に狂歌俳歌の趣味の盛なりしかを想はしむ。又文中に和云、梵曰、漢言など、て出典あるを示したるも多し。卷二の信濃國通世者往生事の話は百因緣集の肥前僧妻爲魔事に同じ説話なり。卷三には豫州神母の話、嗔恚の僧大蛇となる男、道成寺の話、大江景宗の話などあり。景宗は堀川院の時の殿上人なるが、女を戀ひ、伯瀬に百日祈り籠りて之を得んとす。女の難題にろ文字を履冠に置きて戀の歌をよみ給へと云ふに、困じつゝ、尙觀音に祈るに、遂に、寛治二年二月廿九日の午時、虹梁より薄様に「轆轤引く誓の絲の兔に角に、蜘蛛手に物を思ふこの頃」と記したるを咄へたる雞落ちたれば、是を女に示したりと云ふ物語なり。女を戀ひて初瀬觀音に祈り、女の難題を佛の助によりて解き、その歌がる音の沓冠歌なりしなど、何となくお伽草紙文學中のものなるやを疑はしむ。男の大蛇となりし筋も近世の一心二河白道の清玄話に脚色せられぬ。卷五唐惠心話は、我惠心僧都話に同じ。或はその傳話の逆流したるにはあらざるか。石山寺の癡女の話は今昔物語に出でたり。試に其中なる「何ニトテサノミ口ナシノ、コハ誰カ科トカコタレテ、心内ニ動テ涙



三國傳記の文學的性質

外ニ顯ハレケレハ、男モハヤ心得テ、人ハ答ヘメ昵言チ、マツマテ我ハ岩躑躅、云ハネバコソアレ惡シサノ、替ル心ハナケレドモ、秋モハテメニ萱サスシテ、カレカレニ社ナリニケレ、』など云へる文飾を見よ。其七五調の聯ねと云ひ、懸詞の用法と云ひ、何ぞ室町時代のお伽草紙、又は江戸時代の淨瑠璃文、馬琴の小説草雙紙等に酷似したるや。假令素朴的なりとは云へ、斯る抒情的行文の間に、叙事を交へ叙景を加へて、道行を叙する趣に至りては、東關紀行、海道記、源平盛衰記、太平記など近世期の紀行文と脈絡相通するものあるを見るべし。加之全文の哀寂なる聲調は、所謂戰記文學の示す所と極めて相近く、又男女二人の相逢ふに至る迄の事情、夫婦となりて福祿の生涯に入る事など、集になき脚色は痛く後世のお伽草紙、或は寧ろ讀本などの世界を想起せしむべし。されば三國傳記の文學は、或は修辭上に於て、或は語彙上に於て、或は説話上に於て、或は小説的構造に於て、實に豊富なる歴史的意義を含めるものにして、其の文學研究者に與ふる趣味は極めて深し。先にも屢、云へるが如く、佛教的系統の文學が、國文學の幾多の系統と相即密邇の關係を有すること、茲に到つて稍明かに讀者の首肯する所ならん。又信州更級郡白介翁の話は、新長谷寺の縁起なると共に、五萬長者の話なるは長者傳説の喜ばれたる當時の文學の面影を示したり。卷六には飛行上人の事、西行法師の人麿に

御伽草紙及び近世文學との接近

逢へる話などあり。人麿に逢ふ話にては、趣味色調著しく謠曲文學の世界に接近したり。播磨路の道行より、人麿の古塚の上に宿りて、亡靈と和歌を詠む條に、『望無窮水接天色看不盡、山映夕陽、谷深シテ樵夫ノ無友モ野幽ニシテ牧童ノ稀笛モ女郎花夕露ニ泣キ鹿鳴草ハ野風ニ吹レタリ……村一ト村ノカケニ尖頭ノ柴ノ戸アリ内ニ白髮タル老翁一人坐シテ夕ノ月ニ嘯ケリ……草ノ蘆草枕苔ノ衣苔筵旅寢ノ殊ニ物哀ニテ心ヲ傷シメケル折柄……山里ハ(の歌の唱和)……朝人ニ問フニ人家ナシ、松原ハ人丸ノ墓所ナリトモ云傳ヘタリトソサレハ彼老人ハ人丸ニテチハシケルニヤ……』などあるは、如何に趣味深き修辭ならずや。或は對聯の句法を以て、或は和歌物語の修辭を應用し、或は頭韻法を用ふるなど、謠曲の詞章に似たること、地藏靈驗記の文より一層甚だし。卷七延昌の物語にては『二トモ足ラマタラチネノ親ノ諫ノ梓弓心強サニ怨メシクテ……我古郷ノ人ノ行末、越ノ白山知ネ共雪ヲ戴ク老カ身モ今迄爰ニ木ノ目坂上ルモ下ルモ還ル山若シヤ我子ニ近江方湖水遙ニ見渡シツ、比叡坂本ニツキニケリ』などありて、太平記東下りの道行文に似て、更に一層後世の淨瑠璃文の聯ねの修辭法に髣髴せり。又山陰中納言、攝津惣持寺建立話にては、長谷寺觀音利生と淨土往生との思想を混和せしめたり。近世期の中葉に當りても、一面地藏信仰は一般に弘布したれども、尙一面には當時の物語文學に見ゆるが如く、觀音信仰



梓弓の歌と太平記

の風、甚盛なりし様を想ふべし。武州入間川洪水譚にては、一條革堂に來りし女、過去帳に  
我名を記るし、帳の裏に、

梓弓ハツルベシトハ思ハネト無人數ニカネテ入カナ

と詠みたりと云へるは、正行が如意輪堂の扉に『返らじと』の歌書きしとの太平記卷廿二の  
傳説に似たるのみならず、其歌の姿も痛く似通へるは怪しき事共なり。三國傳記の成れる  
應永は正平より四十餘年後にして、恰かも太平記の出でし頃に當りたれば、此二歌の間に何  
等かの關係ありと覺し。此梓弓を詠める歌吉野拾遺にも多く見えたるは、元來當時の流行  
句なりしならん。又卷九には比丘、比丘女の童戲は、惠心が地藏法樂のため、比丘、比丘尼等  
云ひて、別ち取りしに因ると説き、二人の念佛者が八幡に甚深の法門を祈る話は、念佛宗義  
の獨り貴むべきを示せる新時代の寓話なり。新宗教勃興につれて宗論の類が盛んに文學に  
入れる様は、平語、謠曲、狂言等に著るしく見ゆる所なれども、之等の説話の上にも亦其性質  
を認むるを得べし。叡山の玉泉坊が鬼に成る話は稍雨月物語青頭巾の趣向に似たり。卷十  
二、小野小町盛衰事に就いては、近江玉造莊の少女なりと云ひ、藝州の僧幸熊丸に逢へる話  
は、かの牛若丸話に近きものなり。又最後に富士山の事を記し、竹取物語に出でし赫屋姫の

百因縁集と三國傳記との文學上の比較

東寺の三寶繪

蓮如の御文章  
寺門傳記、同  
補録等

話を語り、更に三國一の山、大日如來垂迹の地なりなど云へり。こは傳説としては一個の説  
明説話なるが、三國傳來の佛法に結び附け、本地垂迹の所なりとの思想を以て天地交通不思  
議の靈域となせるは、平安時代の初期の竹取物語、富士山記等に淵源したる思想なり。殊に  
近世時代に入りては三國一の名山として佛法的に種々の説話を加ふること行はれたるな  
り。江戸時代に入りても、馬琴の富士淺間三國一夜物語等に此流の俤を止めたり。今三國  
傳記の文學を、前記の百因縁集のそれと較ぶる時は、記は大に文學的にして、集は經文的な  
り。記は漢文を骨子として對句に富める文體なれども、集は智識的、説教的の句法を主とし  
たるなどの相違あり。但し今昔物語集の通俗味に比すれば、記の方向少しく佛學的に傾き  
たるべし。東寺の三寶繪も此頃の筆なりと見ゆ。(觀智院本、三冊は此繪と別なるべし。)  
かくて應永廿一年(七四)に良鎮上人の囑により、寂濟の記せる融通念佛緣起繪詞(卷三)は、永春  
行季、行廣等の筆にして、大原來迎院の密畫に地獄の凄絶なる描寫を收めたり。こは良鎮が  
當時六十餘州、巡歴説教の資に供せしものなりと云ふ。時恰も眞宗の蓮如上人兼壽生れて、  
文明延徳の頃(二二三二)には、片假字交りの平明流暢なる正信偈大意(卷一)御文章(帖五)等の教説  
文學を著はせり。御文章は文明三年彼の五十六歳の時より、明應七年八十四歳に到る廿八



年間の教説を綴れるものにして、文明五年開板したりと云ふは素より其一部に過ぎず。親鸞の浄土類文鈔、日蓮の報恩鈔以來假名を交へし勸化教説の文學は益々近代文章の發達を促したり。寺門傳記(九冊)は又永享の頃(三〇)成りしと見ゆ。寛平より保元に至る園城寺の僧傳なれども、尊氏の事、應永中の事なども見え、又通憲の智證大師和讃を草せし事も見えたり。志晃の寺門記補録(卷廿)にも、成尋入宋の時、智證大師渡宋の歌なる『法の船さして行く身そもろくの神も佛も我をみなへ』を本歌として、

白浪遠分てぞ渡る法の船指しけん人の跡を尋ねて

と詠ひし事、義光を初め源氏の武將が三井の新羅社を尊崇せしこと、觀慶の大神和讃、前記の通憲の智證の和讃、畫讃、又卅三所巡禮の事をのべて日數百五十日を要し、各願主ありとて其名を列記したるなど、佛教に關する幾多の挿話に充ちたり。此種の作には尙文明十五年(四三)に尊通の三井續燈記(卷十)あり。平治より文明に至る間を叙して寺門傳記に繼ぎたるものなれども、文學としては幾何も見べきなし。此前々年には狩野洞雲筆なる日光寂光寺等の釘拔念佛緣起繪卷出で、其後にも類作多し。文正二年(二二)の高野の宥範の供養文は、記法の上より今昔の系を引けるものなり。又永正三年(六一)宣秀寫なる勸修寺緣起は

釘拔念佛緣起  
と宥範の供養  
文

任鑊の地藏菩薩  
靈驗記

新内侍の勸修  
寺緣起と光信  
の同繪卷、八  
幡愚童訓

江戸時代の佛  
教緣起文學

新内侍の著にして平假名交り體なるが中に今昔譚の流傳と思はるゝものあり。翌年光信の同繪卷も現はれぬ。此頃又地藏菩薩靈驗記(卷四)と云へる物あり。高野山寶龜院任鑊の永正九年(七二)に記せしものにして、續群書類從の同本とは稍似たれども別系の作なり。永觀の話、嘉元に失せし忍性の物語など見ゆ。此中卷四のみは良觀に就いて一卷の小説的記事を綴りて文學的なり。一に吾妻鏡と呼べり。卷五と卷六とは之に反して二三十宛の語譚を片假名交り、事書體に記し、文體稍今昔に似たる所あり。懸詞などの修辭法も見えたり。一帯に奥州話多し。前期に出でし實叡の地藏靈驗記に次げるものならん。奥書に享祿五年(九二)快元の記と言へる八幡愚童訓(上)も當時のものなるが、こは三韓征伐、蒙古來等の史譚を顯密神佛一體の見地より甚しく誇張的に小説化して記したり。快元は鶴岡八幡宮の社僧なり。この後江戸時代に入りても了譽の日本往生傳(卷二)、驍驢嘶餘(室町時代)、了智の緇白往生傳(元錄)、高野山往生傳、獨湛の扶桑寄歸往生傳(卷二)、師蠻の本朝高僧傳(七十五卷)、敬雄の天台霞標(二十八卷)を初め、弄幻子の三國因緣佛神感應錄(十五卷)、釋了意の法林樵談(十卷)、泊如の東國高僧傳(四)、光譽の新撰往生傳(八卷)など、近世に到りて益々完備したる傳紀の書出でたれども、文學史上には資料として有用なる外、多くは第一小系以上に實用の記録とな



り畢てたれば、格別の注意を拂ふを要せざるべし。

近世の完成文學に於ける佛敎味  
戰記文學と擬古戀愛物語

茲に翻りて鎌倉時代より室町時代に涉れる完成文學の諸方面を見るに、先づ第三小系なる平家物語源平盛衰記等の戰記文學が、我佛敎的系統の作品として、又佛敎的系統文學と交渉して、如何なる發達を遂げたるかは略、前述したる所によりて明かならんが、更に第四小系の諸作としては、岩清水物語、初瀬物語、幻夢物語以下、多數の擬古戀愛物語も、其因縁、宿命思想を骨子とし、佛寺、佛尊の靈驗を脚色したる點に於て、著るしく佛敎味を發揮したるものなり。語り物にては宴曲の冬、山、心、優曇花、閑居釋敎(宴曲)、熊野參詣、善光寺修行(宴曲)、無常、法華、釋敎、淨土宗(真曲抄)、曹洞宗(拾遺集)など佛敎味多く、幸若の舞の詞に、滿仲、築島などは、或は出家譚を主とし、或は本地譚を主としたるもの少からず。又謠曲文學にては、其趣味の根柢が、佛法の應報、輪廻、化生、來世の思想に因ること最も大なるを以て、殆んど凡べてが、この系統の作物なりと云ふを得れども就中、求塚、滿仲、舍利、羽衣、阿清、善知鳥、碓、女郎花、檜垣、泰山府君、大會、一角仙人、高野物狂、護法、道成寺、誓願寺、大佛供養、飛雲、野守鏡、鶉飼、絃上、雨月、卒塔婆小町、江口、安達原、姨捨、春日龍神、葛城天狗、誓界、源氏供養、上宮太子、歌占、白髭、高雄、徑山寺、舞車、玉取、初瀬六代、身延更級、第六天、當麻、蟻通、愛宕

宴曲と舞の詞と謠曲

空也、九世界、殺生石、西國下、祇王、墨染櫻、乙平、枕慈童、菊慈童、卒塔婆流、北山、弱法師、白路、明靜、攝待、山姥、海士、鞍馬天狗、俊寛等、末百番の伊呂波、餓鬼、華自然居士、江島童子、淨藏貴所、幸崎、墨染櫻、成經、泣鬼、湛海、鬼一、現世檜垣、現世善知鳥、御菩薩、多手利竈馬、西岸居士、朱雀門、業平、六角堂、人穴、孟宗、慈覺大師、佛櫻等、新曲の十四經、木引善光寺、現在道成寺等及寛政七年宗羅の道しるべ、中の三十七曲など悉く佛敎的要素の著しき物なり。

狂言記と御伽草紙等

狂言記にても宗論、佛師、六地藏、笠の下、布施ない、双六僧、枕物狂、福渡、樂阿彌、八尾地藏、鐘の音など見えて、室町時代の民間歌謠集なる閑吟集に於てすら、其の戀愛生活の歌唱と並んで、大いなる佛敎無常の調あるを見出し得べし。更にお伽草紙中にも、木幡狐、佛鬼軍、物臭太郎、梵天國、毘沙門本地、貴船の本地、釋迦の本地、嚴島本地、小町草紙硯破、青葉笛物語、鴉鷺合戦など其例證少からず。此間にありて、住吉慶恩(建長一、九一五頃)に、灌頂卷、小柴垣草紙、地藏尊縁起、當麻曼荼羅縁起、春日鹿曼陀羅の作ありと傳へ、土佐光信(大永五、歿二一八五)に石山縁起、清水寺縁起、十二類卷物、福富草紙、地藏堂草紙等の作ありしと云ふが如く、鎌倉、室町時代春日、土佐、住吉諸家の作品に、往生縁起の佛敎的作品多きは云ふを俟たず。かの天狗草紙は鎌倉中期の作なるべく、五翠殿繪卷は室町初頭のものならんが、古淨瑠璃の五翠殿、

灌頂卷、五翠殿繪卷等の繪卷の影響



近松の本朝五翠殿(元正徳)の粉本なるが如く、又お伽草紙の梵天國とも稍似たり。筋は美容限なきけす女御が、九十九人の后に嫉まれて乾坤城に首斬られんとせしを、念佛の爲に胎中の皇子の出生迄助かりし話にして、全篇印度經典の直譯的なるを免れざりしが、それに伴ひて佛教的説話味は甚濃かなり。

江戸啓蒙時代の  
佛教文學と  
第一、第二小  
系

此の如き佛教系統文學界の情勢を以て、世はいつしか安土桃山時代を経て江戸時代に入りぬれば、所謂啓蒙時代の文學は、其各分派を擧げて佛教文學の色彩最も著しきを見たり。先づ此時代に於ける第一、第二小系の説話、及び往生緣起的の佛教文學には、前に記したる外、勇大の扶桑往生植(元和二卷)、如幻の近世往生傳(卷一)、洞空の女人往生草(卷一)、極樂物語(寛文八)、清原良業の和論語(寛文九)、鈴木正三の念佛双紙、盲安杖、叢軒露宿居士の近代見聞善惡業報因縁集(天明六)、戒殺物語(寛文四)、珂然の扶桑往生全傳(正徳三卷)、了意の勸化三國往生傳(卷六)、敬知の和漢辨會録(享保一)、地獄説(元文二)、専念往生傳(卷六)、玄光の拾遺三寶感應傳(寶四)、水鏡二人比久尼(一休説)、了慧の三國往生傳等を擧ぐ可く次で第三小系に屬する假名草紙には七人比丘尼(二卷、寶)、清水物語(永十五)、爲春のあだ物語(三卷、寛)、大佛物語(永廿一)、嚴島の本地(三卷、明暦二)、恨之介(二卷、明暦二)、地獄太平記(正徳五)、角田川物語(三卷、明暦二)、一本菊(三卷)、鈴木正三の因果物語(三卷、寛文元)

第三小系文學  
としての假名  
草紙

江戸期の繪詞  
文學

第四小系文學  
としての浮世  
草紙、讀本等

同上淨瑠璃文  
學と脚本文學

平安時代の物  
語との影響比  
較

二人比丘尼(二卷、寛文四)、釋迦八相物語(十卷、寛文六)、三人法師(卷一)、飛田琴太の三國一大通本地(天明五)、壁前九年坊の君子威徳富貴(三卷、寛政十)、旅硯富士見西行、應賀の釋迦八相倭文庫(天保十六)などあり。又繪卷にも如慶の聖徳太子傳、光起の天満宮縁起、雪鼎の薬師寺縁起、法然上人傳等多し。其多くは臨摹の作なり。更に第四小系の文學、即ち佛教的要素の各種の文學に浸潤し影響したるものには、社會生活の文學若くは戀愛生活の文學たる浮世草紙あるは無數の讀本の形質上には勿論、草雙紙、滑稽本、人情本、洒落本等に到るまで、或は濃く或は薄く或は深く或は淺く、微妙普通の分布を示したる事言ふを須たず。是等廣大なる小説文學中に、各種の佛教的要素の浸潤したる意義と性質とを述べんは尙他日の機に譲るべし。

江戸時代に於ける國民的文藝の一大分野をなせる淨瑠璃文學及び脚本文學に於ても、説話味に於けるが如く、如上の佛教的要素は或は地獄の形象として、或は諸佛の利生として、或は現末の佛罰として、或は庶民の人生觀として其中に表現せられたる作品甚だ多し。こゝは佛教の文學上の影響が、主として宿命の一點に限られたる平安時代の歌物語文學と、稍其色彩を異にするものなれども、一般に佛教的なる形式、信仰の當時の文學上の色調の一部分を構成したりし事は何人も否む能はざるべし。そは當時に於ける我國民生活の全般が神佛



混淆の形式の下に、少からず佛教的要素を以て彩られたる事實より見るも容易に諒解せらる、所ならん。淨瑠璃中延寶の土佐節、角太夫節、加賀節等に見ゆる、天親菩薩、傳教大師記天王寺彼岸中日、四十八願記、女人往生記、大佛供養、淨藏貴所八坂塔、融通大念佛、法隆寺善光寺等の諸開帳物、佛舍利、粟島御縁起、祕密護摩、誓願寺、女人即身成佛記、念佛往生記、五百羅漢、三世二河白道、聖德太子傳記、祇園精舍、五大力菩薩、清水寺利生物語、中將姫曼陀羅三十三間堂棟由來、日蓮上人御難記、阿彌陀坊、源恕上人記、釋迦如來誕生會、多田院開帳等、又近松巢林子の達磨の本地、釋迦如來放生會、當麻中將姫、傾城二河白道、聖德太子繪傳記、大原問答青葉笛、善光寺御堂供養、百合若大臣野守鏡、蟬丸、傾城高原蛙合戰、用明天皇職人鑑、賀古教信七墓廻、又世話物にても、曾根崎心中、心中萬年草、お夏清十郎五十年忌歌念佛、傾城反魂香、双生隈田川、冥土の飛脚、天の網島、宵庚中、女殺油地獄、博多小女郎浪枕の長者經などを初めとし、文耕堂の將門冠合戰、信州姥捨山、大佛殿萬代礎、海音の殺生石、三井寺開帳、傾城無間鐘、奥州枕物語、小野小町都年玉、出雲等の合作せし菅原傳授手習鑑、小野道風青柳硯、並木宗輔の道成寺現在蛇鱗、苺萱桑門筑紫鞆、本朝檀特山、日蓮記兒硯、攝攝國長柄人柱、近松半二の奥州安達原、常陸帶夜啼石、小夜中山鐘由來、山城國畜生塚、役行者大峰

櫻、福内鬼外の靈驗宮戸川、神靈矢口渡など、及び松貫四等の吉野靜人目千本、馬琴の化競丑満鏡など寶曆より化政の後半期に入りて殆んど枚舉に遑無かるべし。是等の淨瑠璃は、多くは其名目上より見るも、一見佛教的要素の影響に成れるを得べきが、素より其程度は單に名目的なるのみにはあらず。否、縦令是等の諸作中の戲曲的又は文學的動機の、他の人生生活の意味、心理に因るものなりとするも、假りに其作中より全然其等の佛教的要素を脱除せしめば、必ずや文學上に於て少くとも一半の骨子と背景と情味との消失するを覺ゆる程、時代的に廣汎なる影響を有したるなり。其趣は歌舞伎芝居の脚本に於ても同様ならん。奈河清助の傾城筑紫鞆、奈河龜助の競伊勢物語、鶴屋南北の墨田川花作所染、四天王産湯玉川、櫻田治助の御攝勸進帳及び壺坂靈驗記、苺萱道心筑紫鞆、小野道風青柳硯、重扇助等の國訛嫩笈摺、花雷歌清水などを始め、淨瑠璃より轉化したるもの、及び其後の新作にても多數の曲目を占めたるべし。前例に依りて江戸時代の諸作を其影響の性質に因りて分類すれば、(一)直接影響關係あるもの、例、今昔庚申譚、因果物語、聖德太子繪傳記等、(二)第一小系程度のもの、例、緇白往生傳、天台霞標等、(三)第二小系程度のもの、例、極樂物語、三國往生傳等、(四)第三小系程度のもの、例、大佛物語、七人比丘尼等、(五)第四小系程度のもの、例、今昔二枚繪



近世期下降系  
統の文學と累  
積的、融和的、  
普遍的影響

國生生活の表  
現としての佛  
教文學の量的  
質的形的關係

作品の特殊的  
因縁關係と普  
適的一般任務

草紙、菅原傳授手習鑑等、(六)繪卷のもの例、聖德太子傳、藥師寺緣起等の六系に分たるべし。要するに今昔物語集の下降系統としての佛教系文學は、近世期の國民生活が、益々宗教的に傾きて深刻なる信仰界の運動を經過したると、文學が益々國民的の發達を遂げて多岐に趣き、且、最近に至りて新たに優勢なる生活描寫の二系の文學を派生したるとに因りて、所謂教義傳紀を主としたる第一小系に於ても、佛教的説話を中心としたる第二小系に於ても、更に完成文學中に佛教を加味したる第三小系に於ても、將た又當時の最も優勢なる國文學の系統中に、佛教要素の薰染したる第四小系に於ても、孰れも累積的、相關的、融和的の發達を遂ぐるを見たりき。故に其影響は又普遍的なりき。實に是等の佛教文學、若くは佛教要素が、各時代の文學上に出現したる量的、質的及び形的關係は、緊密、微妙に夫々の時代に於ける我等が祖先の生活、其物を、さながらに指示したるかの觀あるは、何人にとりても最も深き興味を喚起する點ならん。是に因りて、所謂佛教文學の系統が、我文學史上、甚だ重大なる位置を占むるを認むる事を得べく又今昔物語集の如き、文學上の大作品の現出も之を特殊の側に於て觀すれば常にそれ自身に於て絶大なる因縁關係を有すると共に、之を歴史的なる普通の法則に於て觀する時には、かの悠久なる人文發達の大波動中の一機體として極め

文學と國民生  
活の濾過池

今昔物語集の  
二主要素

集の全文學史  
的位置、系譜、  
影響と系統批  
評の任務

て普通自然の任務を有するに過ぎざるを見るべし。

されば今昔物語集に表現せられたる説話、佛教の二大要素は、其後世に及ぼしたる影響に於て、彼の如き廣汎旺盛なる勢力を發揮したりしかども、翻つて之を古今を一貫して欲する國民生活の大潮流中より通觀すれば、その要素の存在が單に時代の文化の濾過池たるに過ぎざるを識るなり。

#### 第四節 國文學中佛教文學の一系を論ず

前章に於ては上代より江戸時代に至る我文學に四流の大系統あることを叙べ、續いて本章の前節迄に於て、今昔物語集の主なる要素は、前記の四者中、説話、佛教の二系統に屬するものなることを説き、且その系統の一貫したる發達を、集以前と集以後とに別ちて記述したり。是即ち今昔物語集が我が全文學史上に占むべき位置と系譜と其影響とを説明したるものにして、初めに所謂一個の作品に對する系統批評 Die genealogische Kritik の任務は既に終結したるものなるべし。

然るに本節にて更に一種の佛教文學に就いて論ぜんとするは、所謂佛教文學中に極め

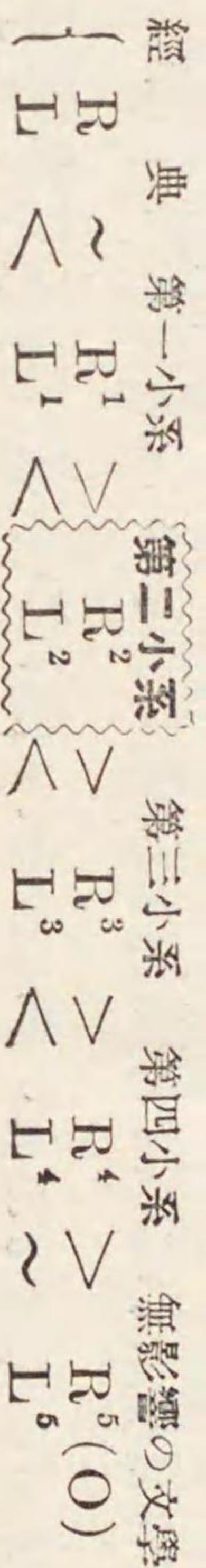


重要なる佛教文學中の一系

て重要なる一系の佛教文學ありて、それは從來國文學の佛教的性質を攻究する場合にても、多くは閑却せられたるものあればなり。然らば所謂重要なる佛教文學の一系とは如何なるものなりや。

抑も佛教文學系統の中に四流の小系を認むるを便とすべき事は前章に於ても既に幾度か述べたる所なり。此彙類は單に、現下の理論上の考察の便宜にのみ依れるものにあらずして、本章の第二節及び第三節の第二項等にて試みし記載中の無数の佛教系統文學を通覽するも、自ら歸納的に到達し得べき所のものならん。今是に就いて少しく論證せん、前述の記載に於ても、特に其の點に意を用ひて説明したりしが如く、所謂佛教文學系統の諸作品は教義、宗門の書なる純粹の經典より、佛教系統以外の國文學に到る遞次的經過中の産物にして、其宗教的性質と、文學的性質とを含有する程度に於て、所謂四系の佛教的國文學の成立を見たるなり。試に前者即ち宗教的性質をR、後者即ち文學的性質をLにて表はす時は、各小系の遞次的關係は次の如くなるべし。

佛教的國文學の遞次的關係表



從來研究の通弊

國文學の研究と第二小系文學の重要

第二小系文學の性質

右の中、從來佛教文學の攻究を試みし者の間に於ても、佛教家は主として經典に就きて其文學趣味を宣揚するの義に解するを常として、稀に第一小系の文學を談する事ありしのみ。國文家は之に反して、僅かに第三小系の文學に注目し、稀に第一小系の文學を語るも、其論する所、未だ國文學の全質と多く相關するに到らざる憾あるを常としたりき。是れ他なし、其の系統と影響との觀察に周匝を缺きしが爲に、佛教と云ふが如き精神的要素の文學に於ける發現を考察するに當つて常に大なる間隙を有したればなり。少くとも從來國文學の方面よりしたる研究と經典の方面よりしたる觀察とが、二者相助の聯絡を缺きたるは、職として之が中間項たる第二小系文學の閑却せられたるに由るものとすべし。今や本節に於て佛教文學系統中最も重要なる一系と云へるは、實に這第二小系佛教文學を意味せしに外ならざりき。第二小系の佛教文學系統の如何なるものなりやは、前記の表中にも明かなるが如く、之を教義宗門の書たる第一小系の作品に比すれば、其佛教的要素は、稍稀薄なるか、若くは直接の説教を目的とせざるものなり。然れどもそを一層文學的に又美的に表現せられたる第三小系の文學に比すれば、猶常に著しく宗教的傾向を帶ぶるものなり。又文學上の美的性質に到りては、第三小系の文學たる平家物語等に比して、稍簡粗蕪雜の傾きあるを免れ



ざれども、之を第一小系の諸作に比すれば、亦較、進歩したる脚色上の工夫を有し、少くとも其述作の動機に於て、若子の文學的性質を含めるものなり。(浄土眞宗教典志等に此種ものを純宗門書中に記さざるは、其文學的著述なるが如し。)

故に其文學としての全體の色調たるや、或は往、生、譚、或は縁、起、譚、或は傳、記、譚、或は一般に佛尊佛法の靈驗、譚などを内容として、歸信が人生生活に於て最も調和的、美的なる安住を得る所以なるを溫和に又通俗的に勸説し、因果宿世の人生觀を以て人事と運命とを觀ぜんとする創作的態度を以て一貫したるものたり。此類の文學作品の形式は、多くは片假名交りの和漢混淆文にして、一方に於て又著しく漢文學の影響を含める文體なり。第一小系中にありて、尤も第二小系に近き表白、願文、諷誦、講式の文學と、第三小系中なる和讃の類とが、第二小系の文學に對して常に密接なる關係を有するは、既に述べるたるが如し。今試みに我文學史上にかくの如き佛教文學系統を設定せんが爲めに、奈良時代より江戸時代の初頭に至る間に、先に第二節及び前項中に記載したる、佛教的著作の發展的、群より、上述の形質を有する主要なるものに就いて序列すれば、即ち左の如き傳流の一道派々として時代の文學と交渉したるを見るならん。

第二小系の佛教文學作品表

奈良時代 (1454)	觀音緣起
……平	日本國現報善惡靈異記
安	日本靈感錄
時	三寶繪詞
代 (1845)	日本往生極樂記
……鎌倉時代	往生要集
……	安養集
……	續本朝往生傳
……	後拾遺往生傳
……	扶桑往生傳
……	今昔物語集
……	本朝新修往生傳
……	實物集
……	發心集
……	後世物語
……	地藏靈驗記
……	私聚百因緣集
……	雜談集、沙石集
……	拾遺古德傳
……	三國傳記
……	地藏菩薩靈驗記
……	極樂物語
……	勤化三國往生傳
……	三國往生傳

平安、鎌倉、室町三時代と第二小系文學

第二小系佛教文學の二重の意義

乃ち第二小系文學の歴史的發達は、主として平安、鎌倉、室町の三時代に於てせり。此時期に於て這種の文學は佛教の文學化する轉機となりて益、發達し、佛教要素は是等の文學を通して他の廣大なる一般文學上の作品中に瀰漫したるなり。但し佛教要素の第三、第四小系文學中に浸潤するは、必ずしも常に第二小系の文學を通ずるものとは斷言し難し。所謂經典の弘布、流通より直接に來るものもあれども、佛教的信仰が文學的の趣味に染潤せられて、特殊の佛教文學的形式を組織的に得來るには、常に第二小系文學の醸育を被らざるを得ざりしなり。此點に於て第二小系文學の出現は、各時代に於ける一般的宗教心のバロメー



ターにして、兼て又佛教文學の傾向を豫知すべきパロメーターたりしものなり。佛教的思想、情味、聲調及び種々の技巧、形式は、先づ一度び茲に鑄出せられて、あらゆる國文學の上に流布し行けば、そこに更に次の時代の第三小系文學乃至第四小系文學を成し、斯くして又此期に生れたる第二小系文學は新たなる佛教味を文學上に傳播する事に努めたるなり。第二小系文學と、第三乃至等四小系文學とが、個々相關聯して因となり、果となり、絶えず一脈の佛教的要素を發揮したる様は、譬へば因陀羅の珠の光の千萬無量數相反射し相映輝して止まざるも、之を大觀すれば恒に瑩然たる一個靈妙の大光明體たるが如き觀あるべし。光明體の色調を異にするは即ち佛教の時代的相違を示す所以なり。是れ佛法の教は古くして千古に變らねども、時代と人との變遷を免れざれば、同じく第二小系の佛教文學と云ふも、漸次に其面目と趣味とを異にする事、猶恰も春風駘蕩一千年夫の古柳を吹いて歇まざるに、年々の縁絮は其色新たなるが如きものあるなり。

是を要するに佛教系統の文學中にて第二小系文學を認めつゝ、それを特別なる注意の下に究むるの要あるは、單り此小系に屬する國文學の發達を知り得る點に於てのみならず、實に佛教要素が第三、第四小系文學等の國文學上の廣大なる部面に活躍して影響を及ぼすに至れ

因陀羅の比  
喩と時代的相  
違

結語と研究の  
希望

る經過と性質とを明かならしむるに當つても、先づ以つて缺くべからざる研究の部面なりと謂はざるべからず。

各系統の一層精密なる限定、經典に出でたる佛教要素が第一小系より第四小系に涉りて分布、發達したる程度、關係、及び第二小系文學が國文學上に於ける佛教的影響の轉轍器として有する諸關係の細査等に到りては更に別に稿を更めて述ぶる機あるべし。



## 今昔物語集の新研究終

### 補説

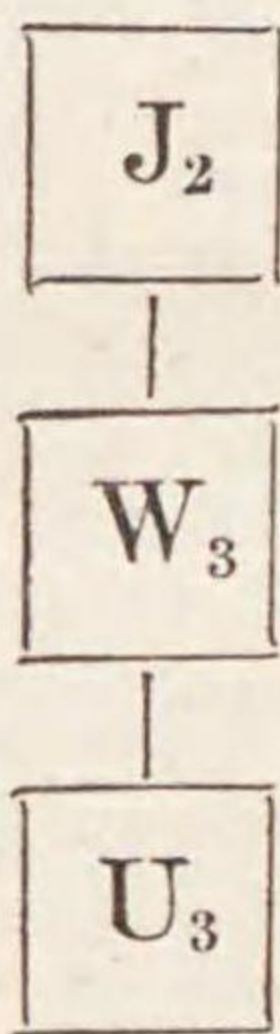
○五頁 印象批評と創作との問題に關してバック氏 G. Buck の『文學の社會的批評』に言ふ所參考に資す可し。氏は文學批評を科學的印象的社會的等の八種に分類したるが其中先づブルンチエールの如く批評を以て判斷なりとし善き判斷に依りて作品の位置プレジングを定め依つて以て系列中の文學進化を見んとする者に對して印象批評は主として作品の效果の點換言すれば其個人的感動の大小に依りて作品を知らんとする者なりとせり。然るに社會的批評は如上の狹批評に對してより廣き、より大なる、より深き批評の見地に立つ者にして單に個體的ならず作者讀者共同的の生命感利益感の見地に於てす。文學の社會的勢力は作品の創作せられし時に現はれず、實際社會に行はるゝ際に發現するなり。従つて生活の爲の文藝觀が正當なりと説けり。又スピンガル氏 Spingar の創造批評と言ふはアールド氏の詩は生命の批評なりと言へる思想の一轉したるものにして、批評を活動的に認めたる説なり。是等は孰れも近時の批評主義が判斷より生命力へ、個體的より社會的へ、靜的より動的へ傾けるを證するものにして、テーン、アンカン、モートルトン諸氏の社會的ミリュエと言ひ動的批評と云



二  
以比較文學史と言へる主張と同一體系の所説なり。文學の社會的勢力と云ふは國文學に於ける影響の問題と相關す。此點より見れば文學史上に後世影響の顯著なりし今昔や源氏を初め伊勢古今平語謠曲等は即ち又一時代の傑作たりしものなり。

二

○卅八頁 W、今昔物語集 二十九冊(前田家尊經閣藏大寫本)を入れる。片假名書下文にて拙字なり。卷二以下題目有り、數手の書寫なるが如く赤字は空きとす。末尾は卷卅一にて京都時代初期の筆寫なり。従つて四十七頁傳本表には



の如く大學田中本の次に入る。是にて目撃本數廿三本なり。

三

○六十六頁 江戸時代に今昔の名の行はれし作の項に元祿十四年都の錦の著なる御前御伽婢子に『今は昔の物語』と書名にて記せしを加ふ可し。西鶴の好色三代男にも此類の用法見ゆ。其他尙多きも此期のは大抵『今は昔』と呼びし例のみ。

四

○百九頁 玉花集に就いて無名草紙に建久七年きよくわす撰べりとあり。即ち玉花集の事なり。當時

宇治拾遺と宇治大納言と共に傳はれるなり。

五

○三百卅七頁 第卅五話伊勢物語との關係中淺間山の項を省けるは勢語の原本の問題を考ふる上にも參考に資す可き記事なり。

六

○三百五拾四頁 三寶繪詞の地方的説話分布表左の如し。  
大和十三、山城四、攝津四、越前二、紀伊一、河内一、和泉一、近江一、播磨一、駿河一、豊前一、肥前一、伊豆一、伊賀一、美作一、肥後一、筑紫一、陸奥一、○唐二、百濟一、高麗一、新羅一、天竺二、隋一、日本國二。國數十七國中西日本廿三話東日本十四話にて幾内の語三十九所に出づ。但し説話の樹枝狀分布圖は大和を中心とし攝津山城に至り越前に連るを見る。

七

○三百七十頁 卷十第卅二の巧盜譚は我舞の詞入鹿に入れり。

八

○三百七十一頁 同卷第卅四行者譚は本朝部の染殿后話と同型なり。



○三百七十六頁 第三道成寺譚の發達は、大日本法華驗記(長久二)—今昔話—道成寺緣起(後小松)—謠曲(道成寺觀)—道成寺繪卷(永)—安珍清姬道成寺和讃—紀伊國名所圖會の如きものにして此中(一)今昔以前の平安朝傳説は法華經功德譚と寫經功德譚とより成り(二)鎌倉以後なる謠曲其他の傳説にては戀愛蛇形等の一般傳説と成れり。宗教的傳説より社會的傳説に近けるなり。其起原は頗る古きが如く奈良時代の傳説としては日本靈異記に見ゆるものに中卷第卅八聖武朝の僧大蛇と成る話あり。同第卅二女人の鬼に噉はるゝ話あり。又下卷第二牟婁郡の永興熊野修行の話、同第十牟婁郡沙彌の話、同第卅二日高郡紀直吉足沙彌寺坊に隠して罪を得しが錢火に焼けざる話等あり。是等の話性を混和せば優に道成寺譚を形成するを得るなり。寺院僧侶の説教譚にして戀愛譚に和歌物語の形式の全く入らざるは此傳説の平安時代の作出にあらざるを知る可し。但し此傳説は京都時代以後江戸時代にも益々盛んに行はれたり。

○三百七十八頁 猿神傳説は京都時代の藤袋草紙に見ゆ。是にては近江の翁東國の武士の話にて清水寺の靈驗譚を加味したり。

○三百七十九頁 卷廿卷卅一の讚岐萬能池の龍と天狗の話は集の後なる秋夜長物語に入り又十訓秒卷七に後冷泉帝の時の天狗話に見えたり。

○三百九十二頁 卷三第十一話釋種龍王話は浦島式話譚にして法華經及び史記始皇傳に類話有り。我國にても古く古事記に見え集の後にては寶物集や菟萱話に關係有り。卷四第十二國王太子話は慈恩傳卷五に類似の記事有り。卷五第六五百卵生の話は曾我物語に入れり。卷九第十三龜放生話は蒙求孔愉放龜の話及び日本靈異記に類話有り。卷十第八吳根孝話同第卅五話は雄略記の記事に類す。又三百九十五頁百合若大臣の下、卷十二第十四紀伊國人漂海話を入れるべし。卷十二第卅三増賀話は建久中の多武峯略記にも見ゆ。卷十四第四十三尊勝陀羅尼話は大鏡師輔話に見ゆ。卷十五第廿二雲林院話は源平盛衰記卷十五相形の事に見ゆ。卷十六第十五龍宮譚は古事記豊玉姬話と同形式なり。同卷の第三話清水觀音譚は卷十七第九話と話性全く同じ。一は觀音一は地藏の利生譚なる相違有るのみ。卷十九第二定基話は集以前の小説朝倉物語、三河に咲ける等に入りて脚色せられたり。卷十九第廿一、二話の佛物罪にて蛇に化す話は靈異記中卷卅八話錢蛇と化する話同卅二話酒を借り償はざる



罪にて牛と成る話及び三寶繪序に蛇に化す話等古くより行はれたり。卷卅第四十一高市中納言の傳は持統紀に出づ。卷卅三第卅三宗平鰐話は古今著聞集に入れり。同卷第卅四光遠妹話は古く靈異記に類話既に出でたり。卷廿五第七保昌話は江談抄續古事談に入れり。卷廿六第一但馬鷲話は早く古事記應神記に其原形を認むべし。卷廿七第十二安義橋鬼話第廿二鬼母話は太平記劔卷に入れり。卷廿七第四冷泉院小人怪話は支那の述異記の洪武未央宮の條に小人怪翁の話有り。卷廿八第卅九信濃守寸白話は越中舊事記の子撫川の傳説に道成寺譚の變形話中に生れし子の融け去る類話有り。卷卅第七話は狭衣物語と脚色稍似たり。卷卅一第十五北山の狗話は唐物語に入れり。

十三

○四百九十八頁 卷卅一第二十四話に祇園の叡山興福等との未寺關係、良源の傳話等は史話として頗る注意す可きものならん。

十四

○五百十一頁 頼時の渡れる胡國を粟田氏説(古語集)に混同江即ち黒龍江地方なりとす。又參考に資す可し。

十五

○五百六十八頁(三百八十  
五百參照) 信濃の胡桃につき古今物名に兵衛、あぢきなしなけきなつめ、そうきことにあひくるみをばすてぬものから。又延喜式信濃正税、梨子三荷大棗一荷姫胡桃子一荷等有り。今も山野に多く生ず。

十六

○六百十三頁 愚管鈔の次『時代と著者の出身とは叶へり』は『時代は適へるも内徴上には慈鎮の作にあらず。其評も見えたり』と訂正す。

十七

○六百十六頁 太平記の文中頃成るは嘉慶頃、大塔物語の應永七年成るは文正元年に改む。

十八

○六百廿一頁 江戸前期の説話文學中都の錦の御前御伽婢子(元祿十  
四年)有り。今は昔の物語の名見ゆ。

十九

○六百廿三頁 字治拾遺系物語中、正木千幹は文化十一年笠志船物語の跋筆者なり。次頁山東京傳の前に、兆風子の玉すだれ(六卷寶  
永元)鷲水のち伽百物語(六卷寶  
永三)錦文流の本朝諸士百家記(十卷寶  
永五)を入る。

二十







新井白石	六二二	安息團	四〇六
在	五二四	然	四一八
預法師	五〇六	坂	三四〇
あだ物語	六〇六	房	六三七
葦刈話	三四一、三八七	足	六二二
	五〇六	笠	五四四、五六五
奥州後三年記	四八八	通話	三九三
奥州合戦繪	三九八、四八八	鶉鷺合戦	三九六、三九九
海部峯	四三八		
海人刈藻	一一二、三二六	イ(キ)	
安齋叢書	三九	インタープレーション派	一九
安齋抄	六〇九	イソツブ	一五八、一七六
安養集	八八、九〇、一〇六〇九、六六		六一九
安養尼	九〇、四三二	印象批評	四
	四九三	優雅趣味	二〇〇、二〇一
安養橋の鬼	二二〇、三八四		二〇五
安達原	三九五	遊仙窟	六二九
安達原鬼婆話	三八三	伊豫部馬養	六〇〇
安積山物語	三八七	伊佐平新發意	五〇二
安積沼	五三四、五六七	伊勢物語	三六、七〇、一〇一、一一五
石清水	二〇〇、四五四		〇一、一一五
石清水不斷念佛縁起	四一六、六〇五	鏡	六四、三三五
石清水祠官系圖	一〇四		三四二
石童丸話	三八五、三九七	今	六六
石山寺	四二五、四四九	因果物語	一二四、一八三
	六五一	因果報	四五七、五五七
石山縁起	六五九	因果物	六六〇、六六三
石川雅望	六二二、六二四	因陀羅網	四〇二
	六二五	因陀羅網	六七〇
岩屋草紙	三二九、六一八	因陀羅網	六七〇
岩打つ波	三八一	因陀羅網	六七〇
院政時代	六二、六三、五七六、六三二	因陀羅網	六七〇
	七六、六三二	因陀羅網	六七〇
	四八七、五四一	因陀羅網	六七〇
院源	四九九	因陀羅網	六七〇
市女笠	五四五、五六四	因陀羅網	六七〇
今は昔物語	六二六、六二六	因陀羅網	六七〇
今は昔物語	二〇五、五一九	因陀羅網	六七〇
様	五九三、六三〇	因陀羅網	六七〇
		因陀羅網	六七〇

石清水	二〇〇、四五四	今	六六
石清水不斷念佛縁起	四一六、六〇五	因果物語	一二四、一八三
石清水祠官系圖	一〇四	因果報	四五七、五五七
石童丸話	三八五、三九七	因果物	六六〇、六六三
石山寺	四二五、四四九	因陀羅網	四〇二
	六五一	因陀羅網	六七〇
石山縁起	六五九	因陀羅網	六七〇
石川雅望	六二二、六二四	因陀羅網	六七〇
	六二五	因陀羅網	六七〇
岩屋草紙	三二九、六一八	因陀羅網	六七〇
岩打つ波	三八一	因陀羅網	六七〇
院政時代	六二、六三、五七六、六三二	因陀羅網	六七〇
	七六、六三二	因陀羅網	六七〇
	四八七、五四一	因陀羅網	六七〇
院源	四九九	因陀羅網	六七〇
市女笠	五四五、五六四	因陀羅網	六七〇
今は昔物語	六二六、六二六	因陀羅網	六七〇
今は昔物語	二〇五、五一九	因陀羅網	六七〇
様	五九三、六三〇	因陀羅網	六七〇
		因陀羅網	六七〇



ウ

ウバニシヤツド	二二八	宴の松原	五九七、六六一
グインデルバント	二四	轉寝物語	三二九
右記	二二六、二三〇	産土神	四七六
右近馬場	四三八、五三三	運命小説	五二四
右近少將	三一七、三二七	と月	三六九
生土	五二〇、五一七	雨月物語	三九五
浮世物語	二六八、四七六	宇治拾遺煎茶友	六二四、六二八
浮世草紙	六二〇、六二七	宇治拾遺物語考	五一、七四
歌物語	六六一	宇治拾遺物語繪卷	七九、三九九
	一〇三、一一五	宇治物語	八〇、八一
	一七五、一七七	宇治の川波	一一二
	二〇一、二四七	宇治殿	一一四、五三二
	二六〇、二八二	宇治十帖	五四九
	二九七、三一八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	三三一、三三七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	三五五、三八六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	四八七、五三六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	五八九、五九六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲林院	二〇一、四二五	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲	四五五、四八九	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲	五〇八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浄	三〇五	宇治拾遺物語	二八八、二九八
工(五)		宇治拾遺物語	二八八、二九八
A	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
N	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
X	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
江戸時代(徳川)	一五、三六、六〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	九七、二六二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
打臥御子	四八三	宇治拾遺物語	二八八、二九八
牛若丸話	六五四	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田氏説	六三三	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田秋成	二三五、三二〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田秋成	六二二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	九七、二六二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	三三〇、三四一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	三六五、三八〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	四六二、五一一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	五八九、六一一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
采女話	三八七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
氏寺	五四六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
魚住津	五七〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
恨之介	六六〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
孟蘭盆會	四五六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三六四、三七二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三七六、三七七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三九七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島子傳	六〇〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	六四、六五、七八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	一二五、二〇〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	三三八、三九四	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	四八七、六〇二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	五〇七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
閣魔王(廳)	一九四、二一八	宇治拾遺物語	二八八、二九八

ウバニシヤツド	二二八	宴の松原	五九七、六六一
グインデルバント	二四	轉寝物語	三二九
右記	二二六、二三〇	産土神	四七六
右近馬場	四三八、五三三	運命小説	五二四
右近少將	三一七、三二七	と月	三六九
生土	五二〇、五一七	雨月物語	三九五
浮世物語	二六八、四七六	宇治拾遺煎茶友	六二四、六二八
浮世草紙	六二〇、六二七	宇治拾遺物語考	五一、七四
歌物語	六六一	宇治拾遺物語繪卷	七九、三九九
	一〇三、一一五	宇治物語	八〇、八一
	一七五、一七七	宇治の川波	一一二
	二〇一、二四七	宇治殿	一一四、五三二
	二六〇、二八二	宇治十帖	五四九
	二九七、三一八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	三三一、三三七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	三五五、三八六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	四八七、五三六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
	五八九、五九六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲林院	二〇一、四二五	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲	四五五、四八九	宇治拾遺物語	二八八、二九八
雲	五〇八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浄	三〇五	宇治拾遺物語	二八八、二九八
工(五)		宇治拾遺物語	二八八、二九八
A	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
N	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
X	六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
江戸時代(徳川)	一五、三六、六〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	九七、二六二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
打臥御子	四八三	宇治拾遺物語	二八八、二九八
牛若丸話	六五四	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田氏説	六三三	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田秋成	二三五、三二〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
上田秋成	六二二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	九七、二六二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	三三〇、三四一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	三六五、三八〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	四六二、五一一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
空穂物語	五八九、六一一	宇治拾遺物語	二八八、二九八
采女話	三八七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
氏寺	五四六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
魚住津	五七〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
恨之介	六六〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
孟蘭盆會	四五六	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三六四、三七二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三七六、三七七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島話	三九七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
浦島子傳	六〇〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	六四、六五、七八	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	一二五、二〇〇	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	三三八、三九四	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	四八七、六〇二	宇治拾遺物語	二八八、二九八
榮華物語	五〇七	宇治拾遺物語	二八八、二九八
閣魔王(廳)	一九四、二一八	宇治拾遺物語	二八八、二九八



圓融院	五〇八、六〇五	延喜期	六一、二〇〇	岡本保孝(况齋)	一三四、二七七
圓推的時代關係	三四六	延曆寺	四九八	岡本寺	五三〇
圓周的樹枝狀分布	三五三	役優婆塞(小角)	四一七、四二二	正親大夫	五三八
圓月	二三〇		四八四	尾崎雅嘉	三九、七二
圓珍	出智證	影響の性質	六六六、六七一		一五八
圓仁	出慈覺	英雄說話	三九〇	温古堂本	三七、四二
繪馬	四八二	焉馬	六二五	押小路家本	三七、三八、四一
繪物語	一七六、二六〇	餌取	五六七	大鐘傳說	三七七
	二九七、三二二	餌袋	五六八	大鏡	六四、六五、九五
	五三六、六六四				一一六、一二五
繪圖傳說	四五〇、五一五	オ(ヲ)			一二八、一二九
緣起傳記物語	四八六、六〇三	應賀	六六一		一七五、二〇〇
	一二五、二〇〇	應報譚	一六二、一七五		二四五、三三五
	三三八、三九四	御伽物語	三五八		四〇七、四五五
	四八七	御伽草紙	二三五、三〇三		四八七、四九一
淮南子	六九、一三七		三六六、三九七		四九七、五〇一
	六二〇		六一八、六五一		五〇二、六〇二
延源	五一四	大齋院	六五九		三〇二、五一六
延昌	四二〇、六五二	御伽婢子	二三五、六一九		五一九
延好	四九七	御齊會圖	五三二	大神和讚	六五六
延年	五一六、五一九	御曹子島渡	三九七	大神高市鷹	五〇〇

大江山	二二〇、四三八	嗚呼繪	二七〇、五一五	孝養譚	一六五、一七三
	五七二	姨捨山	二五四、三四一		二一四
大濱法師	六三九	姨捨傳説	三八八、六六	康成	四九七
大塔語	六一六		一七七、三八八	康平	一一四
大原峯	四二三	陰陽道	三八九	康和	六一、二三
大原集	六三五		四八〇、四八二	校訂學	四二
大宮	二五五	陰陽雜記	五〇三	校定	一六
大年神	三七七		四八三		三〇、三六
大垣羅城	五六四、五六五	カ			三七、四六
大原談義	六三七	力		巧盜譚	三七〇
大山神社	四七七	カンタベリテールス	一八二、二三五	高師本	三七、四二
小山田與清本(高田)	三九、五六、六九	音	六六二	高等批評	一九
	一五六、二七六	海賊話	一七七、五〇二	高山	四二五、四二八
	三四八		五七二		四七七
小野宮(寶資)	五〇七	海道記	三九四、六三八	高野春秋	三三九
落窪物語	二九〇、三三〇	江談抄	六五三	高野	六三三
	三八二、五三〇		六一〇七	高降魔	一七〇
	五八九		一五三、三三八	覺	六三〇
興世王	二四五		三四四、三九八	覺猷(鳥羽僧正)	八六、一〇六
折焚柴の記	六二二		六一二	如	五二五、六〇五
鬼殿	五〇六、五〇八	江都著聞集	六二八		六四七







紀傳學生	二二七、五〇三	京極殿	三〇七	近世的文化萌芽時代	三八六、五二七
舊譯	一九〇、一九二	吉備真備	五〇三	近世奇跡考	六一
舊本今昔物語訓	二七六	吉備真備繪卷	三九八、六一四	近代見聞善惡因緣集	六二八
弓鳥化身譚	一七七、三八五	久離勘當	一七四、四五〇	禽獸	二六〇、三三一
求心的地方關係	五八	任	七〇、三三六	脚本文學	一六〇、一六八
巨巖說話	三七二	忠	三三五	脚本文學	一七二、一七八
巨木說話	出大木傳説	氏	二二七、五〇三	脚本文學	一九三、六六一
巨人傳	三八六	廉	三一六、五四一	脚本文學	六六三
偽本	三五	行	五〇一、五七〇	鬼神新論	四四〇
擬古文學	三九八、六五八	瀧	四二五	葉集	六四、三四〇
貴族文化中心時代	六一、五四二	寺	四四九、四一四	山	一九一、四二三
貴族文學	四一五、五二七	水物	六六〇	金平淨瑠璃	四二五
恐怖時代	五二九	清	四九四、五六四	金餅說話	六二二
祇園精舍	四九八、四九九	水	六五九	經文批評	三七八
祇園	二一一、四二八	寺	六二二	經文學の形式	一九〇
祇陀林寺	四九二	碩	六二二	經文學の形式	一一一、一三三
疑然	五〇九	言	六二二	經文學の形式	一七二、一七四
京都傳	六四九	起	六二二	經文學の形式	一三五、三二一
京都童部	六二四、六二八	近世的變化	二六一、二七九	經文學の形式	六〇
京都時代	二七〇、五三五	ク	三三〇、三六〇	經文學の形式	一三五
經旨和歌	六四九	花月草紙	一五八、六二七	經文學の形式	一三五
木村正辭	三二〇、四四五	菅家萬葉	一七	經文學の形式	一三五
玉花集	一三四	公	一七	經文學の形式	一三五
玉葉集	一〇九	快	六五、一九九	經文學の形式	一三五
玉葉	九七	皇	二〇三、二四四	經文學の形式	一三五
玉葉集	三三三、三三七	皇	一七	經文學の形式	一三五
行基	一四九、三三三	皇室歷代記	二二七	經文學の形式	一三五
行圓	三七七、四一五	譚	五一〇	經文學の形式	一三五
行慶	四一八、四二八	愚	一七六、二一四	經文學の形式	一三五
行老	四九七、六〇七	管抄	三六九	經文學の形式	一三五
棄國	五〇七	愚	二六二	經文學の形式	一三五
鏡花	六〇九	愚痴拾遺物語	九二	經文學の形式	一三五
鏡花	一三六、三八九	愚昧發心集	六六、七八	經文學の形式	一三五
基督教	三七〇	具	二四一	經文學の形式	一三五
基督教	三七〇	具體的觀念	五八八、五九五	經文學の形式	一三五
狂歌今昔物語	六二四、六二六	具體的觀念	一八七	經文學の形式	一三五
狂言	六二八	具體的情意	二一、二四	經文學の形式	一三五
狂言	三六〇、五二一	元與寺	七	經文學の形式	一三五
狂言	六一九、六五九	院	三〇三、三三六	經文學の形式	一三五
狂言集	六三五	院	五二四	經文學の形式	一三五











古今拾遺著聞集……………	六六二	小	院……………	四五二	滑	稽	味……………	三一三、三二一
古 事 談……………	七六、一〇五	講 式 文 學……………	二八六、六三〇	穀 斷 上 人……………	三二一、四二三	御 文 章……………	五九二、六五五	
古 事 記……………	二四二、二七五	後 鳥 羽 天 皇……………	一〇九	弘 仁 貞 觀 期……………	六一、二〇〇	勢……………	五〇四	
	三〇〇、三〇一	後 拾 遺 集……………	六四、一一五	琴……………	六一	太……………	六一	
	三二〇、三三〇		一三八、三三二	維……………	三三七、三三九	衡……………	五六一	
	三七九、四二七		三四二	維……………	三四二	茂……………	三八〇、三八四	
	五九七、五九九	後 拾 遺 往 生 傳……………	一一七、六〇九	維……………	六六九	叙……………	五〇四、五四四	
古 典 期……………	二〇五		六六九	諸……………	八七	道……………	四七八、四九六	
古 典 的 壞 類……………	二〇五、二六一	後 冷 泉 天 皇……………	五一〇	諸……………	五〇〇	任……………	五〇四	
古 淨 瑠 璃……………	三七九、六二二	後 一 條 天 皇……………	六三一	伊……………	三〇三、五六三	通……………	六一二	
	六五九	後 堀 河 天 皇……………	一一一、六一三	伊……………	一七六、三七〇	巧 盜 說……………	一七六、三七〇	
誤 膠 率……………	三一、三七	後 三 年 記……………	二七五	言 繼 鄉 記……………	六一八	言 靈 思 想……………	三六七	
小 柴 垣 草 紙……………	六五九	後 三 年 繪 詞……………	三三九、三四一	語 尾 雙 記 體……………	二七五、六〇二	語 學 的 單 位……………	二四八	
小 屋 寺……………	四三六	後 撰 和 歌 集……………	六三七、六六九	護……………	五四、一六六	法……………	一九〇、四八四	
小 世 繼 物 語……………	四一、七三、一	後 世 物 語……………	六二六、六六三	荅 の 衣……………	六一八			
	一一	小 松 寺……………	四五九					
小 町 傳 説……………	三六七、六〇〇	護 命……………	六〇四					
興 福 寺……………	出山階寺	興 福 寺……………	一六五					
虛 空 神 靈 驗 譚……………	一六五	洪 水 說 話……………	三〇六、三七二					
	三〇六、三七二		三八三、三九〇					
今昔物語抄録(類字)……………	三九、一五六		三四八、四八一					
今昔物語問答……………	三九	今昔物語繪卷……………	六八、七八、三					
	三九		九八、六一六					
今昔物語繪詞……………	七九、三九八	今昔八丈揃……………	六二四					
	六二四		六二四					
今昔猿人真似……………	六二四	今昔との物語……………	六二二					
	六二二	今昔虛實錄……………	六二四					
今昔寫實袋……………	六二四	今昔狂歌叢話……………	六二四					
	六二四	今昔緣起の白綾……………	六二四					
今昔曾我の面顏……………	六二四	今昔九重櫻……………	六二五					
	六二五	今昔出世扇……………	六二五					
	六二五							
今昔物語集の新研究索引								



地列	五五七	家	三三九	三十三所巡禮	六五六
在唐送集錄	四一八、四四一	基	一一七、二八九	三修禪師	四六二、五一四
散珠的修辭	二九三		三二二、三九六	三要素	五二八
散文	一、五九一		三九八、四八三	三寶住持集	六〇四
侍	五三一	定	五〇六	三寶繪詞	六五、一三五
濟信	二四七	文	一八五、三二〇		一四四、二七四
佐藤氏說	四七、五一、七		三四一、五一一		二八六、三三二
	一、一一一、一	定	五三三		三七五、三九九
	二九、一五二	文	出平中		四二九、四九一
	二六七	任	五四四		五九三、六〇五
西院河原地藏和讃	四五一、六〇七	盛	一八九、四九六		六六九
西宮記	六〇二	道	五〇四、五一一	三寶繪卷	三九九、六五五
西鶴	一八三、二三七	道	五一、五四七	三寶感應要略	一三五、一八三
西行	三一六、六二二	神	三七、四三	三論宗	四一六
	一一一、六一二	山王船謠	四八三	三教指歸	二二六、五九二
	六二二		六〇八		六〇四
西域記	一三四、一四二	山王一實神道	四七六、五八九	三千大世界	二五〇
	一九〇、二四八	三部經繪	六〇九、六三〇	三代實錄	二七五、四四五
	三七三、三九三	三部假名鈔	五九一、六四	三外往生傳	六三七、六六〇
	四〇六	三部的方法	二〇、二〇〇		六六三、六六九
定房	三六七	三韓佛教	四一〇、四九一		

三國往生傳	六六〇	最須敬重繪詞	六四九	詩學	七
三國傳記	三九二、三九三	澄	出傳教	詩歌故事譚	三三二
	三九四、四〇	作者部類	一〇九	志賀寺	三六六、四二八
	四四五、五〇〇	實方	三三七		四九三
	六五〇、六五二	實資	五〇七	志晃	六五六
	六五五、六六九	罪惡	四六九	信貴山緣起繪卷	一〇五、三七四
三國名匠略傳	六四六	神	四八一	田施	三九八
三帖和讃	六四二	沙汰	五一〇	信	四二四、六三五
三十二相	三五九、四一一	算	四八四	信	二六九
	六〇六	嗟	四一七	朱雀	三二五
三記的方法	二〇	催馬	五三二	十禪師	四八四
三條院	五〇八	坂迎	五一〇	十訓抄	一一一、二〇九
猿丸	二六九	シ			六一五
猿神	三七八	ジャックと豆蔓話	三六七、三七五	十二部經	四〇〇
猿著聞樂	二七〇	ジャチャータカ	一五七、一六〇	色葉字類抄	二七六
賽論	六二四		一七一、三五九	色葉和歌集	一〇四、一〇九
桑門集	五三八		三六七、三六九		一一一、三七六
左傳	六三五				六〇二
左記	一九〇	シエルマン	五	詞林采葉抄	三九四
最勝會	六一四	シユツペ	一四	詞林言葉集	六四八
	四九二	詩歌	一	詞花集	六四、一一五











所司	四九八、五一二	視破物語	三九九、六一六	靜的	一一
しみのすか物語	六二五	駿臺雜話	六二二	性格描寫	二九一、二九八
緇白往生傳	六五七、六六三	水界説話	三六六、三八三	世尊寺	四二五、五〇六
茂經	三一六	水銀商	四九六、五六四	世界文學派	五一四
ス		末葉露	三二六	世界文學派	一一、二〇、五
スペンサー	一〇、二六、五	末百番	六五九	世界的擴布	三六二、三六七
崇神紀	三八七	綱通	六三〇	通	一一三、五三一
隨筆文學	五八三	尙秋	六三八	尙	六三八
宿世	一八三	諏訪社	四八一	世俗字類抄	二七六
佐國	八八、六〇九	角田川物語	六六〇	世話	六六二
菅原傳授手習鑑	六六三	純友	五一四	世話	三五五
鈴鹿山	四三八、五〇八	住吉明神	四七七	世話物語	三二三、三二六
鈴木本	五七二	住吉物語	三八二、五一五	世話物語	三五五、六二三
六	三八、四四、五	尙古趣味	五八九、六〇一	尙古趣味	六六、一七三
視破の話	三三四、三八六	セム思想	三七〇	小説的戀愛譚	一九七、一九八
視破草紙	三九六、三九八	センツベリ	一一、二〇四	小説的戀愛譚	二〇四
三三一		セイニヨウボ	三三	小説的構造	一五六、一六九
晴明	四八四	五八九、五九五		小説的構造	二三四、三二七
清少納言	二〇七	五九七、五九八		泉橋寺	四二八
清和帝	五〇七	六一一、六一四		成形傳説	三九八
清玄話	六五一	六二七		全文學史	六六五
清助	六六三	六二七		焦點的印象	一一
扇助	六六三	二〇八		消息	二三五
關寺	三九四、四二五	三六九、三八三		戰記	一九〇、二四七
關山	四八七、五二九	三八五		文	六四一、六五二
雪山	五四八、五七二	五八〇		聖書	六五八
醒睡	六六一	五一七、六〇五		善導	三六九、四〇五
醒睡團笑	五三二	六〇七		善光寺	四一八、五一七
説話の分布	一五五	四六六、四九四		善光寺	三九六、四〇九
説話物語	三三八、三五〇	二六二		無畏	四一〇
説話文學	五七一	六二〇		善財(經)	四〇九、四九一
二四七、三〇九		三一六		善財(經)	三九五
二六〇、五九五		四一六、六三三		善財(經)	三八九、六四四
一二一、一八三		六三七、六四五		漸層	三二七
二四七、三〇九		一九七、五一九		宣命書	二七五、五八九
三六一、三四五		一三三、一七五		命書	六〇八
三六七、四〇〇		一六〇、一七〇		撰集抄	一〇四、三九六
五七三、五八一					















天然說話	三九〇	寺島宗意	三九	動	八、一〇、二二
天竺往生驗記	一三六、六四	寺島良安	六二八	士佐	三
天竺佛法譚	一四〇、一五九	貞女物語	三八七	士佐	五、一四
	一七一、二四〇	哲學的批評	二〇七	士佐	一七七、三三八
	二六一、二六四	遞次的關係(表)	五九二、六六六	僧	一七七、三三八
	三五八、四〇一	亭子	四九七	俗	五八九
	四〇五、四一二	田樂	五八	的	五六二
	四一三	轉法輪譚	一五九、一七〇	藤氏列傳譚	一〇〇、一二八
天滿宮緣起	六六一	轉法輪	二一〇、三五八	昭	一六六、一七五
天魔破句	二九五	傳	四一七、四二一	的	六、三五五
天神	二七〇	傳教將來目錄	四四八	朋	二六二
天曆	二〇〇	傳說	三五四、三六五	義	二七四、三八八
天慶	四二一	傳說的移轉	一四六	雲	六五八
天台	一九五、二一三	傳法會	四五五	賢	八三
天台霞標	四一五、四一七	傳寫	三三、五六	平	四八四
天台大師和讃	六五七、六六三	傳寫の傳寫	三一、三六	貞	七五、一〇九
天智天皇	六〇七	傳記的書籍解題法	八	賴	三九二、六一二
天地開闢譚	三九一			東齋隨筆	一〇五、六一七
天德内裡歌合	五三二			東大寺	三七二、四二七

東密	四九三、六〇三	知	三一	内閣文庫本	三八、四三
鳥部	四一八	朝	五七三	内部批評	一一、三九二
鳥邊	四五四	朝	三四七	内部徵證	七四、七八
鳥羽	二九一、五〇一	朝	六三八		一一六
鳥羽天	一六	刀	五〇八	内容の記號的區分	一一九
鳥羽僧	一六	兜	四四五、四六八	内在的批評	一四、二〇七
鳥羽繪	出覺猷	利	四〇二、四一〇	長屋王	二八二、五〇〇
時	五一一	利	四四五、四六八	長澤柿園(伴雄)	三七、四二
	三九六、五〇一	貪着物語	六二六	長宿直	五〇七
	五六一	戸隱鬼女話	三八四	夏目氏	三〇一
時朝	三九六	特定文學史	一一二、二〇	夏目氏	三〇一
時親	四八四	特定文學史	一一二、二〇	南海流浪記	六三八
時行	三三三	特殊	五二二、五二五	南葵文庫本	三七、四二
利延	五〇八	津	五七七、六六四	南都六宗	二二二、四一五
利仁	三〇七、四九三	寺	四二五		四一七
	五〇五、五四三	豐國法師	四九一	難題說話	三六六、三六九
	五六八	德道	四九八、六〇三	那天宮	一四九
友	一三八、二五三	燈臺鬼話	三九八	鳴門中將物語	六一七
取替へば	一一二、三二六	射	五七〇	業	三二七、五〇七
獨	六五七			成	六一五
獨	三三九、一八〇			中原	二二七



仲 光……………三九五  
鷹……………一三八、三三八  
三九八、五〇三  
六〇〇

奈良 坂……………四三八、五七二  
奈良 時代……………二一五、二三一  
三四七、四一七  
四三五、四五四  
四六八、四八一  
五二〇、六〇〇  
六〇三、六〇四  
六六九

奈與竹物語……………六六七  
日本靈異記攷證……………一四八、四九一  
日本靈異記說話分布表及び圖……………三  
五四  
日本往生傳……………六五七  
日本靈感錄……………一三七、六〇四  
六六九

二 日本三寶感通集……………六三一  
日本書紀……………一三八、二四二  
二七五、四五八  
五九一、五九九  
六四四  
日本極樂往生記……………六〇五、六〇八  
六六九

日本靈異記……………四八、一三四  
一四四、一四五  
一七四、二〇九  
日本佛敎……………二二二、二二六  
四四二、四四七  
日本的漢文……………二四三

西 市 藏……………五一〇  
能書事蹟……………五七六  
繪……………三九九  
惟 信……………三九九、六一五  
實……………一八五、二〇二  
規……………三四〇、三四二

人情小説……………三二八、五六六  
六六一  
塗 又 籠……………五二一、五六三  
陳……………二二二、三一七  
後は昔物語……………六二五、六二八  
宣 長 說……………二〇一、四二三  
野々口隆正……………二七五  
祝 鏡……………六三七、六四四  
詞……………四八一、五八九

入唐求法書目錄……………四四一  
入唐新求聖敎目錄……………四一八  
丹塗 矢 話……………三八六、三八七  
丹生 明 神……………四四七、四七八  
尼 乾 子……………四〇三  
尼 蓮 禪 河……………四〇三  
如意 珠……………三七六、四八四  
如意 輪 觀 音……………四四八  
如 傀 子……………六一六  
如 法 寺……………一八九  
如 法 經……………四四四  
如 信……………六四七  
如 幻……………六六〇  
如 慶……………三九九、六二一  
六六一

西 宮……………五〇五  
能……………三〇八、三三九  
三四〇、四二九  
跋 提 長 者……………三六七

今昔物語集の新研究索引







藤栗毛	三二七、六二五	人麿勘文	三二二	屏風歌	三三六
飛彈匠	一九七、五二一	人柱傳	三七七、三七八	貧女の一燈話	六四四
飛彈匠物語	五〇二、五二〇	人沼傳	三八三		
飛鉢説話	六二二	買	五四〇、五七二		
	三六九、三七四	雅	一九七、五三二		
百物	四二二	繼	五六一		
百萬遍	六二一	有	三七二		
百鬼夜行	四八四	嗣	四八四、五〇三		
	三三三、四四七	高	四九七、五一五		
	四五八、五三一	業	六〇五		
	六二一	成	六〇一		
百鍊鈔	八八	常陸風土記	三八八、五九九		
平假名物語	一三〇、二四七	彦火々出見尊物語	六一八		
	二六〇、二六一	日吉神社	四七七		
	二八七、二九二	琵琶湖	五七一		
	三〇七、三二二	毘盧舍那佛(大日如來)	四四五		
	五二二、五五六	毘沙門天	一六五、一七四		
	五八一、六〇一		四〇九、四一一		
平田篤胤	四四〇、四六一	毘沙門本地	三六六		
平田氏説	三八〇	辟支佛	三五九		
人麿	三三九、六五二	悲田院	五六七		
文學批評	二	文の形相	二八二		
文學觀	六七、一八〇	文耕堂	六六二		
文學論	二九九	文挾	五六三		
	一、二二、九	文學音樂時代	二四五、二四七		
文學進化論	二七	文學學	五七六		
文學科學	一一	文學上の傳説	二七三		
文學的素材	三二三、三二七	福富草紙	三九三		
文學的歸納法	四、一一	福内鬼外	六五九		
文學的性質	六六六、六六七	服藥仙	六六二		
文學研究的範圍	一七	不老不死	四二三		
文學の分折法	一七	不破拾遺	三六九、三七四		
文學通史	一六	不斷念佛	六二三		
文學史方法論	一六	分折的綜合法	五〇九		
文學史の定義	九	性	一三		
文學實意論	八	分	二〇七		
文學時	一八〇	賢	三八〇		
文學實意論	一八〇	講	三九〇		
文獻傳承	三五五、三九〇	普	一三、二〇、五		
	四八九	遍	二三		
文獻學的	一六	復	二三七		
文化史的方法	一五、六一	復	五七八		
	一五、六一	復	二〇五		
		現	二〇五		

文學批評	二	文の形相	二八二	復	文	三〇、四九
文學觀	六七、一八〇	文耕堂	六六二	藤岡氏説	一八、三九	
文學論	二九九	文挾	五六三		五二、一一二	
	一、二二、九	文學音樂時代	二四五、二四七		一一四	
文學進化論	二七	文學學	五七六	藤井貞幹	三九	
文學科學	一一	文學上の傳説	二七三	藤原行定	三九	
文學的素材	三二三、三二七	福富草紙	三九三	親王	五〇〇	
文學的歸納法	四、一一	福内鬼外	六五九	山	五〇八、五六八	
文學的性質	六六六、六六七	服藥仙	六六二	山	六〇八	
文學研究的範圍	一七	不老不死	四二三	富士	三九五、四二二	
文學の分折法	一七	不破拾遺	三六九、三七四	山	四七八、六一六	
文學通史	一六	不斷念佛	六二三	富士人穴草紙	三九七、六一八	
文學史方法論	一六	分折的綜合法	五〇九	扶桑寄歸往生傳	六五七	
文學史の定義	九	性	一三	扶桑略記	一一七、一四四	
文學實意論	八	分	二〇七		二七五、三三六	
文學時	一八〇	賢	三八〇	扶桑往生傳	三九九、六〇七	
文學實意論	一八〇	講	三九〇	伏屋物語	六六〇、六六九	
文獻傳承	三五五、三九〇	普	一三、二〇、五	伏木曾我	三二九、六一八	
	四八九	遍	二三	伏木曾我	六四一	
文獻學的	一六	復	二三七	伏木曾我	六四一	
文化史的方法	一五、六一	復	五七八	伏木曾我	六四一	
	一五、六一	復	二〇五	伏木曾我	六四一	
		現	二〇五	伏木曾我	六四一	
		現	二〇五	伏木曾我	六四一	







本地垂彦説……………	四三二、四四六	枕草紙……………	三〇、六二、七〇、一一二、二〇七、三二三
本院侍従……………	一八五、五三三	將門……………	六〇一、六〇九
翻譯案……………	一四五、四一三	將門誅害日記……………	四九六、五五七
翻譯名義集……………	二七四、四〇八	正木千幹……………	四八八
梵(天)……………	四〇二	枚舉歸納的……………	六二三
梵天……………	六六〇	舞の本(詞)……………	三〇三、三九五
慕歸繪詞……………	六四九	繼子譚……………	四二八、六一八
マハバラタ……………	三六九	萬葉五卷鈔……………	六五八
マツカロク……………	一五五、三六七	萬葉集……………	一六七、二一八
埋金説話……………	三六七	松本氏説……………	三七〇、三八一
政所屋……………	二六七	松平樂翁……………	三八二、三九七
		真福田丸……………	二四三、二六五
		末田……………	二七八、三二九
		雅通……………	三三四、三四二
		雅明……………	三七三、三七七
		匡衡……………	三八七、三八九
		匡房……………	四二二、四九五
			五六六、五七一
			五八九、六〇〇

萬葉古集……………	三四二	三つ物……………	五一八
萬能池……………	三七九	三輪式神婚説話……………	三八七、三九一
摩耶夫人……………	一九〇、四〇五	三輪義方本……………	三九
摩騰……………	四〇八	三井續燈記……………	六五六
摩訶止觀……………	四四四	三井寺……………	二七四、四七八
曼陀羅……………	四〇四、四〇九	三井集……………	六三九
	四一〇、四一八	三河に咲ける……………	六三四
	四四四、六〇三	三上氏説……………	三二六
	六五九	道しるべ……………	二六四
		道行……………	六五九
		道文……………	六五二、六五三
		道真……………	出管公
		道長……………	九一、一二七
ミリユ一説……………	九	民族心理學……………	三三七、四二〇
眉間玉話……………	三六八	民間信仰……………	四五五、五二二
壬生寺……………	四五二	民間信仰……………	五二〇、五三二
身代説話……………	三七七、三八六	民間傳說……………	一三二、四六一
未知自變數……………	二六	民間傳説……………	四四二、四五三
岑雄……………	三三五	杖……………	四八〇、六〇四
御杖……………	三三三	信……………	一三八、二七四
三守……………	五〇〇	親……………	三一、三七九
三船……………	六〇三	練……………	三八七、三九二
			三九七、六〇四



民間語原説	一九九	室鳩巢	三六六、三八二
通光	六一四	巢	六二二
通憲	六〇九、六五六	奥	二五八、二六四
峯入	四二二、四七八	三五二	
水鏡二人比丘尼	六六〇	陸奥話記	四七七、四八八
都のつと	六五〇	友	六三一
雅び	二〇一	任	五〇四
密教	四一八、四四六	岡	五二一
彌勒	五二〇	用	一八三
ム		部	八四、二一九
無限財寶譚	三六八、三七五	野	二五八、三〇六
無限地獄	二五〇、二六三	窓	六五〇
無名抄	三四二、三九二	冥途記	六〇四
無名草紙	三九四、六一一	妙樂寺	五二二
無住	三八一	妙見講	四八四
無空	六四六	乳母紙	五三〇
迎講	六〇八	乳草紙	六一七
室町時代	四六六	盟約説話	三六六
	六五、一七四	モ	
	二二九、三三〇	チ	
		ダ	三七三、三六六
師	三七三、三七五	胤	六六、二九〇
師	三七九	憲	三一五、六〇五
元良親	一、一九	永	四八四
元	一三七、一四二	頼	二二二
基	六一二	養老	六三三
基	六〇二	國	三六九、三九三
基	三五、三七	蓮	一八九、二二二
基	三一六、五一〇	寺	一五〇、四二四
基	六	薬師寺縁記	四三六、四七六
基	三六九、四〇四	薬師如來	四三六、四七六
基	四〇七、四四五	薬師講式	四八八、四九二
基	四五五	薬師講式	五一六
尤の草紙	四四五	薬師講式	六〇四
守橋傳	〇三、二〇五	楊貴妃	二一九
守	二六四、四二三	山上憶良	五五八
守	五四四、二二七	山陰中納言話	三七六、三八二
桃太郎	五四四、二二七	山越彌陀	五〇二、六五三
物の哀れ	二〇一	山科集	五一四
物の怪	二〇一	山	六三五
物の怪	四八三	伏	四二二、六四二
桃太郎	三六九		
ヤ			
陽成院	五〇二、五〇八		
夜光の玉	一八七、一九四		
八雲御抄	三九三		
	七四、七八八		
	二九六、一一一		

蒙求和歌	六〇二	保胤	六六、二九〇
蒙求	一三七、一四二	憲	三一五、六〇五
目撃	三五、三七	永	四八四
目	三一六、五一〇	頼	二二二
目	六	養老	六三三
以言	六	國	三六九、三九三
文珠	三六九、四〇四	蓮	一八九、二二二
文	四〇七、四四五	寺	一五〇、四二四
文	四五五	薬師寺縁記	四三六、四七六
文	〇三、二〇五	薬師如來	四三六、四七六
文	二六四、四二三	薬師講式	四八八、四九二
文	五四四、二二七	薬師講式	五一六
文章	二二七	楊貴妃	六〇四
文章	一五四、六三〇	山上憶良	二一九
文章	二七八、五七〇	山陰中納言話	三七六、三八二
師	六三一	山越彌陀	五〇二、六五三
師	二九一	山科集	五一四
師		山	六三五
師		伏	四二二、六四二











正 誤 表

(頁、行)

(正)

(誤)

六、〇 佳	住
二〇、三 勢力不滅の法則	勢力に不滅の法則より
三〇、三 直す	直十
三六、三 の異	異の
三六、四 卷廿	卷廿二
三六、六 卷廿三	卷廿二
三六、一 本朝	本期
三七、一三 云へるは	云へるは
三七、一 大納言	大納言
三八、二 宇治	隆治
三八、七 納言物	納物
三八、二 廿四五	三十
三八、九 誰不悦	誰不悦
一〇六、三 鳥羽	鳥羽
一一八、一三 國土的分量關係	分量的關係
一一九、一 其名目	此名目
一二三、〇 説話學的	説話學的
一二三、五 決して	決して
一二四、六 考ふるにも	考ふるものにも

(頁、行)

(正)

(誤)

一三七、四 規範として	規範して
一四九、二 卷十三等	卷十三話等
一四九、四 普通	普通
一四九、四 通ゼ	適ゼ
一五〇、二 作文の	作文の
一五五、三 類聚法	類聚注
一七三、三 紹介し、	紹介し。
一七五、六 卷廿二	廿二
一七五、三 冒險譚	昌險譚
一八〇、二 事實	實事
一八三、一 前二者	前者
一八七、八 たるを	たるこ
一九一、二 經文	其經文
一九三、六 有ラメト	有ラメト
一九三、四 實生活	實世話
一九三、七 ものこ	ものこ
一九七、一 興	興
二〇二、八 由るなるべし	由るべし
二〇四、三 見たり	見ざり

(頁、行)

(正)

(誤)

二〇五、四 つゝも	つゝ
二〇五、七 除きては	除きて
二〇五、三 ロマンチズム	ロマンチズム
二二一、二 大逆	大道
二二七、二 報恩	報思
二二八、一〇 思ヒタラシメテ	思ヒタラシテ
二三三、二 讀者	不明の文字
二二七、七 古の	右の
二三〇、三 古今の	今の
二三〇、四 玄慧	玄慧
二三六、九 盡スヘクモ	盡スクモ
二四四、六 あらずして、	あらず。
二四六、二 男ノ下に鬢の一字を脱す	鬢シ
二五二、七 報レ	報シ
二五四、四 意なり。	なり意)
二五五、〇 無カラマシ	無カラマシ
二五五、九 慍立つ	慍立つ
二五七、一 きだく	まだく
二五七、一四 襟	襟



二五、二 その首  
 二六、三 擲メ  
 二五、五 マシカク  
 二六、三 徒  
 二六、三 延年ス  
 二六、三 旂 第四  
 二六、三 山峽  
 二六、四 中の下に比を脱す  
 二六、五 時期  
 二六、五 雨夜の  
 二六、六 第十の下小の字を削る  
 二六、六 普通の  
 二六、七 生の下を生を削る  
 二六、八 二話、  
 二七、一 第の下七を脱す  
 二七、二 鳥地  
 二七、三 世の下にの字を脱す  
 二七、四 すれば、その太  
 二七、五 部分に  
 二七、六 至るものなり。  
 二七、七 平地  
 二七、八 親リ  
 二七、九 親チ

二七、八 (卷二)を七行愛の下に入る  
 二七、八 (卷廿七)の細註内、前に、丹鶴本  
 謀メあり。田中本に謀トシテモ  
 あり。の一句脱す  
 二七、一〇 世音寺  
 二七、一〇 語法  
 二八、二 叫ヒシ  
 二八、一 マシカハ  
 二九、八 修辭法  
 二九、九 トロメキテソ  
 二九、九 恨  
 二九、七 有リ  
 三〇、五 笠ヲモ  
 三〇、五 垂テ  
 三〇、九 枯ハ  
 三〇、九 枯ハ  
 三〇、二 (下關)  
 三〇、二 夏ハ  
 三〇、二 過キシヤ  
 三〇、二 過ラント  
 三〇、九 昔  
 三〇、九 月藏  
 三〇、三 裕衣  
 三〇、一〇 寫實味

三四、一 國民性  
 三五、五 活寫  
 三六、四 斷  
 三六、七 目代  
 三七、二 禁ぜざらしめ  
 三九、一〇 普通人  
 三九、三 肉感的  
 三〇、七 許リ  
 三三、三 佳什  
 三六、九 六年  
 三九、二 甚  
 三五、二 時人に  
 三三、六 出で、  
 三〇、五 イフ山  
 三三、七 集説話  
 三五、五 たる者最  
 三五、九 坊間  
 三五、一 話譚  
 三五、一 連來る  
 三七、四 腰曲リ  
 三七、七 後  
 三七、三 巨木説話

我國國民性  
 活寫  
 斷  
 見代  
 禁ぜしめ  
 普通人  
 肉感的  
 許の  
 佳計  
 六年  
 其  
 時人々  
 出で、  
 フイ山  
 集説話  
 たる最  
 訪問  
 説譚  
 速來る  
 曲り腰  
 彼  
 巨木説話

三三、一四 胎  
 三四、八 ものなり。  
 三四、九 話譚をも含みて、  
 三五、四 たれども  
 三五、三 第一話……二十  
 三五、二 道成  
 三九、四 十一第  
 三九、四 萬龍池  
 三九、二 地  
 三六、一 したり。  
 三六、七 にも  
 三九、二 醋  
 三九、一 謂  
 三九、五 畫  
 三九、四 貝  
 四三、三 垣一吏、  
 四四、二 の上に涉れる  
 四四、四 話譚  
 四五、上欄 地方的  
 四五、上欄 用の上引字を脱す  
 四三、一 地

四二、六 同寺  
 四四、九 者佛ノ料チ  
 四七、一 令  
 四五、三 期  
 四五、五 作に  
 四六、三 紀  
 四七、六 如し。  
 四九、五 依  
 四九、九 寺ノ  
 四七、一〇 たるを  
 四六、二 成メ  
 四九、七 橋  
 四九、一〇 下ニ  
 四九、三 兵ノ郎  
 五〇、四 四十六  
 五〇、三 はれて  
 五〇、三 女を  
 五〇、二 女  
 五〇、二 第三  
 五〇、二 興……院  
 五二、二 巻

四二、九 阿彌陀  
 四五、二 する下る字を脱す  
 四九、七 筆  
 五三、一 一言  
 五三、二 題目社會學的の下土俗學的を脱す  
 五三、上欄 貴  
 五三、三 來るに(第三)  
 五三、三 至りて(云々)  
 五三、九 イミ  
 五三、八 陸奥……浮世  
 五三、七 制度  
 五三、七 拙  
 五三、七 行方  
 五三、上欄 新興  
 五三、三 中門  
 五三、三 茵  
 五七、二 起  
 五九、二 に鈴  
 五九、五 千  
 六〇、七 の範を  
 六〇、二 台記  
 六〇、一 接に

阿陀  
 筆  
 言  
 貴  
 來(第三)に  
 至(云々)りて、  
 イシ  
 奥陸……浮世  
 制度  
 編  
 行衛  
 新  
 中門  
 茵、十四行据  
 記、(以下皆縁  
 起)訂す  
 鈴に  
 千  
 のを  
 臺記  
 接を



六三、一四 話譚 和譚  
 六五、八三 作と 作と  
 六八、二〇 隅 隅  
 六三、五ものにし ものに  
 六七、四 Iriha Iriha  
 六八、三 する ある  
 六九、一〇 統に 統  
 七〇、九 二百十九首の下神歌の二をよす  
 七〇、八 交り  
 六一、一〇 隅  
 六一、一〇 雪  
 六七、一 緑 雷  
 索引一、六 フランス  
 索引一、五 讚  
 索引二、一 國  
 索引三、二 擦  
 索引九、五 城  
 索引〇、三 奇跡  
 索引〇、六 獸譚  
 索引三、〇 驗譚  
 索引四、二 騷  
 索引九、六 三記的方法の一行削除す

索引二〇、一〇 土  
 索引二、六 續古今集 古今集  
 索引三、二 鹿 木  
 索引四、五 破草紙 草紙  
 索引三、四 説話 説話  
 索引三、二 長秋 長神  
 索引三、三 長恨 長秋  
 索引三、六 翻 讚  
 索引三、二 繪 僧  
 索引三、三 土 士  
 索引三、二 浦 津  
 索引三、七 僧正 正  
 索引三、六 虛 文  
 索引三、一 舊 賢  
 索引三、八 表 表  
 索引三、八 由 樂  
 索引三、八 申

今昔物語集の新研究



大正十二年三月七日 刷  
 大正十二年三月十日 行  
 大正十四年四月一日 増補再版

【定價金五圓】

著者 坂井 衡平  
 發行者 伊藤 小四郎  
 印刷者 竹内 喜太郎  
 印刷所 日清印刷株式會社

發行所 誠之堂書店  
 大賣捌所 二松堂書店  
 電話神田區九四九番  
 振替東京四七七二番  
 東京市神田區鍛冶町四番地  
 東京市神田區錦町一ノ十六

82-181



1149



